

そこでこの兩夜は月を賞するによい晩なのである。

として殊に月を詠ぶ事、大かた李唐の世より盛にして、詩人・文人其詠多しといへど、古樂府に蟬蟻の曲あり。漢人の中秋月なきによりて此曲を作るとある時は、漢の世よりもあることには云々。九月十三夜の月を詠ぶこと、もろこしには、さして文どもにも稀也。日本にては菅丞相宰府にて九月十三夜の月を見る詩あれば、其頃よりある事に云々。後世之を八月十五夜の月に對して、「後の月」といふ。【婁宿】所謂二十八宿の一であるが、この二十八宿といふのは、支那の古い天文学で用いた名稱で、天全體を二十八に區分するのである。(二十八といふ数は、月が天球を一週する日数が大體二十八日なるより起つたものだといふ)。さうして此所にいふ「婁」(タ、ミとよんで居る)は、西方の一宿である。但し「宿」とは、星宿のこと、即ち「星座」といふに同じく、天球上に分布せる星をそれ／＼その散布の形狀によつて區分したものをいふのである。けれども此所にいふのは、この星座ではなく、二十八宿の一星づつを、一箇年の日數に割當てたものであつて、その割當て方によつて、何日が何の宿だといふ事になる。【此の宿清明なるゆゑに云々】各星宿にはそれ／＼その特質があつて、この婁の宿は清明を特質とする。それでこの夜の月はよくさえて見えるのだといふのである。文段抄に云ふ「婁は西方の宿なれば、秋の時にあひて、金氣なれば、清明なる事さもあるべし。【月をもてあそぶに良夜とす】月を賞するのによい晩なのである。

二四〇

しのぶの浦の蟹のみるめも所せく、くらぶの山ももる人しげからむに、わりなく通はむ心の色こそ、淺からずあはれと思ふふし／＼の、忘れがたきことも多からめ。親はらからゆるして、ひたぶるにむかへすゑたらむ、いとまばゆかりぬべし。世にありわぶる女の、似げなき老法師、

忍ぶ戀路も人目がうるさく、間にまぎれて通ひ行くにも、其所にはやはり絶えず女の親兄弟の監視がある。

あやしの吾妻人なりとも、にぎは、しきにつきて、「さそふ水あらば」などいふを、なかうどいづかたも心にきさまにいひなして、知られず知らぬ人を迎へもて來たらむ、あいなさよ。何事をか打出づる言の葉にせむ。年月のつらさをも、「分けこし端山の」なども相語らばむこそ、つきせぬ言の葉にてもあらめ。すべて餘所の人のとりまかなひたらむ、うたて心づきなき事多かるべし。よき女ならむにつけても、品くたりみにく、年もたけなむ男は、かくあやしき身のために、あたら身をいたづらになさむやほと、人も心おとりせられ、わが身はむかひ居たらむも、影はづかしくおぼえなむ、いとこそあいなからめ。梅の花かうばしき夜の朧月にたすみ、御垣が原の露分け出でむ有明の空も、我が身さまに忍ばるべくもなからむ人は、たゞ色このまさらむにはしかし。

戀は、まゝならぬ所に眞の味はひがあるとは、前にも言つた事であるが、此所もやはりそれに似た意味を言つたもので、世間普通の平凡な結婚とか、或は生活の爲に男を持たうといふやうな女を、たゞ仲人の口車に乗せられ、却つて妙な氣苦勞もあり、又一種の侮蔑心も起り、何にしても面白くはない。要するに後に残る懐かしい思出も何もないやうな事なら、初から戀などはしないがよいといふのである。

【しのぶの浦の蟹のみるめも所せく】「しのぶの浦」は、岩代信夫郡の浦をいふ。但し和歌の用語として、人目

二四〇】しのぶの浦の

ある。さういふ所を無理に通つて行く仲にこそ、深い情も見え、しみじみとかはゆく思ふ數々の事の、何時までたつても忘れられない思出が多いであらう。これに反して親・兄弟も承知し、ちゃんと自分の妻と定めて、誰に憚ることもなく、家に迎へたやうなのは、何のゆかしみもなく、見るのも厭なく、くらむであらう。世の中に暮しかねて居る女の、不似合な老法師や身分のない東國人でも、たゞその富裕な點に心を引かれて、「誰でもよい、一緒になつてやらうといふ人さ

へあれば、何處へもついで行く」などと言ふのを、仲人が男女何れに對しても、相手の方を、いかにもよささうに言ひこしらへ、かくて全く知りも知られもせぬ人を妻として迎へるといふやうなのは、實につまらない事である。さういふ仲では、たとひ夫婦となつたところで、言出す話の種もあるまい。年來の戀のつらさを語るにつけても、「分け來し端山の」などといつて、語り合つてこそ、話は何時までも盡きないだらう。すべて餘所の人の謀酌によつて成立したやうな結

をしのぶ意に使ふのである。「みるめ」は「海松」で、妻が刈取るもの、これを人が見る意の「見る目」にかけたのである。「所せく」は、窮屈。「くらぶの山ももる人しげからむに」「くらぶ山」(暗部山)は、古歌によく出る山城の名所。後世「鞍馬山」と稱する山の古名だといふ。古今集「梅の花匂ふ春べは倉部山開にこゆれどしるくぞありける」(春)、「秋の夜の月の光しあかければくらぶの山もこえぬべらなり」(秋)等を始め、多くは暗い意にかけて使つてあるが、暗いといふ事と戀とは關係があるので、間にまぎれて戀人に逢はうとしても意を含めて此所は使つたのである。「もる人」は、守る人、即ち所謂山守で、それを父母・兄弟など、女の番をして居る者のあるにたとへたのである。「しげからむ」は、注意して居る人が多くて、隙間もない意。「わりなく通はむ心の色こそ」「わりなく」は、無理に。さういふ人目の多い所を、無理をしてでも通つて行く人の心。「心の色」は、こゝろもち。風雅集(戀)に「涙をばもらさずとも物おもふ心の色のえやはかくれむ」「淺からずあはれと思ふふし」の「淺からず」は、「あはれと思ふ」を修飾する語と見ず、文章の上では寧ろ「淺からず思ひ又あはれと思ふ」と對立になつて居るものと見た方がよからう。さて「淺からず」は、無理をしてでも通つて来る男の深い情。「あはれと思ふ」は、しみじみと深く心に感じ思ふ。「ふし」は、事々、簡條々々などの意、即ちいろいろの事といふやうな意である。【忘れがたき事も多からめ】何時までたつても忘れられない、深い思出となる事が多いであらう。【親はらからゆるして】「親はらから」は、男の方、女の方、どちらとも見られるが、此所は大體男を中心として相手の女の親兄弟が、やつても差支ないと同意したことをいふ。【ひたぶるにむかへす五たらむ】「ひたぶるに」は、一途に、全然などの意で、ちゃんと自分の妻として定めてしまふをいふ。餘所に別れて居る間は、人に知れてはならぬと思ひ、又誰か外の男が来て取つてもならぬと思ふが、ちゃんと我が妻と定めて自分の家に迎へてしまへば、もうそんな氣兼ね心配もない。「むかふ」は、女を自分の家に迎へ取る意。「据う」は、妻として定め置く。「す五たらむ」は、「す五たらむ」の意である。【いとまばゆかりぬべし】「まばゆし」は、何となくうるさいやうな氣がして、其方を見る氣にならないといふ意。【世にありわぶる女】世の中に暮しかねて居る女。親などもなく、財産もなく、生計に困つて居るやうな女。【似げなき老法師】「似げなき」は、不似合な。これは主として年齢についていふので、若

婚では、實際どうも氣にくだらない厭な事が多いであらう。又さういふ結婚では、女が若くて美人であると、それにつけても、身分が低く、顔が醜く、年も取つた男は、「自分のやうな、つまらない者の爲に、あの女が一生を棒に振らうや、そんな事はあるまい。結局これはたゞ財産の爲だなど、女に對する輕蔑の念も起り、我が身は又差向ひで居るのも、自分の妻が恥づかしいやうな氣がするだらう。さういふ風では全く以てつまらないだらうと思ふ。梅の花が芳しく匂ふ春の臘

い女が醜い老人の法師の妻にならうとするをいふ。【あやしの吾妻人】「あやし」は、下品な、身分のない。「吾妻人」は、東國人。句解に「こゝのあづまは、邊鄙の義なり。あながちに東國をさすにあらず」と書いて居るので、今もさう書いた註釋書があるが、これは寧ろ邊鄙な地方の代表として東國を擧げたと思ふべきである。【にぎはしきにつきて】「にぎはしき」は、富裕の意。「つく」は、その方に心が向く、又心を引かれる意で、老法師であらうが東國人であらうが、財産のある方へ心を引かれて。【誘ふ水あらばなどいふを】古今集(雜)に「文屋康秀が三河津になりて、縣見にはえ出で立たじやと言ひやれりける返事に詠める、わびぬれば身をうき草の根を絶えて誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ」とある小野小町の歌を引いたので、此所の意味はたゞ離れもよいから、来いといつてくれる者さへあれば、何處へでも行く、誰にでも身を任せようとなつたといふのである。【なかうどいづかたも心にきさまにひなして】「なかうど」は、仲人、これは今日いふものと同じである。「いづかたも」は、男の方も女の方もどちらへも。「心にきさまに」は、いかにもよささうに。「いひなして」は、實際はよくなくても、すべてよいやうにこしらへ言ふ意。【知られず知らぬ人を迎へもて來たらむあいなきよ】「知られず」は、此方が先方に知られて居ないこと、「知らぬ」は、此方が先方を知らぬこと。お互に全然知らない間柄の人(女)を妻として迎へることのつまらなさよ。【何事をか打出づる言の葉にせむ】「打出づ」は、言出す。何を話の材料にしようや、何もなからうの意。即ちさういふ結婚では、一緒になつたところで、何も話の種はあるまいといふのである。【年月のつらさをも】年來の戀の苦しさを。上にいふやうに、知られず知らぬ間柄で、偶然一緒になつたやうな夫婦では、何の面白みもない。今こそかうして誰に氣兼ねなく一緒に暮して居るもの、過去を思へば、お互に随分苦勞もしたといふやうなこそ云々といふ意になる。【分けこし端山のなども相語らむこそ】新古今集(戀)に「筑波山端山しげ山しげけれど思ひ入るにはさはらざりけり」とある歌の句を取つたので、「端山しげ山しげけれど」は、筑波の山に草木の生ひ茂つて居ることを、人目のしげき意にたとへたのである。さて上の句との關係は、年來のつらさを語るにつけても、それはちやうどあの新古今の歌の句のやうに、どんな障得があつても、少しも挫けず、とうとうかうして楽しい家庭を持つやうになつたのだといふ風にでも話し合ふならばの意となる。【つきせぬ言の

月夜に、戀人の許を訪ねて、その垣根の所などに佇むとか、或は宮仕の女の局に泊つて、翌朝早く有明月の影を踏んで、御垣が原の露を分けてついで行くとか、さういふ懐かしい思出を我が身の上を持つことの出来ないやうな人ならば、最初から戀などはしないがよい。

業にてもあらぬ」その楽しい思出は、何時まで話しても盡きないだらうの意。「すべて餘所の人のとりまかなひたむ」すべて第三者が中に入つて、二人の仲を取計らふ、即ち謀計したやうな結婚は、「まかなひたらむ」は、「まかなひたらむ」の意。「うたて心づきな事多かるべし」「うたて」は、厭惡の情をこめて歎息するやうな氣持を表はす語で、いややどらうといふやうな意味になる。「心づきなし」は、氣にくはない、氣に入らない。さういふ結婚では、何彼につけて、氣に入らない、厭な事が多いであらう。「よき女ならむにつけても」「よき女」は、美人。かうして戀愛關係も何もなく、仲人まかせで結婚した間柄では、女が美人であると、それにつけて又男にはいゝる氣苦勞があるといふのである。「品くだりみにくく、年もたけなむ男は」「品くだり」は、身分・種姓の賤しいこと。前に「あやしの吾妻人なりとも」とあつたのに照應するのである。「みにくく」は、容貌の醜いこと。女にしても、男にしても、相手が美しくして自分が醜いと、とかく邪推し、嫉妬し易いものである。「年もたけなむ男」は、年とつた男。前に「似げなき老法師」とあるのはこの例である。「かくあやしき身のために云々」「かくあやしき身」は、男が自ら思ふ事で、自分のやうな、こんなつまらない者の爲に。「あたら身をいたづらになさむや」は、惜しい一生をむだにしてしまはうや、そんな筈はないの意。「人も心おとりせられ」「人」は、男を「我」といふに對して女を指す。「心おとり」は、思つたよりもくだらん奴だと輕蔑の念が起ること。但し「人も」は女の方から男に對して輕蔑の念が起るといふのではなく、男が女に對しても自然輕蔑の念が起るやうになるといふのである。ところが上が「いたづらになさむや」とあるから、續き工合が悪い。しかしこれは書き方が悪いので、意味をいへば、「いたづらにしようや、そんな筈はない。やはり生活に困つて、こんな事になつたんだなと、輕蔑の念も起り」である。「我が身はむかひ居たらむも影はづかしくおぼえなむ」「我が身」は、上の「人」に對していつたので、女に對してはさういふ氣がするが、又男自身については、さういふ若い美しい女と差向ひで居ては、自分の醜い姿が恥づかしいやうに思はれるだらうの意。但し「おぼえなむ」は、「おぼえなむは」、或は「おぼえなむ、かくては」などの意と見ればよい。「いとこそあいなからぬ」「こそ」を除いて「いとあいなからむ」とすれば分り易い。實につまらないだらう。「梅の花かうばしき夜の臘月にたすずみ」春の夜の、空には月がおぼるに霞み、地

には梅花が芳しく匂うて居る、さういふ時に女の許へ訪ねて行つて、直入つてもいゝだらうか、人は居やしないだらうかなどと思ひ、ためらひつゝ立止つて居ること。「御垣が原の露分け出でむ有明の空」「御垣が原」は、禁中の御垣の内をいふ。「露分け出でむ」は、「原」といつたので、その原の草葉の露を踏分けて出て行くと、大袈裟にいつただけで、實は宮仕の女を戀人として居る男が、朝早く有明月の影を踏んで女の許から出て行くことをいつたのである。さうして前の句が春の夜であるから、この句は秋の朝としたのである。「我が身ざまに忍ばるべくもなからむ人は」「我が身ざま」は、我が身の上についての意。「忍ばるべくもなからむ人」は、懐かしく思ひ出す事の出来ないやうな人、換言すれば、懐かしい思出の種を蒔き得ないやうな人。(正徹本には「我身のさまに」とある)。「色このまざらむにはしかじ」戀をしない方がよいの意。もつと卑俗な言ひ方を用ゐれば、女なんぞをこしらへない方がよいといふのである。但し上の句を文字通りに解釋すると、さういふ經驗を持たないやうな人は戀をするなといふ事になり、初戀は戀の數に入らないやうな事になつて、ちよつと理窟に合はないが、それは文字に囚はれるからであつて、筆者の言はむと欲する所は、戀をするなら、さういふ戀をせよ、女をこしらへるなら、さういふ美しい思ひ出の種となるやうなこしらへ方をせよ、後になつて何の思出もないやうな、乾からびたやうな戀なら、初からしない方がましだといふのである。

二四一

望月のまどかなる事は、しばらくも住せず、やがてかけぬ。心とゞめぬ人は、一夜の中に、さまでかはるさまも見えぬにやあらむ。病のおもるも、住する隙なくして死期すでに近し。されどもいまだ病急ならず、死に赴かざるほどは、常住平生の念に習ひて、生の中におほくの事を

〔二四一〕望月のまどかなる事は

十五夜の月は圓いが、その圓さは、暫くもそのまゝの情態で居るものではなく、直又缺けてしまふ。

世間の事などは、何もするに及ばない。すべて我々の心に起る願望は皆妄想である。だが心から起つて来たれば、妄念が来て心迷はし、たゞひ一つのことだつて、うしてはなれぬ。さへてなど居らず考へて、直に萬事を放擲し、佛道に向つて進むがよい。さうすれば、我々には何の障りもなく、仕事もなく、心身共に永く安靜である。

人間が何時までも違順の爲に心を勞するのは、

【世の中には、かういふ人間が極めて多いものだといふ意。】此の事まづ人々急ぎ心におくべし。【此の事】は、上述の事實を指し、うつかりして居れば、何も出来ずに直死んでしまはねばならぬといふ事をおくべし。【心におくべし】は、念頭に置く、しつかりと頭の中に置いて忘れずに居る。【心におくべし】を、句解・大全・鐵箱・参考・弘賢本等には「心得おくべし」とある。【如幻の生の中に何事をかなきむ】幻のやうにはかないこの生涯の中に、何事をしようや、何事も出来ない。【すべて所願皆妄想なり】「妄想」は、正しからざる分別によつて種々虚偽顛倒の事を思念すること。我々の心中に起る願望は、要するに皆虚妄の思想に過ぎないといふのである。【所願心に来らば】いろ／＼の事をやりたいといふ希望が心中に起つて来たならば、【妄心迷亂すと知りて云々】「妄心」は、「妄想」「妄念」と同じ意。「迷亂」は、迷はし亂す。それは妄想が起つて、我々の心を迷はし亂すのだと思つて、たとひ一つでも、その所願の事をしてはならぬといふのである。【萬事を放下して】「放下」は、「放棄」「放擲」と同意。すべての事を放擲してしまつて。【道に向ふ時】所願なんかは棄ててしまつて、只管佛道の修行といふ方面に向ふ時は。【さはりなく所作なくて云々】「さはり」は、障り。信仰に進まむとする自分の精神を邪魔するもの。「所作」は、言ふこと、爲すこと、思ふこと等、それらの事を廣くいふ。初から萬事を放擲してかゝれば、精通の道に障りとなるいろ／＼の願望なども起つて来ないし、又心身を勞するやうな事もなくてすむわけであるから、精神も肉體も共に永く安靜であり得るといふのである。

二四二

とこしなへに違順につかはるゝ事は、ひとへに苦樂のためなり。樂といふは、このみ愛する事なり。これを求むる事やむ時なし。樂欲する所、一つには名なり。名に二種有り、行跡と才藝

畢竟たゞ苦を去り樂を得むとする爲である。此所に樂といふのは、好み愛する事である。人間は常にこれを求めて止まないが、然らばその好み願ふ所とは、どういふものかといふに、その第一は名譽である。但し名譽に二種あり、一は行狀における名譽、他は才藝における名譽である。さて第二は色慾、第三は食慾である。人間の欲望はいろ／＼あるが、詮じつめるに、この三つが一番大きい。ところが此等の欲望は顛倒した物の考へ方から起つたもので、その爲にいろ

との譽なり。二つには色欲、三つには味なり。萬のねがひ、此の三つにはしかず。是顛倒の相よりおこりて、若干のわづらひあり。求めざらむにはしかじ。

前段には先づすべての所願を放擲して直ちに道に向へといつたが、それにしても人間にはどうもいろ／＼の慾がある。さうしてこの慾がとかくいろ／＼のさまたげをする。そこでその慾の最も大きいもの、即ち名譽慾・色慾・食慾の三つを擧げて、此等は何れも顛倒した考から起つて来るものであるから、さういふ慾は初から棄ててしまふがよいといつたのである。

【とこしなへに違順につかはるゝ事】「違順」は、違境と順境。自分の意にかなふ境遇を「順」といひ、意にかなはざる境遇を「違」といふ。ところで自分の意にかなはない境遇に居れば、常に心に不満を感じ、苦痛を感じ、之に反して自分の意にかなふ境遇に居れば、心中は常に楽しい。「つかはるゝ」は、使役される。その爲に心身を勞するをいふ。人間といふものは、自分の意にかなはない境遇を去り、意にかなふ境遇に在りたいと思ふことから、いつまでもその心身を苦しめ煩はされるものだといふ意。【ひとへに苦樂のためなり】それは畢竟たゞ苦を去り樂を求めむとするが爲である。【樂といふはこのみ愛する事なり】然らばその「樂」といふのは何かといふに、これは好み愛することだといふのである。「苦」は、自分の心に欲しないことをする場合、之に對して、自分にかうありたいと願ひ思ふことをするのは「樂」である。但しこの場合は、漢字の「樂」といふ字の意義は、好み愛することだといふのではない。次に直「樂欲」といふ語があるが、この「樂欲」の「樂」と此所にいふ「樂」とは別である。【これを求むる事やむ時なし】「これ」は、「苦樂」の「樂」で、自分の願ひ通りにありたいと思ふ念慮は止む時がない。即ち人間といふものは、絶えずあゝもありたい、かうもありたいといふ風にいろ／＼の欲望を持つて居るといふのである。【樂欲する所一つには名なり】「樂」の字は、音楽の意の場合は音ガク、たのし、たのしむの意の場合は音タク、今一つ、このむ、ねがふの意の場合は音ガウ、又ゲウである。よつて此所の「樂欲」は、ゲウヨクとよみ、

二四二 二とこしなへに違順につかはるゝ事

ろの苦惱が起つて来る。だからかういふ欲望は初から棄ててしまつて求めないのがよい。

このみねがふ意になるのである。随つて同じ「樂」の字であるが、前の「苦樂」の「樂」と、この「樂欲」の「樂」とは意味が違つて居る。人間が好み願ふことはいろ／＼あるが、その中主なるものを擧げると、三つある。その中の一つは先づ名譽をほしがることだといふのである。【名に二種あり】くはしくいへば、その名譽にも二種ある。それは次の二つだといふのである。【行跡と才藝との譽なり】「行跡」は、行狀。自分の行狀が道徳的にすぐれて居るといふ名譽と、自分の才智・藝能が他よりもまさつて居るといふ名譽と、この二種である。【味】飲食の慾、即ち所謂食慾である。うまい物が食ひたい、よい酒が飲みたいといふ、さういふ欲望をいふ。【萬のねがひ此の三つにはしかず】人間にはいろ／＼の欲望があるが、その中一番大きいのは、この三種即ち名譽慾・色慾・食慾の三種だといふのである。【是顛倒の相よりおこりて若干のわづらひあり】「顛倒の相」は、さかさまなすがた、即ちさかさまな物の考へ方をいふ。例へば無常を常住と思ひ、苦を樂と思ひ、不淨を清淨と思ふの類。「若干のわづらひ」は、多くの煩悶・苦惱。人間にはいろ／＼の欲望がある。その中最も大きいものは、右にいふ三つであるが、實はかういふ欲望は、すべて物をさかさまに考へる迷ひの心より起るのである。さうしてかういふ迷ひの爲に、人間にはいろいろの煩悶が起るやうになるといふのである。【求めざらむにはしかじ】さういふ慾は初から棄ててしまふがよいといふ意。

二四三

八つになりし年、父に問うて云く、「佛はいかなるものにか候らむ」といふ。父が云く、「佛には人のなりたるなり」と。また問ふ、「人は何として佛にはなり候やらむ」と。父また「佛の

八つになつた年であつた。自分分は父にこんな質問をした。

をしへによりてなるなり」とこたふ。また問ふ「教へ候ひける佛をば何がをしへ候ひける」と。また答ふ「それも又さきの佛のをしへによりてなり給ふなり」と。またとふ「その教へはじめ候ひける第一の佛は、いかなる佛にか候ひける」といふ時、父「空よりやふりけむ、土よりやわきけむ」といひてわらふ。「問ひつめられて、え答へすなり侍りつ」と諸人にかたりて興じき。

佛とはどんなものかといふ質問を提出し、次から次と問うて行つて、とう／＼父を困らせたといふ少年時代の記憶をそのまま書いたのである。

【八つになりし年】たゞ「八歳の時」といふだけの意味。【父】ト部兼顯。【佛はいかなるものにか候らむ】當時は佛教が盛んであつたから、子供の疑問も「佛」に對して起つたので、今日ならば大體「神様つてなかに？」といふ所である。今日の我々が考へるやうな意味における「佛とは何ぞや」ではない。【問ひつめられてえ答へすなり侍りつと云々】この「問ひつめられて云々」は父の言葉である。随つて「諸人に語りて興じき」も、父がこの話を人々に言つて聞かせて、面白がつて居たといふのである。

この段は最後であり、それに考へ方によつては、可なり意味深長なものやうにも取れるので、古い註釋書類には、これについていろ／＼むづかしい事を書いて居る。又穿鑿好きは、史記の孟嘗君傳などを引いて、「此文法を以て此段を書けり」(句解)などとも言つて居るが、この段はさうむづかしく考へるべきものではあるまい。一體子供といふものは、思ひもかけない事を根掘り葉掘り聞きたがるものである。さうして何か一つ問ひ出すと次から次と問うて行き、しまひには問はれる大人が困つてしまふ。これは四五歳から七八歳ぐらゐまでの子供にはよくあ

二四三 八つになりし年

問をした。「佛はどんなものですか。」すると、父が「佛には人がなつたのだ」といふ。で又問うた。「人はどうして佛になりましたか。」父は又「佛の教によつてなつたのだ」と答へた。で又問うた。「その教へた佛をば、何が教へましたか。」答「それらも亦先の佛の教によつてなつたのだ。」問「その教へ始められた第一の佛は、どういふ佛でしたか。」かう言つた時に、父は「さあ、空から降つたか、土から湧いたか、そんなものだらうね」といつて笑つた。さうして、後に「子供

から問ひつめられ
て、答へられなく
なりました」と人
人に話して面白が
つて居た。

る事だが、注意力がよくなったたり、頭が悪くなったたりして居る大人は、突然かういふ子供の質問に遇ふと、非常に驚く。さうして中には自分の子は天才だらうなどと早合點をして、ひそかに得意になつて居る人もある。しかしこれは別に驚くべき事でも何でもない。随つてこの場合における兼好の質問も、別に感歎する程の事ではない。内海氏が兼好を評して、「おそろしい明察な理性のはたらし」の持主とし、「この明察な理性は、はやくも八歳の少年であつた時代からして、その鋒銛をあらはしてゐた」といひ、又沼波氏が「子供はよく斯る種の質問を發する」が「たゞ、この佛の問題を提げたと云ふ所に、すでに兼好の個性が顯はれて居る」といつて居られるのは、共に少し褒め過ぎではないかと思ふ。何となれば、七八歳の子供がかういふ質問をするのは、前にも言ふ通り、普通の事であり、又その問題が佛に關する事であるのも、この時代としては、必ずしもさう珍しい事ではないからである。しかし兼好自身からいへば、やはり多少の誇を伴ふ記憶であつたかも知れない。少くとも面白い記憶であり、懐かしい記憶ではあつたであらう。而も又見方によつては、深い意味のこもつたものとも見られないではない。そこで分つたやうな、分らないやうな、さうして又深い意味のあるやうな、ないやうな此の一段を以て、わざと最後の段としたのではないかと思ふ。内海氏は云ふ「作者はかう長々と書いてきて、さてちよつとその擲筆の便宜にまよつたのである。そこでいろ／＼と考へてる中に、ふと浮んだ幼時のその思出を、そのまゝ筆に上せたのである。云々。別に何といふことはないが、これでちやんとよくこの一大雜篇が收められてゐるではないか」と。これには私も同感である。確にこれでちやんとまとまりがついて居る。

野佐 徒然草新講 終

解題

徒然草の著者は兼好である。但しこの「兼好」といふ名は、出家後その俗名を坊さん風に音讀したもので、出家前は卜部兼好といつた。

今尊卑分脈によつて、その家系を調べて見ると、天見屋根尊から出家家筋で、すつと古い先祖の「跨耳命」といふのが仲哀天皇に仕へ、龜卜の術に達して居たので、姓「卜部」を賜うたといふ。それから大分後になつてからの事であるが、この家は代々その名に「兼」の字を附けることになつて居る。これは一條天皇の時、兼延といふ人が天皇の意になつて、御諱「懐仁」の「懐」に通ずる「兼」の字を賜うたのによるといふ事である。なほこの家は、後に「吉田」と稱し、その子孫は明治になつて、華族に列せられて居るが、しかし「卜部兼好」を一に「吉田兼好」といふ、その「吉田」はこれとは別で、彼が一時住んで居た京都の地名「吉田」によつたものらしい。

彼の生れた年については、弘安五年とする説と同六年とする説と二つあるが、いづれも確な根據があるものではなく、寧ろその歿年とされて居る觀應元年から逆算し、その數へ方によつて、弘安五年となつたり六年となつたりして居るのではないかと思ふ。それは五年とした本も六年とした本も、共にその歿年を觀應元年としたものの存することによつて分る。尤もその歿年についても餘り確な證據はないが、今日の所先づ最も確な證據となるのは、諸寺過去帳に、法金剛院の

過去帳により、「兼好法師、觀應元年四月八日」とあるものである。その歿年が觀應元年であり、その享年が若し普通に信ぜられて居る通り、六十八であつたとすれば、その生れたのは弘安六年となるわけである。

兼好の父は兼顯といつた。この人が治部少輔まで進んだことは、系圖で分るが、くはしい傳は分らない。系圖によると、子供は男三人で、慈遍・兼雄・兼好といふのであるが、なほこの外に女子があつたかも知れない。しかし餘り身分の高い人でもないから、さうくはしい記録は残つて居ないのであらう。(本朝高僧傳には、慈遍を兼好の弟として居る。又右の三人の外に兼矩といふ者があつたとする説もある。)

一體兼好の傳を書いたものは、古來いろくあり、中には随分くはしいものもないではないが、その大部分はあてにならない。そこで、こゝには最も確實と思はれる材料だけによつて、その大體を書くこととする。

先づその少年時代の事から見るに、これについては、徒然草の最終段に「八つになりし年云々」として、又との問答が書いてあるが、それ以外、何もよるべきものはない。大日本史に「兼好幼而聰悟」と書いてあるのも、恐らくこの記事によつたものであらう。

成長後は官吏となつたが、その官職・身分については徹書記物語に、

久我か徳大寺かの諸大夫にてありしなり。官は瀧口にて有りければ、内裏のとのみにまゐりて、つねに玉體を拜したてまつりける也。後宇多院崩御なりしによりて、遁世しける也。やさしき發心の因縁なり。

又卜部系圖には、

藏、左兵衛佐とある。

大日本史には、この「佐」を「尉」に改めて、「仕後宇多帝二任左兵衛尉」とあるが、これは大日本史の「尉」としたのが正しからう。

近頃の註釋書には、この官職などの事についても、可なりくはしい記事があつて、「伏見・後伏見の間、禁中の瀧口に補せられ、その後、後二條院・花園院に至るまでに、六位藏人に及び、左兵衛尉にも任ぜられ、傍ら後宇多院の仙洞へも北面として参つた」などと、いかにもはつきりと書いたものもあるが、かう明記するだけの材料は恐らくあるまい。殊に伏見天皇や後伏見天皇の時代に仕へて居たかどうかは疑問である。大日本史にたゞ「仕後宇多帝二任左兵衛尉」と極あつさりとして書いてあるのも、この點を考へたからであらう。尤も後宇多帝に仕へたといふのも、實は頗る曖昧な書き方で、之を事實の上から観ると、後宇多天皇の御讓位は兼好五歳の時であるから、いくら聰明な兼好でも、まさか三歳や四歳で瀧口の役を勤めて居たといふのではあるまい。

それでは確に仕へて居たのは、何時の御代かといふに、それは先づ後二條天皇の時代であらう。彼の家集に、

後二條院の書かせ給ひつる歌の題の裏に御經書かせ給はむとて、女院より人々によませられ侍りしに、夢に逃ふ戀をうちとけてまどろむとしもなき物をあふと見つるやうつなるらむ

といふのがあるによつて推測し得る。後二條天皇は後宇多院の御子であらせられるが、延慶元年御年僅か二十四を以て崩

ぜられた。この時兼好二十六歳。「女院」といふのは、御生母西華門院源基子である。彼が若し瀧口として仕へて居たとすれば、この天皇の御代ではなかつたかと思ふ。伏見・後伏見兩帝は、その系統からいへば、所謂持明院流であるから、大覺寺派と見られる兼好が果してこの兩朝に仕へて居たかどうか、それは疑問である。

徒然草第三八段に「當代いまだ坊におはしまし比云々」といふのがある。この「當代」が後醍醐天皇であることは、その段の註に言ふ通りであるが、この天皇はやはり後宇多院の御子にましく、御兄君後二條天皇の崩御後、直に又後宇多院の系統として坊に立たれたわけである。かう考へると、恐れ多い話ながら、大覺寺派と兼好との關係がさう淺いものではなく、後醍醐天皇が東宮としてあらせられた頃には、その御所へも折々出入して居たことが分るのである。思ふに後二條天皇崩御の後、主として後宇多の仙洞にお仕へ申して居たのではあるまいか。

さて徒然草を見ると、兼好が關東に下つたことを證する記事が二三ある。例へば第一九段の「なき人の來る夜とて魂まつるわざは、この比都にはなきを、東の方にはなほすることにてありしこそ、あはれなりしか、」又第三四段の「甲香は云々、武藏の國金澤といふ浦にありしを、所の者はへなたりと申し侍るとぞいひし、」又第一一九段の「鎌倉の海に鯉といふ魚は」などは、即ちそれである。さうしてこの關東下向が二回であつたことは、彼の家集に

一とせ夜に入りて、宇津の山をえ越えずなりにしかば、麓なるあやしのいほりに立入り侍りしかど、この度はそのいほり見えねば、

一夜ねし萱のまる屋のあともなし夢かうつゝかうつの山ごえ

武藏國金澤といふ所に背すみし家のいたる荒れたるにとまりて、月あかき夜、

故郷の淺茅が庭の露のうへに床は草葉とやどる月哉

などあるのによつて知ることが出来る。

しかしこの關東下向が何時頃の事であつたか、又どういふ理由によつて二回も遠い所へ行つたか、それは共に明かではない。「先進續像玉石雜誌」には、第一回の下向を「兼好三十八九の頃にや」といひ、中村直勝氏も大體兼好三十六歳から四十一歳までの間の事であらうといはれて居るが、大體その邊の所であらう。

下向の原因については、失戀によるとするのが普通である。玉石雜誌にいふ、

兼好は仙洞に参り仕らまつりて、瀧口にとの居しけり(此歲兼好三十七歳)。ある夜渡殿の方よりいそいで最妍麗なる女房の色珠に艶かなる衣きて、眉頰つき美しく、髪ゆらりと長く、ことさまのゆゑしげなれば、目とまる心地して見おくりぬ。傍なる人に問へば、中宮の御使に参りし人にこそと云ふ。云々。それなん伊賀權守橋成忠のむすめにて、中宮の小辨にてこそあめれと云ふをたのみに、ちかく居よりて聲きくばかりの契にても願はしくて、

聞きてこそおどろかれぬれ雪の内も待つべかりける營のこゑ

女も岩木にしもあらねば云々、遂に逢ひけり。云々。父權守云々、打腹だち、田舎へ遣はし、一間にこめ固く守らせけり。兼好これを聞きて、いか計りかなしかりけん、おしはかるべし。さてこそ都のすま居もまばゆくなりて、東の方へさまよひけり。

この説は今日も大體は信ぜられ、塚本氏の「徒然草解釋」などにも、「その事實は姑く疑問に付するとしても、彼の放浪の動機が破れた戀の悶えに在つたといふ事は事實であるらしく考へられる」と書いてあるが、私は之を信じない。恐らく動機はそんなロマンチックな事ではあるまい。第一、この下向は、決して「放浪の旅」ではない。ちやんと豫定の立つて居るものであつた事は、出發に際し、清閑寺の道我僧都(この人、後には僧正になつた。七頁參照)に「秋には歸つて來

るから」と言つて居るのを見ても分る(家集による)。
それでは、どういふ用事で行つたかと問はれると、それは答へられない。これについて、中村氏はこんな事を言つて居られる。

彼の關東下向を大覺寺統の間際となつて鎌倉の様子を探りに出かけたものではないかと申したら、言ひすぎだらう、穿ちすぎるだらうと叱られるかも知れませぬけれども、後に申しますやうに、彼の交友を見、彼の思想を討論しますると、それが強ち附會でないと思はれるだらうと存じます。(日本文學叢書)

これと一緒に見られては、中村氏が迷惑されるかも知れないが、野々口隆正の「兼好傳考證」にも、増鏡の「すぎにし比、資朝山伏のまねびして云々」といふ條を引いて、「とあるによりておもへば、兼好の東下りも又すこしはあやしき事になむ。後この法師北朝の僧官また賜を受けざりしを合せておもへば、はやく資朝卿と心を合せ、東に下りすみて、北條一家に歌もて交り、虚實をさぐりけむかし」と言つて居る。

隆正の説は、いかにも江戸時代式な考へ方で、「歌もて交り、虚實をさぐる」などといふ事は、どうも兼好にはありさうにも思はれないが、しかし何か特別な用事があつての事には違ひない。とにかく失戀の結果、旅行に出るなどといふ詩人的な事ではあるまい。小辨との戀愛そのものも、恐らく一種の小説に過ぎないだらう。(兼好が戀をしなかつたといふのではない。それは自ら別問題である)。

兼好の關東滞在は、どのくらゐの間であつたか。それについて玉石雜誌には「其年も過ぎて、法皇より御召ありて、都に歸りなんとしける」と言ひ、この説も今日大抵そのまゝ、信ぜられて居るやうであるが、證據となるものはない。但し家

集に、

先坊御時、御歌合につかうまつりし五首、元亨三年の事にや

秋深き霜おきそふる浅茅生にいく夜もかれず拂つ衣かな

今宵だに打ちも拂はでさむしろに積れる塵や人に見せまし

くりかへすたのみもいさや神垣の森のしめなはくちし契は

今日のみといはたのをに秋くればはそ色づきふる時雨哉

さゝわくる露とも見えし我が袖を秋より後は何にまがへむ

とあるによつて見れば、元亨三年(兼好四十一歳)の秋には、彼が京都に居たことは確である。又

後宇多院より、よめる歌どもめされ侍りけるに、たてまつるとて、僧正道我に申しつかはし侍りける

人しれずくちはてぬべきことの葉の天津空まで風にちるらむ

返し、僧正

ことわりや天津空よりふく風ぞ森の木の葉をまづさそひける

とあるのを見ると、それが鎌倉から歸つて後の事であることは確である。さうして院の崩御が正中元年六月の事であり、この年は四月の下旬から御重態にならせられたことが増鏡(春のわかれ)に書いてあるから、それによつて考へると、この歌を上つたのも、大體元亨三年頃の事ではないかと思はれる。

さて兼好が出家したのは何時の事か。これも確な事は分らないが、それは彼の仕へて居た後宇多院の崩御が原因であるとするのが、古來普通の説である。院の崩御は正中元年六月の事であるから、さうすると、この年の事であらう。家集に

世をそむかむと思ひたちしころ、秋の夕暮に

そむきてはいかなる方にながめまし秋の夕もうき世にぞうま
といふ歌のあるのを見ると、少くとも崩御後直に出家したのではない。なほ家集に

本意にもあらで年月へぬることを

うきながらあれば過ぎゆく世の中をへがたきものと何思ひけむ

習ひぞと思ひなしてや慰まむ我が身ひとつにうき世ならねば

若し此等の歌が當時のものとするれば、出家をしようとしても、思ふやうにならない事情があつたのかも知れない。しかしそれは確ではない。又

世の中思ひあくがる頃、山ざとに稻かるを見て、

世の中を秋田かるまでなりぬれば露も我が身もおき所なし

これは或は前の「そむきては」の歌と同じ頃の作で、やはり出家しようとして、まだ決行し得なかつた頃のものかも知れない。

何事も程あらじとおもへば、

憂きこともしばしばかりの世の中をいくほどいとふ我が身なるらむ

これはもう出家を決行するにきまつてからの作ではあるまいか。又

いづ方にも亦行きかくれなばやと思ひながら、今は身を心にまかせたれば、なか／＼ことたりてのみぞ過ぎゆく

そむく身はさすがにやすきあらましに猶山ふかき宿も急がず

萬事がちやんときまつてしまへば、心は却つてのんきになる。果して院崩御の年であるかどうかは分らないが、とにかく

いよく出家の決心をして、もう何時でも頭を剃ることが出来るといふ段になつてからの作であらう。

ところが兼好出家の原因について、中村氏は一つの異説を出して居られる。それは後宇多院の崩御よりは寧ろ兼好の所謂前坊、即ち邦良親王の薨去が彼に出家の決心をさせたのだらうといふのである。この邦良親王といふのは後二條天皇の第一皇子で、文保二年後醍醐天皇が位に即かれると、間もなくこの親王を立てて東宮とされたが、正中三年、即ち嘉暦元年三月御年僅か二十七を以て薨去になつた。元來この親王は後宇多院の非常に愛して居られた方で、後宇多院は崩御の時に至るまで、この親王の將來を氣にして居られたやうであるが、嘗にさういふ關係のみならず、心から人々にも悦服されて居た方と見えて、その薨去に際しては、御乳母の對の君はもとより、早速頭を下したものに、前大納言經繼・四條三位隆久・山井少將あつする・五辻少將ながとし・公風の少將・左衛門佐としあき等があり、中納言有忠の如きは、使者として鎌倉へ下つて滞在中、思ひがけない報知に接して、そのまゝかの地で出家した。女房にも、帥の君・兵衛督・内侍の君など、男女すべて三十餘人が様を變へた。「やんごとなき君の御時も、かくばかりの事はいとありがたきを、佛などのあらはれ給ひて、殊更に迷ふかき衆生を導き給ふかとも見えたり。御本性のいとなごやかにおはしましたしかば、近う仕うまつる限りの人は、年頃の御名残を思ふもいと忍びがたき上、大かたの世にもさしはなたれて、身をよくなきものに思ひすつるたぐひなど、さまざまにつけて、いとひそむくなるべし」と増鏡(春のわかれ)の記者は言つて居る。右に擧げた人々の中、經繼(この時六十九歳、元應二年以來前權大納言)は、兼好の家集にも「中御門入道大納言經繼卿の白河の山莊にて、これかれ題をさぐりて歌よみ侍りしに」と題した歌があるのを見ると、相當の親交もあつたらしいから、この時兼好も彼等と同時に遁世したとも見られないではない。しかし確にさうといふ證據もない。尤も家集には、

前坊御前に月の夜権大夫殿さぶらはせ給ひて、御酒などまゐりて、御連歌有りにしに、けむ、こう候よし人の申されたりければ、御さかづきたまはすとて、

まてしはしめぐるはやすきをぐるまの

と和せかけられて、つけてたてまつれと有りしかば、たちいりてにげむとするを、ながとしの朝臣にひきとどめられし

かば、

かゝる光の秋にあふまで

と申す。

といふのがあるが、中村氏も言はれる通り、家集は後に書いたものであるから、たとひ此所に「けむこう」と書いてあつても、たゞそれだけで親王の御在世中既に出家して居たといふ證據にはならない。(此所にある「ながとし」も親王薨去後出家した一人である)。

とにかく正中元年秋から嘉暦元年秋までの間に兼好が出家したのは確である。さうすると、四十二三歳で世を通れたこととなるわけである。

次に、出家後はどうしたか。これもはつきりとは分らないが、家集に

世をのがれて木曾路といふ所を過ぎしに

思ひたつきその麻ぎぬ(ぬの)あさくのみ染めて止むべき袖の色かは

とあるのを見ると、先づ木曾路へ行つたのであらう。但し木曾へ行くまでには、暫く京都近くの寺に籠つて居たのであらう。

木曾にはどのくらゐ滞在して居たか分らないが、吉野拾遺に次のやうな記事がある。

おなじ比(後村上天皇朝の初頃)、兼好法師が玉津島にまうで給へるとて、たづねおはせしに、いにしへ深く契りける中なりければ、いとうれしくて、むかし今の物語しけるに、古法皇(後宇多院)の和歌の道にふかくおぼしいらせ、御情の浅からせ給はで、かしこき御影とならせ給ひし(崩御のこと)悲しさのまゝに、世にながらふべき心地にもあらざりけらし。せめてのやるかたなきに、御後の世をもとおもひ給ふるまゝに、かゝる委となり侍れども、露の命の消えがたくて、かゝらむ世をまのあたりに見侍ることよと、袖をしぼられけるに、我も先帝の御情の忘れがたくて、御跡をもしたはまほしく思ひ給ふれども、さすがに思ひかへし侍りて、柴の戸ぼそには侍れども、心は浮雲の風にたゞよふらむさまして、はかなき夢路には、ふるさとの空にも通ひ、思ひとぢむれば、西の御空にもあこがれ、春の朝には吉野の花の梢にやどり、此の夕、哀を思ひつゞけては、さやけき月の影をも曇らせ、もろくも落つる木の葉を見ては、はかなき世を思ひめぐらす袖の時雨となりて、そめにし墨の衣もむなし、旅ゆく人を思ひ送りては、まだ見ぬ嶺をもこゆるにこそ。いかなる縁にもふれ侍りて、人目たえなむ山深き巖のほらにもをさまらでとこそ、なげきて過し侍りぬれといへば、誠にさには候へども、我一とせ木曾の御さかのあたりにさすらひ侍りし時、山のたゞずまひ、川のきよき流に心とまり侍りしかば、こゝにぞ思ひとどまりぬべき所にこそ侍れとて、

おもひたつ木曾のあさぎぬ淺くのみそめてやむべき袖の色かは

と詠じて庵を引結びて、しばし侍らひしに、國のかみの鷹狩に人あまた具し給ひて、山ふかき庵のほとりまでいまして、狩したまふさまの淺ましく、堪へがたかりければ、

こゝもまたらき世なりけりよそながら思ひしまゝの山ざともがな

とながめすて出で侍りき。それよりいづかたへ心とむべくもあらずと思ひとりて、ふるさとに立歸りて侍れば、世の中の亂れける程に、たゞ和歌をとまなひとして心をすまし侍らむより外はあらじと思ひ侍るにこそとのたまはせしに、誠に世をそむく心はひとしくこそありけれと、そゞろに袖をしぼり侍りき。

信州から都に歸つた時の事を「考證」には「後醍醐天皇又都へかへり給ふうはさを聞きての事なるべし」と言つて居る

が、これは徹頭徹尾兼好を南朝の忠臣として取扱ふから起つた事で、天皇の御動靜と兼好の歸京との間には恐らく何の關係もないのであらう。私は寧ろもつと以前の事ではないかと思ふのである。尤も京都に歸つても、氣が向けば、あちこち歩き廻つて居たには違ひない。その中世の中がだん／＼と亂れて来て、元弘の亂が起り、やがて後醍醐天皇は、笠置に隠岐に、思ひもかけぬ旅に出られるやうになつたのではないかと思ふ。かうなると、歌人とか隱士とかいふ類のものは、保護をしてくれるものがなくなるので、自然幾分生活にも困つて来るやうになる。頼阿の續草庵集(四)に、

世の中しづかならざりし比、兼好が許より、よねたまへ、ぜにもほしといふ事を、香冠におきて、

よもすいしねざめのかりはたまくらもまそでも秋にへだてなきかぜ

返し、よねはなし、ぜにすこし

よるもうしねたくわがせこはてはこずなほざりにだにしはしとひませ

とあるのは、この時分の事ではあるまいか。(勿論それもとゞ私の想像に過ぎない。確にさうだといふ證據はない)。

その中、彼は又鎌倉に下つたらしいが、その時期は明かでない。たゞ東下りの際の歌には、本當の心の悶えを詠じたものは一つもない。第一回の時はとにかく、第二回の時にもないのは、或はその旅行が出家してからすつと後の事で、もう出家の生活にも馴れ、浅い悶えなどは自然なくなつて居た爲であるかも知れない。修學院や法林に居た頃の歌には、まだいかにも浮世を厭ふといふやうな調子のもや、馴れぬ孤獨の生活の寂しさを歌つたものなどがある。中には左のやうな歌もある。

あはれなる夢を見て驚きたるに、語るべき人もなければ、

さめぬれど語るともなきあかつきの夢のなみだに袖はぬれつゝ

徒然草に見える、わざとらしい悟道論よりは、この方が寧ろ本當の兼好を表はして居るのではあるまいか。又こんなのもある。

人に知られじと思ふころ、ふるさと人の横川までたづねきて、世の中の事ともいふ、いとうるさし

年ふればとひこぬ人もなかりけり世のかくれ家と思ふ山路を

されど歸りぬるあとはいとさう／＼し

山里はとはれぬよりもとふ人のかへりて後ぞさびしかりける

晩年は、伊賀の國、國見山の麓、田井の莊といふ所に住み、遂にその地に歿したといふのであるが、これも甚だ疑はしい。園太曆(中國太政大臣公賢の記録)を見ると、貞和二年閏九月六日の條に、

晴陰不定。兼好法師來。和歌數寄者也、召藤前調之。

とある。これは恐らく兼好が始めて公賢を訪ねた時の事であらう。ところが又同書、貞和四年十二月二十六日の所には、

天晴。兼好法師入來。武藏守師直狩衣以下事談之也。今度被用正慶符。彼符趣示聞了。

とある。これは年始に看る狩衣の事について武家方から質問に來た場合の事で、その前日即ち二十五日にも武家から使者が來た事が書いてある。さうして兼好は又師直の爲にそれについて聞きに來たのである。これによつて考へると、この時わざ／＼伊賀から上つて來たものではなく、やはり京都又はその附近に居て、師直の所へ出入して居たものとしか思はれない。なほ良基の今來風體抄には、

貞和の頃は毎月三度の月なみ百首の會、爲定大納言の點又判などにて侍りしなり。家の人には爲忠・爲秀朝定衆にて侍りし。爲明卿はとき／＼まじり侍りしなり。頼阿・慶雲・兼好定衆にて所存を申し侍りし也。云々。其頃は頼・慶・兼い勢れも／＼上手とい

はれしなり。頼阿ばかり阿玄にすがたなだらかにことごとくしくなくて、しかも歌ごとにかど珍らしく、當座の感もありしにや。慶雲はたけをこのみ、ものさびびて、ちと古體にかゝりて、委心はたらきて、みよにたつさまに侍りしなり。爲定大納言は、ことの外に慶雲をほめられき。兼好は此なかにちとおとりたるやうに人々も存せしやらん。されども人の口にある歌どもおほく侍るなり。とある。兼好はやはり最期まで京都附近に居たのではないかと思ふ。

二

徒然草が兼好の手になつたものであるといふ事については、古來別に異論もないが、しかしそれが何時、如何なる場所に於て書かれたかは、まだ一箇の疑問である。

この問題について書いた最も古いものは、三條西實枝の「崑玉集」で、それによると、徒然草は元來兼好自身が今の形に書上げたものではないといふのである。兼好は獨り者で、命松丸といふものを使つて居たが、この命松丸は、兼好の死後、又今川了俊の許に仕へた。ところが了俊は文事を解する人であるから、或時命松丸に、「お前の前の主人兼好の書かれたものは何か残つて居ないか」と尋ねた。すると命松丸は、「それはないでもありませんが、しかし大抵は庵の壁をはられました。私の手許にも多少ございますが、これは記念として私が大切に保存致して居ります」といふ。そこで了俊は、命松丸を、兼好が嘗て住んで居た京都吉田の感神院へ、又從者の伊與太郎光貞といふ者を、伊賀の草庵へやつて、それぞれ兼好の草稿類をさがさせた。ところが伊賀の草庵では、家集の草稿をやつと五十枚ばかり、又吉田では、徒然草の草稿が壁にはられて居たもの、經卷を寫したものの裏書になつて居たものなどを取集めて持つて歸つて來た。これに命松丸の

所にあつたものなどを加へて、整理したものが、即ち今日存する家集及び徒然草だといふのである。

しかしこの説は、今日ではもう信する人はないやうである。何となれば、家集にしても徒然草にしても、之に關するいろいろな新しい資料が発見されて來たからである。

家集の方は、兼好自筆の稿本と認められるものが、現に前田侯爵家に残つて居る。一體兼好の家集は、群書類從にも收められ、又寛文四年に出版されたものもあるが、それらとこの自筆稿本とを比較すると、多少の相違點はあるが、大體は同じものである。さうして自筆稿本を一見して感ずることは、彼が如何に推敲に苦心したかといふ事である。かうして一冊にまとめられたものをも、後にいろいろ考へて修正したと見えて、その跡が所々に歴然として残つて居る。

徒然草の方は、早くより自筆の稿本がなかつた爲に、崑玉集に見えるやうな説も起つて來たのであらうが、一讀して分る通り、この書はちやんと首尾一貫したもので、決して後に他人が反古を拾ひ集めて、整理したやうなものではない。第一、最初の書出したる「つれづれなるまゝに」の所にしても、將來これが世にひろまり、多くの人に讀まれることを豫期して書いて居るのである。尤も中には、ふと思ひついた事を、そのまゝ書いた所もある。けれども何かを書けば、大抵はそれに關聯した事柄を書いて居る。さうしてその思想の移り變る徑路がよく分つて居る。これについては、本文講義の際、「要旨」の所に度々書いておいたから、さういふ所を少し注意して御覽下されば、思ひ半ばに過ぐるであらう。

恐らく徒然草の方も、もと兼好自筆の稿本があり、それが次々と傳寫されて、世にひろまつたものであらう。自筆稿本と認むべき彼の家集に所々推敲の跡が見えることは前に述べた通りであるが、徒然草の方も、正徹筆寫の本（靜嘉堂文庫藏）に、數箇所「みせけち」と書いた所のある事などについて考へると、兼好自筆の稿本には、家集同様、所々に修正し

た跡や消した跡などがあつたのではないかと思ふ。

さて兼好がこの徒然草を書いたのは、何時頃の事であるか、これについては、土肥經平の「春淡浪話」(三)に考證がある。曰く、

つれづれ草上巻に、冷泉萬里小路の内裏を今の内裏と書きたり。此内裏建武三年正月に焼亡せしかば、此上巻は建武三年より以前に書きたる事明なり。又同下巻に、藤公明卿を大納言といふ。是は建武三年五月に大納言に補任有りし人なれば、此下巻は建武三年の夏より後に書きしことも又明なり。此兼好法師は、正中元年に後宇多院の崩御の時出家せしと、徹書記物語に見え、扱出家して東國をめぐりて京へ歸り、吉田並雙岡にすみ、既に十五年を経て再び伊賀國へ行きしよしは、國太曆に見えれば、國見山の麓に庵を結びしは、延元三年にあたるなり、さらばつれづれ草の上巻は、建武に吉田並雙岡にて書き、下巻は延元に國見山の麓に移りて書きしにぞ。下巻の始の詞に、心あらむ友もがなと都こひしう覺ゆると有り。誠國見山の麓にて書きし筆のすきみと、おのづから見えたり。兼好其始の俗なりし時は左兵衛佐にて、正和・文保の比に、後醍醐天皇のいまだ坊にて、二條萬里小路の御所にましませし時(此御所に御座の事増鏡に見えたり)より仕へ奉りしにぞ。其時の春宮大夫は堀川大納言師信卿なりしが、其御所の御曹子に参りし事、則ちこの草子にも見えて、始終此君に心をゆだねて仕へ奉り、法師に成りぬる後まで心を變ぜざりし人と見えて、此草子の下巻、此帝の吉野へうつらせ給ひし後まで、先帝とかまはず、當代と書きたり。又南朝へ奉公有りし公卿の事を多く擧げしるし、國太曆に吉野へ御加持に参りし事なども見えし。是等にて兼好の心を推量るべし。又おもふに、吉野宮へうつらせ給ひしより間もなく、都をさけて伊賀國に行きて、終にこゝにて身まかりしも、南朝へ折々参りつかふる便よきを思ひし心ゆゑなるにや。

右の文は、徒然草の著作年代を論ずる時には、よく引かれるものであるが、今日の我々から見ると、實はあまりあてにならないのではない。例へば、國太曆を證據として論を立てて居るけれども、これは他の兼好傳などと同様、偽書に惑はされて居るのである。又「心あらむ友もがなと都こひしう覺ゆる」と書いてあるから、下巻は國見山の麓で書いたものだな

どといふのも、全く勝手な推論である。だから、この「春淡浪話」の説は、あまり重く見ることは出来ないけれども、徒然草そのものの内容を注意して見ると、おほろけながら、その著作年代を推定するに足る材料は、所々にひそんで居るやうである。例へば――

第二五段に、法成寺の事を書いて、

大門・金堂などちかくまで有りしかど、正和の比南門は焼けぬ。金堂はその後たふれふしたるまゝにて、とりたつるわざもなし。

とある。この南門の焼けたのは正和何年か分らないが、金堂の倒れたのは、文保元年八月五日の事であるから、この段は少くとも文保元年以後に書いたに違ひない。

第二七段に、

新院のおりみさせ給ひての春。

といふ句がある。この「新院」は、昔から言ふ通り、花園院の事であらう。花園院は正平三年に崩御になつたが、「新院」と申す以上、御醍醐天皇の御代で、他の上皇がまだ御在世中の時でなければならぬ。但し後宇多院は正中元年に崩御、後伏見院は延元元年に崩御になつたが、兼好がこれを書いたのは、後宇多院の崩御後あまり時のたゝない頃の事ではないかと思ふ。

第二八段に、

諒闇の年ばかりあはれなる事はあらし。

「諒闇」は、勿論何時の諒闇と限定して居るわけではないから、これを以て執筆時代を定めることは出来ないけれども、

文章の上から見ると、前段に讓位の事を書き、その寂しい氣持の聯想から、また諒闇の事を書いたのであるから、之を書いた時には、この二つの事實が時間的にあまり離れなかつた場合であらう。さうすると、この諒闇は文保元年伏見院崩御の場合がふと頭に浮んで來たのではあるまいか。

第六九段に、

元應の清善堂の御遊に支上の失せにしころ云々。

とある。この「元應」は兼好のおほえ違ひで、實は文保二年の事であるが、それを間違へた所を見ると、之を書いたのは、その事實があつた後、少くとも數年以上を隔ててからの事であらう。

第八六段に、

惟繼中納言は風月の才に富める人なり。

惟繼が權中納言になつたのは、元徳二年の事であるから、それより後の執筆と考へざるを得ない。

第一〇一段に、六位の外記康綱の話がある。康綱が權大外記になつたのは建武元年の事であるが、權大外記といふものは康綱が始めてらしい。さうして六位であつたのだらう。「六位の外記」といふ書き方も、特殊な例であるからだらう。すると、この段を書いたのは、建武元年以後といふ事になる。

第一〇二段に「洞院右大臣」といふのがある。これは本によつて「左大臣」ともなつて居り、昔から藤原實泰の事とせられて居るが、もし愚見の通り、これが「右大臣」で、公賢であるとする、この人は建武二年二月に右大臣となつて居るから、この段を書いたのは、少くとも建武二年よりは以前でないといふことになる。但しこれは「洞院右大臣」がはつ

きりしない以上、確な根據とするわけには行かない。

第一〇三段に「侍従大納言公明卿」といふのがある。經平は「下卷に、藤公明卿を大納言といふ。是は建武三年五月に大納言に補任有りし人なれば、此卷は建武三年の夏より後に書きしことも又明なり」と言つて居るが、此所にもうちやんと「大納言公明」として出て居るのであるから、下卷のみならず、上卷の一部は既に延元元年(建武三年)以後の執筆にかかることが明かである。

第一三六段に「故法皇」といふ語がある。これを古來の註は皆花園院として居るが、若し花園院とすると、その崩御は貞和四年(正平三年)十一月で、兼好六十六歳の時である。この頃になつてはもう徒然草の筆を執らなかつたといふ確實な證據もないが、他の段に書かれた事實で、兼好自身それに關與したと思はれるものの中、年代の分るものでは、正和・文保頃から建武頃にかけての事が多いのによつて考へると、この「故法皇」は、どうも後宇多院のやうに思はれる。且元應元年に薨じた有房の事を「六條故内府」と書いて居る、その書き方から見ても、これを書いた時代が有房薨去の年に比較的近いのではなかつたかと思ふのである。名の上にわざ／＼「故」と書添へるのは、その人の逝去が餘り古い事ではなく、又その人を比較的よく知つて居るやうな場合が多いからである。例へば第一二八段にある雅房大納言の如きは、その薨去が乾元元年、即ち兼好三十歳の時であるから、年こそ違へ、同時代の人であり、又既に故人となつて居るのに、これには「故」と附けてない。しかしこれは勿論一種の憶測である。

第一五二段に「西園寺内大臣」といふのがある。これは實衡であるが、實衡が内大臣となつたのは正中元年である。するとこの段は、少くとも正中元年以後の執筆と見なければならぬ。なほ實衡の薨去は、それから間もない嘉暦元年十一月

の事であるが、その名の上に「故」とないのは、まだ實衡生前に之を書いたからだと思われなくてもいい。しかし「故」の字の有無は、さう重く見ることは勿論出来ない。

第一五三段に、爲兼が武士に捕へられ、六波羅へつれて行かれる所を、資朝が目撃した話がある。これは正和四年の事であるから、それ以後の執筆たるは言ふまでもない。

第一七七段に「吉田中納言」といふのがある。これは藤原藤房の事であるが、藤房の權中納言になつたのは嘉元元年である。それから元弘元年には中納言になつたが、建武元年七月には出家して、その後は全く消息不明である。出家しようが、消息不明であらうが、とにかく嘉元元年以後は中納言で、「吉田中納言」たるに變りはないから、たゞそれだけで見ると、この段の執筆は、先づ嘉元以後といふ事になる。しかし實際は恐らく消息不明となつてから、以前にあつた事實を思ひ出して書いたものであらう。

第二〇六段に「徳大寺右大臣檢非違使の別當の時云々」といふ記事がある。この「右大臣」は、古來公孝の事だとせられて居るが、この「右大臣」はあてはまる人が一人もない。だから何か兼好のおほえ違ひであらうと思ふ。公孝は後に太政大臣となつた人であるから、それについて藤岡作太郎氏は「太政大臣となつて後、溯りて當時の官名を書けるものなりとはいふを得ず。故に乾元二年以前の筆ならざるべからず。さらば徒然草は二三十年間に亘りて成れるものなりとの結論に達す。されどこは俄に斷すべからず。或は記憶の誤なりやも亦知るべからず云々」(鎌倉室町時代文學史)と言つて居られるが、この問題は、どうしても兼好のおほえ違ひに相違ないから、この段の記事を本にして徒然草執筆の時代をきめることは勿論出来ない。

第二三八段の自讀第二箇條に、

當代いまだ坊におはしましし比、萬里小路殿御所なりしに、堀河大納言何候し給ひし御曹司へ参りたりしに云々。

とある。この「當代」は、後醍醐天皇で、天皇が御踐祚後、その東宮であらせられた時代の事を書いたのは言ふまでもない。ところが堀河大納言即ち師信は、文保二年二月後醍醐天皇が位に即かれると同時に春宮大夫を止め、翌年十月内大臣となつたが、もしその事實からのみ推して考へると、この段の執筆は、師信が春宮大夫を止め、まだ内大臣にならない間、即ち文保二年三月から翌年九月までの間といふ事になるが、それは一種の屁理窟で、これを書いた場合における筆者の頭には、事件の起つた當時、師信が大納言であつた關係から、その「大納言」が頭にしみ込んで居り、自然それが出て來たのであらう。空想から作り出した物語などでは實際の時の變化がない爲に、官位の昇進が時の變化を示す唯一の證據となるから、作者は特にさういふ方面に注意するが、事實を書く場合には却つてそれがおろそかになる。のみならず、前の官位を書いた方が作者の頭にも、讀者の頭にも却つてびたりと來ることがある。「さかのほつて以前の官名を書いた」と言ふと、いかにもわざとらしいが、此所などは自然にさうなのであらうと思ふ。次に「萬里小路殿御所なりしに云々」の條であるが、これについて藤岡氏は、

「當代未だ坊におはしましし頃、萬里小路殿御所なりしに」とあるは、天皇の今はすでに萬里小路内裏にあらせられざる書振なり。さればこの書(徒然草)は後醍醐天皇の隱岐に遷幸中か、或は建武三年延元二年以後、即ち南北朝となりて、吉野に行幸せられしより後のものならざるべからず。

と言つて居られるが、果してさう断定し得るであらうか。一體經平が「今の内裏」を冷泉萬里小路殿だといつて居るのが

誤であることは、本文の講義に述べた所によつても分るであらうが、此所の「萬里小路殿」について、「後醍醐天皇のいまだ坊にて、二條萬里小路の御所にましませし時（此御所に御座の事増鏡に見えたり）より仕へ奉りしにぞ」と言つて、増鏡の文を證據に擧げて居るのも誤である。なほ念の爲續史愚抄の本文によつて言ふと、後醍醐天皇は冷泉萬里小路殿で受禪あらせられたのである。さうしてこの時、新に春宮に立たれた邦良親王は冷泉萬里小路殿にお遷りになつたのである。續史愚抄に云ふ、

三月三日甲子。御灯。依三代始被停御拜。（兼有議）。爲立坊御祈於萬里小路殿。（冷泉。自頃日邦良親王爲御所。被始行五壇法。

増鏡（秋のみ山）に「御門坊にておはしましし時のまゝに冷泉萬里小路殿の寢殿に移り住ませ給へるに云々」とある意味は、次の文を見れば分る。續史愚抄、延慶元年九月の所に云ふ、

十一日丙申。例幣依日次不快延引。（依三代始被擇日次一敷）。

十四日己亥。爲立坊御祈被始行五壇法於萬里小路殿。（法皇御所。中務卿尊治親王亦坐之）。

十九日甲辰。三品中務卿尊治親王（御年二十一。法皇第二皇子）。冊爲皇太子。節會。有宮司除目。左大臣（冬平）兼皇太子傳。

九日甲子。有春宮給料已下宣下。上卿春宮太夫（師信）。

これによつて觀ると、藤岡氏が「余は思ふ、所謂今の内裏とこの萬里小路殿とは一にして、二條萬里小路を指せるにはあらざるか」と言つて居られるのも、誤である。後醍醐天皇は御踐祚の時からもう萬里小路殿には居られなかつたのである。

随つて「萬里小路殿御所なりしに」といふ書振が、天皇の京都に居られなかつたことを示す證據とはならないのである。

以上を總括して考へると、徒然草は正中二三年頃兼好が出家をして、やがて出家の生活にも馴れ、氣持も落着いてから、大體建武・延元頃に書いたものではないかと思ふ。いくら隨筆でも、あれだけのものを書くには、二箇月や三箇月では書けまいから、殊に氣が向けば筆を執るといふ遣り方にして居たとすれば、少くとも二年くらは費したであらう。しかしこれは江戸時代の隨筆、例へば鹽尻とか甲子夜話とかいふ類のやうに、何でも彼でも見るに隨ひ聞くに隨ひ、書いたり寫したりするものではなく、名は隨筆でも、實は文學的性質を多分に持つて居るものであるから、十年も二十年もかゝつて、だら／＼と書續けて行つたものとは思はれない。但し經平の「上卷は建武三年より以前に書き、下卷は建武三年の夏より後に書きしこと明かなり」と言つて居るのは、いかにも確らしく、さうして今日でも大抵の人はそれを信じて居るやうであるが、この説は信ずるに足る根據がない。

ところで此所に一つの疑問は、執筆の時代が所謂南北朝争亂の時代であるのに、それに関する記事が一つもない事である。それについて藤岡氏は、

徒然草は南北朝分裂争亂の頃のものなるべきに、少しも争亂についての歎聲を發せざりしは如何。こは清少納言の枕の草子に主家の零落のことをしるさず、西行の山家集に源平の争亂のこと見えざると相似たり。思ふに兼好は出家としても歌よみとしても、かかる世の變遷には耳をかさず、無關心なるをよしとせし故ならんか。

と言つて居られる。恐らくその通りであらうと思ふが、しかしそれはたゞ徒然草に於てのみ見られる事で、歌人としての兼好は、決して時代に無關心ではなかつた。家集に「世の中あやふきさまに聞えしも、程なくたちなほりにしかば、又

「世の中ありしにもあらず移り變りて、馴れ見し人もなくなり行くことを」など題する歌のあるのを見れば、彼が全然時代に無關心であつたとは、どうして言へよう。又徒然草の中にも、花園院御退位後の寂しい様を書いては、「かゝる折にぞ人の心もあらはれぬべき」と歎じ(第二七段)、爲兼の武士に捕へられて行くのを見て、資朝が「あな羨まし」と言つたのを(第一五三段)、さも痛快さうに書いた所がある。

だから、普通ならば、この書の中にはいろ／＼南北朝時代の逸話・珍聞もあるべきである。ところが、さういふものは一つも見えない。思ふにこれはわざと書かなかつたのであらう。但しちよつと考へると、出家の身として、俗世間の事は全然無關係であつたからして、何も知らず、又何も氣に留めなかつたと見られないでもないが、事實はどうもさうではないやうである。彼の生活そのものが、俗世間と全然没交渉でなかつたことは、死ぬ二年前に、師直の用事で以て公賢を訪ねたことのあるのを見ても分るであらう。第一三七段の「心あらむ友もがなと、都こひしう覺ゆれ」などの一句を見て、直ちに筆者が伊賀の山中に住まひをして居たなどと考へるのは餘りに輕率である。兼好が伊賀で死んだといふ事は、或は全然否定することは出来ないかも知れないが、彼が老後長く伊賀に住んで居たとは思はれない。彼はやはり京都又はその附近に住み、いろ／＼世間の事柄を見聞したに違ひない。さうして他の普通の人々と同じやうに、或は慨いたり、或は憤つたりしたのであらう。しかしその生々しい事實をそのまゝ筆にすることは、わざと避けたのではないかと思ふ。それは一面南朝の悲惨事を書くに忍びなかつた所もあらうが、彼としては寧ろ餘りに現實的な事柄に觸れることは避くべきだと思つた爲ではなからうか。全體として徒然草にはどうも幾分餘所行な所があるやうである。

要するに徒然草は、兼好自身が書いて、兼好自身が修正整理したものであり、その執筆の時代は、大體建武・延元の頃であらう。

三

「つれ／＼草は清少納言枕草子のやうなり」(徹書記物語)とは、既に正徹も言つて居る所であり、實際徒然草を一讀すれば、それが枕草子の系統に屬するものであることは、誰でも氣のつく事であるが、しかしよく觀ると、その内容には可なりの相違がある。單に内容のみならず、作者の態度そのものにも、可なりの相違があるやうに思はれる。本文の講義にも言つた通り(二頁)、突然「春は曙、やう／＼白くなりゆく山ぎは」で始めた枕草子は、理窟も計畫もない。たゞ面白くて仕様がなから書く。次々と湧上つて来る感興に刺戟されて自然に筆が動いて行く。をかしければ笑ふ。自慢がしたければ自慢をする。こんな事を言つたら、人に笑はれはしないだらうかなどといふ懸念は少しもない。全く若いあどけなさが全篇に充ち溢れて居る。しかし徒然草を讀んでも、どうも、さういふ氣はしない。先づ「つれ／＼なるまゝに」といふ書出しが既に幾分わざとらしいものだと思はれる。次に「いでや、この世に生れては」と改つて、人間の願望を述べた所も、何だか計畫的に總論を書いて居るやうな氣がする。尤も隨筆であるから、次から次と題目が移つて行く。筆者自身の言ふ通り、「心にうつる事をそこはかとなく」書きつけて行つたものには違ひないが、最後に至つて、もう一度結論風に、今まで述べ來つた中の主要な問題について繰返して述べ、さて「八つになりし年云々」といふ一段を以てしめくくつた所などは、どうも何だか多少作爲の跡があるやうに思はれる。その内容も複雑で、處世上の教訓に關するもの、故實考證に關するもの、出世間的修養に關するもの、逸話・奇聞に關するもの、物語の一部とも見るべき情景描寫、その他

女性觀・戀愛觀・趣味觀など、種々雑多なものが含まれて居る。随つて枕草子に見るやうな、單純さ・あどけなさは見られない。殊に折々は普通の教訓とは正反對な、——いはば若い者には多少毒になりさうな事を書いた所もあるので、古來の批評も區々まち／＼で、一方には、兼好を達人のやうにいふ人があるかと思へば、又一方には、くだらない賣僧のやうにいふ人もある。幸田露伴氏のやうな人さへ、徒然草を評して、「餘り奇に走り過ぎたものである。云々。日本奇書考といふものを他日好奇の先生があつて著はすこともあらば、それこそ第一番に其の材料となるべきものであらう」（蝸牛庵夜譚）などと言つて居られるらるである。

徒然草の内容に一見矛盾したやうなものがあり、自家撞着らしく思はれるもののあるのは事實である。兼好を悪く言はうとする人は、さういふ點を攻撃するが、又兼好をほめようとする人は、何とかして、それが矛盾でなく、自家撞着でないといふ辯解をしようとする。それは前章に擧げた所によつても大體は分るであらう。嘗て自分が學校を出た頃、或先生から、話のついでに、徒然草における矛盾といふ事について聞かれた事がある。その時私は何と答へたか、今はつきりおぼえないが、とにかく何とか答へたところが、その先生が言はれるには、「それでは君、兼好も我々凡人も同じぢやないか」と言はれた。その先生は頭から兼好を偉人・達人として見て居られるのであらう。さうして今の我々はどうしても兼好よりは劣つたものでなければならぬときめて居られるのであらう。その後私は塚本氏の「徒然草解釋」を見て、その總説の中に「兼好は一生獨身で通した。勿論子などはなかつた。けれども彼は戀をした。趣味の戀を體驗した。そして戀に破れた」と書いてあるのを読み、變な事を言ふ人もあるものだと思つた。それは、兼好が必ず獨身で通したとか、子供がなかつたとかいふことを證明する材料は、今まで自分の調べた所では一つもないからである。或は生涯獨身であつたかも知れ

ないが、女のあつたことは事實である。一生不犯であつたなどといふのならば、それは又珍しいが、假に幾人も女があつたとすると、それは結婚して一夫一婦を固く守つたよりも、平凡でもあり、墮落のやうにも思はれる。又子もなかつたかも知れないが、若しなかつたとすれば、それは偶然出来なかつたまでの事で、これ亦少しも珍とするに足りない。又兼好ぐらゐの身分のものでは、その子孫の事などは一々記録に残つてないから、たとひあつても系圖などには書いてないかも知れない。書いたものにそれが見えないからとて、必ずなかつたとは、きめられない。況や「妻といふものこそ男の持つまじきものなれ」（第一九〇段）とか、「子といふものなくてありなむ」（第六段）とか徒然草に書いて居るから、兼好には全く妻子はなかつたに違ひないなどといふならば、自ら「四十に足らぬほどにて死なむこそ」（第七段）と書いて居るから、六十八まで生きて居たといふのは虚言だといふやうなものであらう。——かういふと、今度は私自身が何だか詭辯を弄して居るやうにもあるが、私は決して兼好に子があつたといふのでも、長く連れ添つた妻があつたと主張するのでもない。有つたか無かつたかは分らないといふのである。殊に「趣味の戀を體驗した」などといふ事は、何の事だか分らない。こんな事をいつてまでも兼好を持上げようとする人の態度を私は多少あきたらず思ふのである。

一體「趣味の戀を體驗した」などといふ事も、恐らく内海氏の「趣味論」説がその本を作つたのであらうと思ふが、徒然草といふものは、果してそれほどまでに趣味一點張のものであらうか。江戸時代の人は、むやみと徒然草を有難がり、殊にその教訓的方面を強調して見る風があつたが、近頃は又その反動とでもいふのであらうか、むやみと趣味的方面を強調して、實際生活に直接關係ある方面は、とかく輕視するやうな傾がある。けれどもこれは角を矯めて牛を殺すやうなものではあるまいか。果して穩健中正の見方であらうか。

とにかく徒然草のやうな複雑な内容を持つたものを、一方面からだけ見て、簡単に片附けてしまはうとするのは間違つて居る。兼好をえらいと思ふにしても、えらくないと思ふにしても、先づよくその本文を読み味つて見るべきである。本書に於ては本文講義の際に、簡単なから自分の所感を述べておいたから、此所にはわざと批評を省き、最後に、研究者の参考として、註釋書その他のものについて、少し書添へておくこととする。

徒然草の註釋書で一番古いものは、所謂「壽命院抄」である。これは秦宗巴の著、上下二卷、初刊は慶長九年で、その後數回改版されて居る所を見ると、可なり多くの人に讀まれたものには違ひないが、今日としては極めて珍しいものである。

次に出たのは、林羅山（道春）の「野槌」である。羅山の年譜によれば、元和七年の撰であるが、それは最初の撰述で、刊行されたのは、それよりすつと後らしい。右に挙げた「壽命院抄」に比すれば、註釋もすつとくはしい。

しかし最もよく整つたものは何かといふと、それは何といつても、「徒然草文段抄」七卷である。これは北村季吟の著で、寛文七年に刊行されたものであるが、爾來「徒然草」といへば、直「文段抄」を思ひ出すといふ程有名なものとなり、今日もなほ可なり廣く讀まれて居る。

一體季吟といふ人は、いろ／＼の註釋書を作つて居るが、何れも所謂集大成で、それまでに出たいろ／＼の本の説を雜然と拾ひ集めたものである。随つて季吟その人の獨創的卓見といふやうなものは一つもない。これは彼の著書全部にわたる長所であると共に又短所でもある。

ところがこの文段抄を更に増補整理し、便利重寶この上ないものとしたものがある。それは「徒然草諸抄大成」と稱す

るもので、二十卷より成り、著者は淺香山井、貞享五年の刊行である。これこそ本當の集大成で、相反する説でも何でも、總べてを網羅したといつてもよいからである。随つて研究者には頗る便利で、明治以後の徒然草註釋書は、大抵この書の中から、都合のよい説だけを抜出して、分りよく書直したものである。

以上の外、江戸時代に出來たもので、本書の講義中に名の出て來るものは、左の通りである。

「鐵槌」(四卷) 青木宗胡著。慶安元年刊。

「徒然草句解」(七卷) 高階楊順著。寛文五年刊。

「増補鐵槌」(五卷) 山岡元隣著。寛文九年刊。

「徒然草診解」(五卷) 南部宗壽著。延寶五年刊。

「徒然草大全」(十三卷) 高田宗賢著。延寶六年刊。

「徒然草参考」(八卷) 惠空著。延寶六年刊。

明治以後出版のもので、名の出て來るのは、左の數種である。

「徒然草講話」沼波瓊音著。大正三年刊。

「徒然草詳解」内海弘藏著。大正八年刊。

「徒然草解釋」塚本哲三著。大正十四年刊。

「大要口譯 徒然草精義」藤田豪之助著。昭和二年刊。

右に挙げたのは、何れも註釋書であるが、なほこの外に、本文だけのものがある。「正徹本」「光廣本」「弘賢本」とし

たのはそれで、「正徹本」は、正徹自筆の本、永享三年の奥書がある。「光廣本」は、慶長十八年烏丸光廣の奥書ある刊本、「弘賢本」は、屋代弘賢の校訂したもの、文化十二年の奥書がある。但しこの中、特に變つて居るものは、たゞ「正徹本」だけで、他は殆ど同じものといつてもよいくらゐるである。

索引

(1) 國語は歴史的假名遣により、漢語は表音的假名遣による。
 (2) キ、エ、ヲ はイ、ニ、オ の中に
 入れたが、國語のジ、ヂ 及びズ、
 ズ は區別した。

あ

愛敬ありて…………… 8
 愛着の道…………… 34
 あいなき…………… 163
 あいなく見ぐるし…………… 392
 あいなけれ…………… 167
 青葉になりゆくまで…………… 63
 青みわたりたる…………… 274
 あがきの水…………… 301
 あかざのあづ物…………… 173
 明かし暮したる…………… 19
 明かし暮す…………… 294
 あかざをしと思はば…………… 26
 あかざむかはまほしけれ…………… 8
 阿伽羅(アカダナ)…………… 41
 噺がたより…………… 75
 噺近くなりて待ち出でたるが…………… 350
 あが佛とまもりむらめ…………… 476
 あからさまに…………… 404
 あからさまに来て…………… 477
 あからめもせずまもりて…………… 353
 秋の草は…………… 369
 秋の野の草のたもとか…………… 581
 秋は通ひ…………… 400
 秋は則ち寒くなり…………… 400
 商人(アキビト)の一錢を惜しむ心切なり…………… 288
 顯基中納言…………… 19
 あきらかならむ人…………… 487
 あきらめ申さむ…………… 342
 安居院邊…………… 151
 悪をまし…………… 441
 悪日に善を行ふに…………… 247

悪にはうとく…………… 173
 あくる日まで頭いたく…………… 438
 明くるまで…………… 108
 明暮そひ見むには…………… 477
 明暮念佛して…………… 319
 明離れぬほど…………… 356
 あさい…………… 444
 淺からずあはれと思ふふしぶしの…………… 594
 朝餼(アサガレヒ)…………… 83
 淺きこと…………… 342
 淺くてながれたる邊にすゞし…………… 164
 あざけりあさみて…………… 129
 淺茅が宿にむかしを忍ぶ…………… 350
 麻の衣…………… 173
 あさまし…………… 28
 淺ましかりぬべし…………… 438
 あさましき思ひ誠に切なるべし…………… 328
 あさましき事…………… 152
 あさましきことを見侍りつ…………… 325
 あさましき事まで…………… 285
 淺ましくあるべからぬ事なり…………… 548
 あさましく老いさらばひて…………… 394
 あさましくおそろし…………… 440
 あさましくて…………… 239
 あざやかに見ゆるぞあはれなる…………… 93
 朝夕君に仕へ…………… 171
 朝夕なくてかなはざらむものこそあらめ…………… 371
 朝夕の心づかひによるべし…………… 110
 朝夕へだてなくなれたる人…………… 117
 あし…………… 154, 179
 あしあし…………… 381
 阿字々々と唱ふるぞや…………… 381
 足あればいづくへかのぼらざらむ…………… 506
 足をくはる…………… 534
 足を空にまどふが…………… 75

足をそろへて…………… 461
 足を延べて…………… 461
 足をふみとゞむまじきなり…………… 399
 足利左馬入道…………… 526
 足鼎(アシガナヘ)…………… 159
 悪しかるべき事かは…………… 570
 あしくひきて…………… 279
 葦の御簾…………… 99
 阿字本不生…………… 382
 足もとへふとより来て…………… 243
 阿闍梨(アジャリ)…………… 187
 汗を流すは心のしわざ…………… 328
 あだを碎く…………… 224
 あだし野…………… 25
 あだなる契をかこち…………… 349
 味…………… 602
 あぢきなきすさび…………… 71
 あづまの人…………… 415
 吾妻(アヅマ)に行きて身を立て…………… 415
 吾妻人…………… 373
 あととふわざ…………… 106
 跡に争ひたるさまあし…………… 371
 あとのため忌むなる事ぞ…………… 104
 跡まで見る人ありとはいかでか知らむ…………… 110
 あないせさせて…………… 109
 あなうれし…………… 581
 あなかしこ…………… 304, 104
 あなきたな誰にとれとてか…………… 146
 穴ごとくに口傳の上に…………… 538
 あなたふとのけしきや…………… 393
 あなたふとや…………… 381
 あなめでたや…………… 574
 あなわびし…………… 588
 あはくおろそかにして…………… 432
 遣はでやみにしうきを思ひ…………… 349
 あはれさるめりと…………… 485
 あはれと聞きし言の葉ごとくに…………… 95
 あはれと聞きしるべき人もあらじと…………… 137
 あはれと見るべきを…………… 106

あはれとやは思ふ 105
あはれなり 68
哀なること 98
あはれなる事おほかり 46
あはれなるぞかし 101
あはれなれ 356
あはれに見るほどに 42
あはれにやんごとなき 73
あはれもさめて 321
あはれも深く見ゆ 52
あはれ紅葉をたかむ人もがな 163
あはれ我が道ならましかば 418
あひ奉りて 254
逃ひたるに 238
あひて 235, 342
あふぎて是をたふとむべし 405
あふさきるさに思ひみだれ 16
あふちの木 129
葵かけわたして 355
あへて凶事なかりけるとなむ 507
あまおほひの毛 193
尼が細工 459
尼御前(アマゴゼ) 143
あまたあひ居て 103
あまたして 238
あまた所くはれながら 534
あまたの事のきたらむ中に 468
あまたの中にうち出でて 168
あまたのわづらひにならば 304
尼になりて年よりたるありさま 477
あまりに興あらむとする 163
あまりにたふとく覺ゆるは 381
あまりに深く信をおこして 485
あまりに物さわがし 471
あみ戸 136
雨にむかひて月を懸ひ 347

天下(アメガシタ)のもの
上手 390
雨もぞ降る 273
雨やみてこそ 471
あやしうこそものぐるほしけれ 2
あやしき板敷 272
あやしき家 68
あやしき下蕨 292
あやしき事を語らず 211
あやしきことなる相を語りつけ 380
あやしき不思議に 438
あやしの 136
あやしの吾妻人 595
あやしの下女 283
あやしのしづ山がつ 49
あやしの所にもありぬべき 84
あやしみを見てあやしまざる時は 507
あやしむ 486
綾小路宮 38
危きことやあると見て 462
あやふく 252
あやまたず 243
あやまちあるべし 461
あやまちあるべし 441
あやまちしつ 440
あやまちはやすき所になりて 292
あやまり侍りけり 583
あやめの草はありながら 365
あはらしく 99, 375
薔夷(アラビス) 377
あらがひ給へ 342
嵐をふせぐ 172
嵐にむせびし松 106
あらしを好む失なり 330
あらしひこそ 78
あらしひにくみ 44
争ふべからず 483
改めて益なき事 323
あらぬいそぎ 474
あらぬ道のむしろ 418
あらはる 209

あらまほし 319
あらまほしかるべきわざなれ 17
あらまほしかるべけれ 8, 119
あらまほしき方もありなむ 7
あらまほしき事なり 156
あらまほしけれ 174
有明の月 277
ありがたき 144, 180, 370
ありがたき不思議 359
ありがたきものぞ 282
ありがたく 116
在兼卿 582
ありけるが聞きて 242
有栖川のわたり 300
ありたき事 11
ありつる苔のむしろ 163
ありと見るものも存せず 247
蟻の如くにあつまりて 213
ありのまゝに 305
ありのまゝにいはむはをこがましとにや 569
有房 345
ある男の中にあしからずと見ゆるが 565
あるかなきかに 19
ある御所さまのふるき女房 590
あるじ方の人にて 527
あるじなき所 571
あるじのひきあけたるに 444
あるじまうけられたりけるやう 526
ある眞言書 513
或所のさぶらひども 449
あるにも過ぎて 208
あるは 440
或は南枕常の事なり 334
或聖 294, 320
ある人 108, 125, 488
或人仰せられし 189
或人のいはく 391
或人申し侍りしなり 228

あるべからず 177
ある法師 155
或法師 188
或者 321
或物しり申しき 455
あるやんごとなき人 407
ある有職の人 520
あるよひの間 523
あれ狐よ 559
あれたる庭 109
安喜門院 283
安置 451
案じるたる人 485
暗證の禪師 483
安樂といひける僧 555
いゝあ
いかゞ 335
いかゞあるべき 508
いかゞ心得たる 405
いかゞして人を恵むべきとならば 378
いかゞせむと 448
いかゞせむ 298, 313, 441
いかゞはせむとまどひけり 195
いかゞ侍らむ 342
いかゞ侍るべからむ 491
いがたにうつさせむとせしに 582
いかでかいたましからざらむ 326
いかでか君に仕うまつり候べき 254
いかでさそひ出して 162
いかで過すらむ 272
いかならむ世にも 92
いかなるをか善といふ 123
いかなるをか智といふべき 123
いかなるをりぞ 205
いかなる女をとりすゑて相住む 476
いかなる心にか侍らむ承らむ 343
いかなる才覚にてか申され

けむ 452
いかなる相(サウ)ぞ 385
いかなる相ぞと人の問ひければ 384
いかなる大事あれども 182
いかなる鳥ともさだかにしるせるものなし 513
いかなる人の御馬ぞ 381
いかにいひすてたることぐさ 52
いかに仰せらるゝやらむ 280
いかにかくいふぞ 291
いかにかくは 512
いかにかくは申し給ひけるぞ 546
いかにぞや 49
いかに殿原 575
いかにもあれ 283
いかにもして 174
いかに物のあはれもなからむ 25
いかばかりいみじきものぞと思ふに 285
いかばかりうらむらむ 116
いかばかり心のうち涼しかりけむ 60
いかばかり堪へがたけれど 201
いかめしくせられたりげる 344
衣冠より 13
息づきくるしむ 544
息のうちにてかつしらべもてゆく物なれば 538
生きのぶるわざ 228
勢ありとて 515
いきほひある人 173
勢まうに 6
息も出でがたかりければ 131
いきもつきあへず 168
いくさの陣に臨めるにおなじ 360
いくばくか人のつひえをなきむ 173
幾(イクバク)ならず 318

幾夜もいねず 182
池には蓮 368
池の鳥 412
生けらむうちにぞゆづるべき 371
生けらむ程は 224
いける間 253
生けるもいたづらならず 421
園基 294
いさぎよくおぼえて 304
聊かいぶかしき所の侍るか 536
いさゝか覺束なくおぼえて 485
いさゝかたがふ所もあらむ人 44
いざたまへ 573
いさましからむ 171
いさめる馬 461
勇める心さかりにして物と争ひ 432
いさや 52
石草木の多き 206
いしづゑ 93
意趣 203
醫書にいへる 430
伊勢 87
いそぎて東山に用ありて 470
磯禪師 549
磯より潮の満つるが如し 401
いたういたむ人の 444
いたうくらきに 74
いたうこそこうじにたれ 163
いたうこほりたるに 277
抱きもち 445
いたく興ぜぬ 168
いたくことごとしからず 226
いたくすさまじからず 272
いたくたゝず 558
板敷をさげ 99
いたづらはしく 252
いたづらなる人といふべか

らず	316	一切の有情	326	縁をむすび重ねたるが	407
いたづらにおかむ事	548	一生をおくる	289	いとかなし	101
いたづらにたてりけり	154	一生をくるしむる	118	いときなき子	177
いたづらに廣きこと	548	一生この事にて暮れにけり	421	いときなき子をすかし	328
いたましろするものから	11	一生精選にて	234	いとくなく	185
いため聞はしめて	325	一刹那	249	いとぐちをし	477, 479
いたりて愚なる人	232	一錢かるしといへども	287	いと心づきなく	477
至りぬれば	188	いつぞや	38	いと心ぶかう青みたるやうにて	350
居たるあたりに	206	いつぞや有りしが	205	いとこそあいなからめ	596
一具にととのへむとする	227	一旦	328	いと高からずさむやかなる	370
一藝あるものを召しおきて	553	いつとかや盛人にあひにけるより	187	いとたのもしうをかしけれ	351
一期は過ぐる	177	いつとは思ひ出でねども	205	いとたふとき事なり	325
一言芳談	260	偽りかざりて名を立てむとす	232	いとたふとくてならびおはします	92
一時の懈怠すなはち一生の懈怠となる	471	いつはりて小利をも辭すべからず	233	いと堪へがたげに眉をひそめ	437
一定とおもへば	126	出雲をがみに	573	いとどかさなりて	176
一條室町	151	いつよりも殊に今日はたふとく覺え侍りつる	320	いとど定まりぬべし	210
一條わたりにて	395	いづれかまさるとよく思ひくらべて	468	いとなつかしう住みなしたり	273
一大事の因縁をぞ思ふべかりける	472	いづれの事かさりがたからぬ	296	いとなみ	171, 468
一遣にたづきはる人	418	いづれの手か疾く負けぬべきと案じて	293	いとなみ待つ	416
一遣にも誠に長じぬる人	419	いづれの人と名をだに知らず	106	いとなむ所	318
一日の命萬金よりもおもしろ	252	いづれの偏にか侍らむ	345	いとなむ所何事ぞや	213
一日の中一時の中	468	いづれのわざかすたれざらむ	435	いとにくし	510
一念の念佛の最初なり	556	いづれものかれざるに似たり	360	縁によるものならなくに	50
一の上にてやみなむ	229	出で給ひぬれど	109	いととしげにいほむるわろし	426
一人	4	出で仕へ	339	いと久しくて出でたりしを	588
一部とある草紙	227	出でまどふ	150	いとまことしからず思ひける	384
何方をも捨てじと	468	いでや	4	いとまばゆかりぬべし	594
いづかたをも見づぎ給ふな	304	出で行きにけるに	160	いとまかしこし	4
何方につけ侍るべきぞ	255	いとあやふく見えしほどは	291	いともしらぬ道	169
いつかは申し誤りたる	384	いとありがたかりけり	460	いと物あはれなり	109
いづくをか刈らざらむ	512	いとうれし	426	いとよしと見えて	278
いづくにもあれ	53	いと業の難にそぼちつ	137	いとわきまへずもや	375
いづくまでも	525			いとわびし	422
いづくも難なし	111			ゐなかびたる所山里など	53
いづくも不具にことやうなる	396			稲葉の難にそぼちつ	137
何處よりぞ	272				
一獻に	526				
一切經	451				

いなびがたく	374	いひはづかしめて	328	今の世には封をつくること	
いにしへのことも立ちかへり戀しう	63	言ひひろめもてなす	220	になりけり	501
いにしへの聖代	503	いひまがへ侍れば	196	今の世のとしげきにまぎれて	98
いにしへの聖の御代の政	13	いひもて行きければ	143	今の世の人のよみぬべきこと	50
いにしへは	46	いひやまず	151	とがらとは見えぬ	345
命を終ふる期忽にいたる	288	いひやるとこそをかしけれ	54	今はさばかりにて候へ	500
命ををふる大事今こゝに來れり	340	いひわたり	127	今は絶えて知れる人なし	348
犬の足は跡なき事をり	325	いぶかしく思ひけるやうに	472	今は見所なし	348
いのちながければ恥多し	27	いふかひなくて年月の懈怠を悔いて	599	今は無下にいやしくこそなりゆくめれ	79
命ばかりはなか生きざらむ	160	いふこともあれど	52	今は忘れにけりといひてありなむ	421
命は人を待つものかは	177	いふにたらず願ふにたらず	124	今一きは	62
岩倉にて聞き候ひしやらむ	282	いふべき事ありて	107	今一つ上すくなし	444
石清水	156	いふまゝにはからるゝ人あり	485	今見る人	204
祝ふべき日などは	438	家居にこそ	36	今めかしくきらゝかならねど	34
岩本の社とこそ	196	家居のつきづきしくあらまほしき	34	今用ゐるなり	189
いはゆる六時堂	540	家をかへりみる	171	今も二本侍るめり	368
いはるゝは	420	家にありたき木は松櫻	366	今も見送り給ふとぞ	275
いはれけるを	343	家に生れ	120	今もよみあへるおなじ詞歌枕も	52
いはれければ	342	家に蓮を植ゑて愛せし時の樂なり	521	今様の事どものめづらしきを	220
いはれて	342	家の内を行ひをさめたる女	476	今やうの人	80
況や	249, 296	家の集に書けり	362	今よりは法師とこそ申さめ	235
いひあへり	151	家の作りやうは夏をむねとすべし	164	いみじ	222
いひあへる	218	今更かくやは	117	いみじからぬかは	87
いひ出したれば	586	今更の人	220	いみじかりけり	113, 266
いひ出づれば	49	今しばし	426	いみじかりし賢人聖人	120
いひ入れたゝずみたる	217	今少しおしあけて	109	いみじかりし事	379
いひおこせたる	116	今まだはてぬほどに	587	いみじかるべけれ	11
いひけむやうに	7	いまだ武勇の名を定めがたし	224	いみじき	80
いひ定めて	304	いまだ誠の道を知らずとも	216	いみじきこと	208
いひし言葉もふるまひも	380	いまだ病急ならず死に赴かざるほどは	599	いみじき鯉を出したりければ	561
いひしろひて	163	今出川	151	いみじき秀句なりけり	235
いひたきまゝに語りなして	208	今出川院の近衛	197	いみじき兒	162
いひたりしに	321	今出川のおほい殿	300	いみじきや	73
いひちらすめる	219	今の内裏	110	いみじく覺えしか	197
いひつゞくれば	70			いみじくおぼえしなり	227
いひつる事はたのまるれ	373			いみじくおぼえ侍る	294
いひてありなむ	418			いみじく書く	197
				いみじく感じ侍りき	587

いみじく閉ゆるにや...52
いみじくつきづきしく興ありて人ども思へりける...561
いみじくなつかしう思ひよりたれ...362
いみじけれ...84, 227
いみじと思ひ...13
いみじと思ひける朝の屑...448
いみじと思ひてはかたらじ...169
いみじとは見えず...7
いみじとも閉ゆべし...84
異名をつきにける...553
芋がしら...179
いやしからぬ家...133
賤しき民の志をも奪ふべからず...327
賤しき人...184
賤しくかたくななれども...539
賤しくもおしはかられ...476
いやしげなるもの...206
瘡ゆとなむ見知りておくべし...257
いよいよ腹立ちて...141
いよいよ秘蔵しけり...240
いよいよ物は定めがたし...474
いらなくふるまひて...163
いらへもせず...143
入りたぬさま...221
入りて見るに...412
入物にはけがれあるべし...504
いろあひさだかならねど...136
色をおもふがゆゑ...32
色こく萬はもて興ずれ...353
色好まざらむ...15
色このまざらむにはしかじ...597
色このむとはいはれ...350
色にふけり...432
倚廬(イロ)の御所...99
色ふし...479

いろふべきにはあらぬ人...218
色めきたる方...298
色もなくおぼえ侍りしを...362
院...151, 325
因果の理...465
印ことごとしくむすび出でなど...163
院の御機敷...151
尹大納言光忠入道...267
院へまゐる人...185

う

餓をたすけ...172
うゑずともありなむ...367
うかよふべし...316
うきたる事と閉ゆ...209
うけられね...219
うける事には侍らじなれども...240
牛を陰陽師のもとへつかはす...506
牛を取らむ...251
牛飼下部などの見知れるもあり...356
牛すでにしかなり...251
牛に分別なし...506
牛のあたひ鬃毛よりもかろし...252
牛の角のやうにたむべし...193
牛の角もじ...185
牛の主誠に損あり...251
うしろを見かへりて...129
うしろより入りて...589
うすものの表紙...227
うすものは上下はづれ...227
うそぶきありきなど...182
歌をぞいふなるは...51
葉ひ朝るべからず...212
葉ひながらも念佛すれば往生すともいはれけり...126
歌くづ...90
うたて思ふ所なく見ゆれ

...13
うたておろかなりとぞ見るべき...119
うたて心づきなき事多かるべし...596
歌の心などいひて...543
歌の言葉がき...347
歌の道のみにしへに變らぬ...51
うたへにまけて...512
歌物語...169
うちあはび...527
うちあるさまにも...31
うちある調度...35
うちうちまゝにて...524
うちうちよく習ひ得て...389
打怠りつゝ...466
内を憚らず...429
宇治大路の家...239
うちおほひければ...131
うちさゝめくも...274
うちしぐれたるむら雲がくれのほど...351
うちとけたるいも衰はず...31
うちとけたる事などいひたる...117
打ちとけたれど...135
内なる女房の中に...450
内に思慮なく外に世事なく...290
宇治に住みける男...237
宇治左大臣殿...402
宇治の里人...154
打腹立ちて...143
うち更けて参れる人の...480
打伏せてしげりけり...238
打伏せねぢ殺し...412
うち見るよりもおもはるゝ...35
うちも笑ひぬ...105
打ちわらむとすれど...159
卯月ばかりのあけぼの...274
卯月ばかりのわか風...368
うづまりて...149
うつし心なく酔ひたる...238
うつゝなし...297
器の失にあらず...538

うつは物...80, 172
うつべからず...323
太秦(ウヅマサ)殿に侍りける女房の名ども...301
太秦殿の男...301
太秦の善観房...555
うづみおきて...162
うづもれぬ名...119
うつりかはる...399
うつり来る事...400
うつろふ...94
うとからぬおのれらしも...200
うとき人...117
うとましく...325
禹の行きて三苗を征せしも...430
優婆夷(ウバキ)...280
優婆塞(ウバソク)...280
得べからず...530
上下よりたすきにちがへて...510
上より下へわなのさきをさしはさむべし...511
馬をひき出でさせけるに...461
馬を引きたふして...578
馬ごとにはこはきものなり...462
馬車より落ちて...440
馬などむかへにおこせたらむに...466
馬の上ながら捧げて...255
馬乗とは申すなり...462
馬ひきかへして逃げられにけり...281
馬よりおりたりける...254
生れつきたらめ...9
生れつきの原...554
梅の枝...192
梅の花かうばしき夜の臘月にたゞずみ...596
梅宮...88
梅は白きうす紅梅...367
梅もつばみぬ...400
うやうやしく...196
裏書あるべからず...589

うらなくいひなぐさまむこそ...44
浦にありしを...114
裏に書かれたる御記...413
裏は塵つもり...585
占文...413
怨み怒る事あり...515
恨み申さばや...303
うらめしく...200
うらゝかにいひきかせたらむは...569
うるさし...115
うるはしき人...438
うるはしくは...511
うれしき結縁をもしつるかな...382
うれしと思ひて...163
憂を忘るといへど...441
愁止む時なし...313
運に乗じて...224

元系

野曲(エイキョク)...52
えいひはなたず...374
惠遠(エタン)...289
繪かきずさびたる...101
得がたき貨をたふとまざる...311
え聞き候はず...282
えこそ聞き知らぬ...280
えさらぬ事...176
衛士...268
杖を肩にかけて...193
杖にしびみつきたる...368
杖の半に鳥を附く...192
杖もたわゝになりたるが...42
えならず...137
えならぬ...35
えならぬにほひ...29
酔ひくたびれて...444
夷(エビス)...223
夷のこはき國なり...522
烏帽子をひき入れ...550

烏帽子ゆがみ...439
えもいはぬ事ども...440
えもいはぬにほひのきとかをりたる...278
えもとめあはず...588
衣紋も冠も...283
圓伊僧正...235
宴飲聲色を事とせず...531
縁を離れて身を閑にし...216
延喜式に見えたり...492
延政門院...185
艶にかしかりし...275
縁より落ち...440
厭離しつべし...32

おを

老來りて...147
老いたる尼の行きつれたりけるが...143
老いたる法師召し出されて...439
老のかたうど...420
老ののちむかしがたりに...523
老弱の官人...506
王子猷...314
黄鐘調(ワウシキデウ)なるべし...541
黄鐘調にいらるべしとて...541
黄鐘調のもなか...540
往生...136, 148
往生十因...148
鹿長...150
王土に居らむ處...509
緒をつくる...255
をかし...87
をかしかりけり...321, 268
をかしき事...43, 168
をかしく罪ゆるさるゝ者なり...444
をかしくもきらきらしくも...356
をかしけれ...16, 278

をがまざりければ	156	たはるゝこそ	298	ぬべし	422
尾髪	543	男女の情も	349	おのづから聞漏らすことも	
岡本關白殿	190	乙鶴丸	244	あれば	569
萩(マギ)	369	おとなしき人	328	おのづから忍びてあらむは	
おきあまる露にうづもれて	140	おとなしく聞えなまし	569		298
沖の干潟はるかなれども	401	おとなしくもどきぬべくも		おのづから人もきくにこそ	
奥なる屋	354	あらぬ人	422	あれ	168
おくぶかく	133	おとなしく物知りぬべき顔		おのづから本意とほらぬ事	
おくらぬ日はなし	359	したる神官	575	多かるべし	374
送る數おほかる日はあれど	359	音に聞きしねこまた	243	小野小町	433
をこがましく	212, 438	音に聞くと見る時とは	208	小野道風	240
おこたりおもひしられて	116	おとれることかは	348	おのれ	232
忘るうちにも	404	おどろおどろしく聞えける		おのれを知るを物知れる人	
忘る間なく漏りゆかば	358	を	412	といふべし	338
行おろかなりと知らば	339	衰へたるさま	433	おのれをつとまやかにし	59
行ふ次第あり	513	おとろへたる末の世	82	己を枉げて人にしたがひ	330
行ふ常の事なり	402	おなじくはかの事沙汰しお	175	おのれがおそれ侍れば	291
行ふ道のいたらざるをも知らず	338	きて	342	おのれが思はむやうに附け	
をこにも見え	419	おなじ心ならむ人	43	てまゐらせよ	191
おごりを退けて財をもたず	59	おなじ心にむかはまほしく	426	おのれが境界にあらざるも	483
おこりて	412	思はむ人	426	おのれが國の樂を奏せしな	522
をさをさ劣るまじけれ	72	おなじ事また今さらには	70	り	500
をさなくおはしまして	455	じともあらず	70	おのれが心にたがへるによ	232
幼くて	283	同じさまなる大衆おほくて	588	りて	232
をさめけり	60	同じやうにもあらぬ	227	おのれが好む方にほめなす	380
をさめて	105	各	354, 585	おのれが智に及ばずと定め	483
おし返し問ひにやる	569	おのおの嘲りて過ぎぬ	238	おのれが智のまさりたるこ	330
情しくおぼえて	468	各あそぶこと有りける	159	とを興とす	330
おしなべて	152, 223	各あやしみて	575	おのれ車やらむこと	301
敵のまゝに	466	おのおの申しけるを	506	おのれ違ふ所なくば	380
情しむよししてこはれむと	563	己が藝のまさりたることを	330	おのれと枯るゝだにこそあ	363
運櫻	367	己が高名なり	583	るを	363
おそろしき事なり	210	己が分を知りて	332	おのれにしかずと思へる	483
おちぬべき時に	129	おのが身にひきかけて	168	おのれ先づたべて	321
落ちぬべきまで	354	男ども	239	おのれも入りてたてこめて	412
男か法師か	245	をのこの馬をはらしむる	578	おのれもし兵仗の難もある	385
男なくなりて後	477	を見て	475	おはします比にて	138
男舞とぞいひける	550	をのこの持つまじきものな	475	おひ風ようい	139
男女の事人のうへをもいひ		れ			
		おのづから	93, 172, 232, 443, 474,		
		おのづからあやまりもあり			

御佛名(オブツミヤウ)	72	おぼしき事いはぬは腹ふく	176	思ひ立つ日	176
大井河	509	るゝわざ	70	思ひつる事	156
大井川の水	153	おほしたつべしとぞ	283	思ひの外に友の入り来て	443
大井の土民	153	おぼしてむや	92	思ひよすれば	356
覺えおとり	368	仰事にて求むるなり	580	思ひよそへらるゝ	205
覺えしか	87	おほせて	154	おもひよらぬさまにして	162
おぼえず	261	仰せられける	113	おもひよらぬ道ばかり	474
おぼえずして来る	401	大鷹につかひぬれば	434	思ひわかざらむ人は	518
おぼえずして禪定なるべし	404	大路のさま	76	思ひわづらはれける	266
大方	56, 154	大路見たるこそ	356	思ふ所なく笑ひのゝしり	439
おほかたあへるものなし	152	おぼつかかならずしてやむ		思ふに	137
おほかた何も	370	べし	392	思ふべし	318
大方ぬかれず	159	覺束なからぬは	486	思ふやうに	179
大方のふるまひ心づかひ	464	覺束なからぬやうに告げや	570	おもふやうにめぐりて	154
大方のよしなしごとといはむ	45	りたらむ	570	思へるこそ	351
ほどこそあらめ	45	おぼつかなき事	342	赴くべしと聞かむ人	296
大方は	36	おぼつかなきほど	272	おや	127
大かたは知りたりとも	421	おぼつかなくこそ	240	親のいさめ世のそしり	16
大方人に従ふといふことなし	182	おぼつかなし	452	親の志	377
大方世の中のさわがしき時	500	多久助	549	親はらからゆるして	594
おほかめれ	4	大原野	88	およずけたる姿にてもあり	479
多かる中に	375	大原の里の籠を召すなり	184	なむ	479
大雁どもふためきあへる	412	大砌の石	193	凡そ	314
大きなる誤	483	おほやけの奉り物	14	およそ鐘の聲は	541
大きなる枝	354	おほやけわたくしの大事を	438	及ばざることを望み	340
大きなる車馬えたる馬	119	かきて	438	及ばざる時は	332
大きなる職をも辭し	331	大社をうつしてめでたくつ	573	おりのさせ給ひての春	97
大きなる徳とすべし	316	くれり	573	折からのおもひがけぬこゝ	130
大きなる利を得むがために	232	おぼゆるまでぞ	219	ちして	130
大口	488	おほやう	177	おり立ちて跡つけなど	354
多くて見苦しからぬは	206	おほやうたがはず	410	をりならぬねをなほぞかけ	364
おほくの事をつくれり	550	おほやうは	260	つる	364
おほくのたくみの	35	御室(オムロ)	162	楳にこめくさりをさゝれ	313
おほく飲みたるいとをかし	443	面影はおしはかるゝ	204	折にふれば	78
多くは皆虚言なり	208	重き怪異	506	おりぬ	355
多くまさらぬ石にはかへに	469	重く思はれたりけれども	182	折節のうつりかはること	61
くし	469	思はむや	249	おるべからず	255
おぼし出づる所ありて	109	思ひ出でられ侍りしに	38	愚なるおのれが道	223
おぼし出でて	275	思ひ入りたるさまに	438	愚なる人	515
		思ひおきてむ	93	愚なる人は	379
		思ひくたす	378	おろかにしてつゝしめる	464
		思ひけるけしきにて	280		
		思ひける比しも	243		
		思ひしやうに身をももたず	466		

おろかにせむと…… 249
 愚につたなき人…… 120
 おろそか…… 99
 おろそかなるをもてよしと
 すとこそ侍れ…… 14
 恩愛の道…… 377
 御跡にせさせ給ふ…… 335
 御牛を追ひたりければ 300
 御胞衣とまこぼる時のまじ
 なひ…… 184
 御くだものみきなど…… 443
 御子…… 262
 遠國必ずそむく時…… 429
 遠國よりたづね出されけり
 …… 541
 御作の目録…… 433
 御ぞう…… 91
 御鷹飼…… 190
 御鷹のとりにたるよしなるべ
 し…… 194
 御潮にゐて候ひし事見なら
 はず…… 309
 御供の人はそこそこに 273
 女男を戀ふる故の名にはあ
 らず…… 521
 女と…… 277
 女にたやすからず思はれむ
 こそ…… 17
 女の鬼になりたるを…… 150
 女の髪すぢをよれる綱には
 …… 32
 女の性は皆ひがめり…… 285
 女のなき世なりせば…… 283
 女のはけるあしだにて作れ
 る笛には…… 32
 女の物いひかけたる返事
 …… 281
 女の行きあひたりけるが
 …… 279
 御佛事などさぶらふにや
 …… 138
 御鞠…… 448
 陰陽師有宗入道…… 548
 陰陽道…… 246
 陰陽のともがら…… 413

かくわ

害をかひ…… 118
 廻忽も廻瀆なり…… 521
 かいともしとうよ…… 84
 かいどりすがたのうしろ手
 …… 445
 かいもちひ…… 527
 かいもちひめさせむ…… 573
 かいやりすつ…… 71
 鏡をおそれて…… 337
 鏡さへうとましきこゝち
 …… 337
 鏡に色かたちあらましかば
 …… 571
 かゝりたるも苦しからず
 …… 308
 かゝる事…… 160, 205
 かゝることやうのもの 127
 かゝる徳も有りけるにこそ
 …… 199
 かゝる所にて御牛をば追ふ
 ものか…… 301
 かゝるものの心に慈悲あり
 なむや…… 377
 かきこもりて…… 57
 書きたり…… 184
 書きたるが…… 225
 書きつれば…… 2
 垣根の草…… 62
 書きもうつしてむ…… 311
 かきもて来つ…… 239
 垣や木のまたに…… 455
 火急の事…… 148
 限なう心ばそけれ…… 97
 かぎりなくめでたきものな
 り…… 518
 かくあやしき身のために
 …… 596
 かくあやしきもの…… 456
 かくうとましと思ふものな
 れど…… 443
 かく仰せられける …… 455
 額かくるをうつといふは
 …… 408

額かくるとのたまひき 409
 かくからきめにあひたらむ
 人…… 438
 かくこそあらまほしけれ
 …… 395
 かくこそあれとて…… 518
 かくことごとしくなりけり
 …… 187
 學匠…… 181
 學匠をたてず…… 319
 かく立ちさわぎで…… 152
 かくてあるべきなり…… 460
 かくてもあられるよ…… 41
 かくな恨み給ひそ…… 201
 かくの如くの優婆夷などの
 身にて…… 280
 下愚の性うつるべからず
 …… 232
 下愚の人…… 392
 かくはからひける…… 180
 かく人に恥ぢらるゝ女 285
 かく申すぞかしといひけり
 …… 144
 かくまじなはねば…… 143
 學問をすてて遺世したりけ
 る…… 553
 學問をもせむ…… 466
 學問にたよりあらむためな
 り…… 315
 かくや侍らむ…… 429
 かくよそに見侍らじものを
 …… 418
 神樂(カグラ)…… 55
 かくるゝまで…… 275
 かくれ給ひて後…… 364
 かくれどもかひなきものは
 …… 362
 かくれなく知られぬべし
 …… 487
 かけうげながら…… 160
 かけざる…… 318
 かけず…… 10
 かけたけり…… 154
 景鏡(カゲモチ)…… 538
 かげろふのゆふべを待ち
 …… 26
 かごとがましく…… 140

かこひたりし…… 42
 過差(クワサ)…… 262
 過差ことの外になりて 544
 かざり…… 479
 かさなりたる紅梅…… 368
 重ねて念比に修せむことを
 期す…… 249
 かしがましとてすてつ…… 60
 加持香水…… 587
 かしこき犬の心におとらむ
 や…… 435
 賢き人…… 59
 かしこき人の此の藝におろ
 かなるを見て…… 482
 かしこげにうちうなづき
 …… 485
 かしづき愛したる…… 477
 狀狀…… 581
 頭をば見候はず…… 245
 頭おろしなど…… 18
 數を知らず有り…… 258
 春日…… 88
 かずかずに残りなく語りつ
 づくる…… 167
 數さだまりたる…… 493
 數ならざらむにも…… 21
 數ならぬ身…… 282, 299
 數ならぬ身むつかし…… 282
 霞たつながき春日の…… 514
 數も知らず入りこもりける
 後…… 412
 風にあたり濕に臥して 430
 風のみこそ人に心はつくめ
 れ…… 78
 風も吹きあへず…… 94
 數へあてて…… 359
 かた田舎…… 353
 かたき所を離出して後 292
 かたくな…… 221
 かたくななる人…… 348
 かたくななる人のその道知
 らぬは…… 208
 かたくななる筆練して 225
 かたち有様…… 8
 かたちをあらため…… 339
 かたちを取づる心…… 27
 かたちきよげなる男…… 134

かたち心ざまよき人…… 9
 かたちにはづる…… 173
 かたちの老いたるにまされ
 る…… 433
 かたちは鏡に見ゆ年は數へ
 て知る…… 338
 かたちよしと聞きて…… 127
 肩にかけて拜して退く 193
 片端いひかはし…… 220
 片はしもまねび知り侍らね
 ば…… 342
 かたはらいたかりき…… 566
 かたはらいたく…… 169
 かたはらいたく云ひきかせ
 …… 440
 かたびら…… 159
 かたへなるもの…… 251
 かたへにあひて…… 377
 かたへの人に逢ひて…… 156
 片ほとりなる…… 219
 かたほなるより…… 389
 勝たむとうつべからず 293
 かたらひて…… 162, 266
 かたられ侍りしは…… 559
 かたり興ず…… 168
 勝ちて興あらむが爲なり
 …… 330
 かつより…… 156
 かつあらはるゝもかへりみ
 ず…… 209
 かづきたれば…… 159
 桂の木…… 275
 勘解由小路(カデノウヂ)
 二品禪門…… 409
 門さしこめて…… 19
 看管長(カドノヲサ)…… 501
 門よくさしてよ…… 273
 門より歸りて…… 470
 かなぐり散らして…… 193
 かなたの庭…… 42
 かなでて…… 159
 かなはざりけるを…… 541
 かなはず…… 246
 かなはで…… 159
 かなはぬことをうれへ 340
 かなひぬ…… 474
 必ずあること…… 220

必ずあるべし…… 313
 必ず落つると侍るやらむ
 …… 292
 必ず負すべし…… 387
 必ず囚なり…… 247
 必ず生死を出でむと思はむ
 に…… 170
 必ず人によらず…… 188
 必ず變ず…… 516
 必ず横ざまにすゑられ侍り
 き…… 577
 かねをへだてて…… 160
 かねて思ひつるに似ず 474
 かねて思ひつるまゝの 204
 かねてつかせ給ひける時も
 …… 23
 かねてのあらまし…… 474
 兼行…… 83
 かの鬼のそらごと…… 152
 かのかたはを愛するなりけ
 り…… 397
 かの木をきられにけり 141
 かの木の道のたくみ…… 80
 かの草をもみて付けぬれば
 …… 257
 かの境…… 310
 かの草を取出でて見せ侍り
 し…… 583
 かのためし…… 38
 かのまどひ…… 32
 かばかりあせはてむとは
 …… 92
 かばかりおそれなむや 461
 かばかりとこゝろえて 156
 かばかりになりては…… 291
 かばかりの事…… 107
 かばかりの中に何かは 104
 かばかりの名残だになき所
 …… 93
 河竹…… 495
 かはゆし…… 441
 かはらけよりたゞちにうつ
 すべし…… 520
 かはらず久しき…… 101
 かはらぬすみかは人あらた
 まりぬ…… 90
 かはる所有るまじくや 174

具しもていきたるに	573
愚者の中の戯だに	486
九條殿の遺誠	13
九條相國伊通公	581
九條太政大臣	21
葛	370
くすし	307
醫師あつしげ	345
くすし忠守参りたり	269
くす玉	364
薬を飲んで汗を求むるには	328
薬の外はなくとも事かくま	311
曲者(クセモノ)	396
くちをし	5, 9
くちをしうこそなりもてゆ	くなれ
くちをしからまし	110
口惜しき事をしたまひつる	ことかな
口をしき御心	107
口つきの男	237
くちなし原	239
口にまかせていひちらすは	209
口のほどの細長にして出で	たる貝のふた
くちばみにきゝれたる人	257
口ひきける男	279
香のはな	193
轡鞍の具	462
國に賊あり	258
公人(クニン)の通號	493
丸の巻のそこそこの程に待	る
食ひちらしたる衝重	145
水鶏のたゞく	68
頸のほどをくはむとす	243
くびのまはりかけて	159
頸もちぎるばかり	160
供奉の人	520
くふ物薬種などうまおくべ	し
九品の念佛	303
くまぐまをもとめし程に	525
隈なき	347
久米の仙人	29
雲を懸ひ野山をおもふ	313
くものいかきたる水干	543
位高くやんごとなきをしも	れば
位につかせ給ひて	446
鞍をおきかへさせ	461
くらき人	482
くらぶの山ももる人しげか	らむに
くらべ馬	128
鞍馬にゆぎの明神といふも	500
苦しからぬ事	285
苦しからぬにや	194
栗栖野	40
車の五緒	188
車のながえ	277
車の前	129
車もたげよ	80
暮るゝほどには	356
吳竹	495
九郎判官	553
黒くきたなき身を肩ぬぎて	439
黒戸	446, 559
くろみ綱	309
君子に仁義あり	258
君臣これを重くす	317

け

外記(ゲキ)を召されければ	445
げこならぬこそ	11
華嚴院弘舜僧正	510
外相(ゲサウ)もしそむかざ	れば
げしからぬ形	571
げす女	272
懈怠(ケダイ)	249
血氣内にあまり	431
築村が心なり	313
げにげにしく	210
げにさることぞかし	6
げにさるものなれ	67
げにと聞くかひあるものか	ら
げには	44, 170, 374
氣の上る病	131
毛はげたる	394
けはひなどはつれつれ	278
けはれなく	480
檢非違使の別當の時	505
けふありつる事とて	167
今日缺き侍るべきにあら	ず
今日は心しづかに	426
今日までのがれ來にけるは	359
今日もかたり侍るなり	544
煙立去らでのみ	25
けやけく	374
下蕨になり	261
臉あらむ僧達	163
元應	202
玄暉門院	111
賢愚得失のさかひにをらざ	ればなり
堅固	389
銀置内侍所	97
源氏の公卿	490
源氏物語	50
賢女	285
賢助僧正	587
建治弘安の頃	542
沅湘日夜東に流れ去る	78
玄上は失せにしころ	202
阮籍が青き眼	426
眷属の悪鬼惡神	491
見物の棧敷らつ	409
顯密の僧	415
儉約	318
建禮門院の右京大夫	423

こ

小板敷	84
高運	581
拷器	501
拷器のやう	502
好事を行じて前程を問ふこ	となかれ
江侍従	365
講じて	451
柑子の木	42
孔子も東首し給へり	334
孔子も時に遇はず	516
號する	142
行成位署名字年號	585
行成大納言	92
江師	452
功つもりて	200
強盜法印	142
高名	238
光明眞言	546
高名の木のぼりといひし男	291
高野の證空上人	279
高野の大師	433
弘融僧都	227
高欄によせかく	193
荒涼	536
充龍の悔あり	229
かうろといふ	81
聲うちゆがみ	375
聲のかぎり出して	439
聲をかしくて拍子とり	11
茶をうちけるに	559
御かうのろ	81
小刀して	459
久我鶴手	488
金をして北斗をさゝふとも	118
金はすぐれたれども	317
金は山にすて玉は淵になぐ	べし
久我相國	264
久我内大臣殿	488
小川のはた	243
小土器	525
こきさしぬき	136
故郷の扇を見てはかなしび	230
虚空よく物を入る	571
極樂寺高良	159
苔のたもとにやつれ	432
苔むし木の葉ふりうづみて	105
こゝをきれかしこをたて	23
こゝなるひじりめ	429
こゝにいたりては	532
こゝにおはしけり	488
九重	83
こゝまで來つきぬれば	470
こゝもと	220, 342
こゝろ行きかふ人の見知り	るがあまた有る
心あらむ人	106
こゝろあらむ人	119
心あらむ友もがな	351
心あらむ人はをたのしまむ	や
心あるさまに	34
心あわたし	103
心あわたししく散りすぎぬ	63
心うかるべし	285
心憂かるべし	466
心うきことにて	553
心うく覺えて	156
心憂く覺えて	337
こゝろうし	368
心うし	477
心得がたく見るほどに	488
心得ず思はず	220
心得たらむ	210
心得たる	459
心得たるどち	220
心得たるよしの	221
心得たれども知れりともい	はず
心おくれにして	339
心をすまして	182
心をつくして	35
心をとめけむとはかなし	371
心をとめてありさまを見る	に
心おとりせらるゝ事はあり	ぬべし
心おとりせらるゝ本性	9
心を用ひる事すこしきにし	てきびしき時は
心ぐるし	272, 474
志常に満たず	419
志とゞまり事變じにけるさ	ま
志は達げず	247
志人に勞を施さじとなり	327
心更に起らずとも	404
心閑になすべからむわざ	296
心しておりよ	291
心知らぬ人	220
心すべきこと	237
心すべき事にこそ	243
心づかひしたり	139
心づかひせらる	283
心づきな事あらむ折は	426
心づきなけれ	569
心づけむためなり	460
心といふもののなきにやあ	らむ
心ときめきする	29
心とくをかし	368
心とゞめて見る人	480
心とゞめぬ人	598
心なく折りとりぬ	354
心なしと見ゆるもの	377
心にあひて覺えし事	260
心にうつりゆく	1
心にかゝらむ事	175
心にかゝる事あらば	462
心にくかりき	450

心にくかるべきを……	379	小坂殿……	38	ことうけのみよくて……	373
心にく……	135, 273	後嵯峨の御代まではいざ		ことうるはしき……	567
心にくゝおぼえしか……	230	りけるを……	423	事行へる……	84
心にくゝなりて……	375	後嵯峨院の御代よりはじま		ことぐさ……	220
心にくけれ……	475	れり……	556	後徳大寺大臣……	36
こゝろにくし……	18	御産……	183	五徳の冠者……	553
心にくし……	220	小厨……	237	ことごと……	466
心にくしと見し人も……	439	こしかた懸しきものかれた		ことごとしく……	272, 581
心にくしと見ゆれ……	35	る葵……	362	ことごとしくのゝしりて	
心にとりもちては……	468	こしかたゆくすゑかけて		……	74
心に恥ぢうらやみ……	432	……	274	ことごとしく申し侍りし	
心にも思へる……	418	籠(コシキ)おとすこと	183	……	585
心にも違ひ……	399	異車もたぬ身の……	466	ことごま……	36
心のいとまなく……	16	後七日……	187	ことごまの優におぼえて	
心のいとまもなく……	297	故實の諸官等……	263	……	109
心の色なく……	374	小部……	84	ことごめて……	42, 159
心長閑に物語して……	443	御所……	162	ことさらにともめ例はずと	
心のごりもきよまるこゝ		五條の内裏……	558	もありなむ……	313
ちすれ……	58	五條天神に叙をかける		ことそぎ……	479
心のまゝならず作りなせる		……	500	事足りなむ……	525
……	35	こしらへさせられければ		ことづてとて……	185
心のまゝに……	139	……	154	ことゝふよすが……	105
心のまゝに入りくる事なし		稍も庭も……	274	異なるむ……	288
……	571	期する所たゞ老と死とにあ		ことなる事なき女……	476
心は縁にひかれてうつる		り……	213	異なる事なき題目……	581
……	171	後世を思はむもの……	260	ことなるやうもなかりけり	
心は必ず事に觸れて来る		御世をねがはむにかたかる		……	486
……	404	べきかは……	170	ことに……	129, 348, 451
心はなとか賢きより賢き		御前……	308	事にあづからず……	216
も……	9	御前なる獅子狛犬……	574	ことに打出でて……	298
心外の塵にうばはれて	215	御前にてめしあはせられた		ことにうち解けぬべき折節	
心ぼそからぬかは……	68	りける……	343	ぞ……	480
心ぼそく住みなしたる庵あ		御前の火爐……	519	殊にかしきは……	87
り……	41	御前へめされて……	145	殊に多く食ひて……	179
心ぼそげなるありさま	272	小袖……	488	ことに祭月とすべきに	498
心まさりておぼえしか	227	古代の冠幅……	189	殊にさきをおふべき理あり	
心まどはずやうに返りごと		古代の姿……	80	……	491
したる……	569	小鷹によき犬……	434	ことにふれて……	31
志満つ事なし……	253	小鷹にわるくなるといふ		事にもあらず思へど……	328
心も閑ならず……	425	……	434	事の盡くるかぎりもなく	
心もとなく候……	527	木だちものふりて……	34, 134	……	176
心もとなくて……	101	こたへられたりける……	126	ことの業なくて……	163
心物にうごきて……	431	こだま……	571	ことの外に春めきて……	62
心やはらかに情ある……	374	こちたく多かる……	371	事のよしを申しければ	508
心ゆくばかりつらぬきあひ		こちたくぬぢけたり……	367	調おぼく……	425, 439
て……	304	御聴聞所なるをば……	81	言葉なきこゝちす……	116
心よく数献におよびて	525	子といふものなくてありな		言葉に出でて……	419
心よわくことうけしつ	374	む……	21	詞にても顔にても	487

後鳥羽院の御歌に……	581	此の義を守りて利をもとめ		この大事……	380
後鳥羽院の御作もあり	550	む人は……	531	この財を忘れて……	252
後鳥羽院の御位の後……	423	この木なからましかばとお		此のたぐひのみこそあらめ	
詞の多き……	206	ぼえしか……	42	……	599
言葉の外にあはれにけしき		此の國の博士どもの書ける		此の業を忘れて……	252
おぼゆる……	50	物……	46	此の度は……	274
詞もたくみに……	285	此の藝をつげり……	550	此の度もしたちなほりて命	
言葉よその聞きに隨ひて		この氣色……	394	をまたくせば……	599
……	215	この高名のさい王丸……	301	此の地をしめたる物ならば	
ことゆゑなかりけり……	203	此の心をも得ざらむ人は		……	508
534		……	297	此の所の神なりといひて	
ことやう……	99	この事……	184, 591	……	508
ことやうなる紺の布四五端		此の事ある者のかたり出		此の殿大將にて……	490
にて馬をつくりて……	543	でたりしに……	448	この殿の御心さばかりにこ	
ことやうに曲折あるを求め		この事を甘心したまひて		そ……	38
て……	397	……	229	この名をつけにけるとぞ	
異用に用ゐることなくて		此の事を知らむや……	404	……	142
……	180	此の事をば先づいひてむ		木の葉にうづもるゝ笈……	41
ことわれ侍りしこそ	374	……	470	この目あること末とほらず	
ことわりあるべからず	338	此の事彼の事怠らず成じて		……	246
ことわりいとをかしかりけ		む……	599	この人……	232, 396
り……	512	此の事絶えて後……	501	此の一言の後……	375
こなたといふ人あれば	272	此の事まづ人々急ぎ心にお		此の一調子をもちて……	541
子などいで来て……	477	くべし……	600	此の人の後には誰にか問は	
子にて持たれける……	460	此の理あるべからず……	253	む……	420
この嘲をなすにて知りぬ		此の比……	49, 544	この一箭に定むべしとおも	
……	232	此の比ある人の文……	101	へ……	249
五の穴……	536	此のごろぞ世に多くなり侍		此の文……	404
此の穴を吹く時は必ずのく		るなる……	367	この外もありし事ども	261
……	537	このごろの人の家……	204	此の程……	561
五の穴のみ上の間に調子を		此の比都にはなきを……	75	このほどの事ども……	274
もたず……	537	此の比もてなすものなり		このむ所日々に定まらず	
この間植木を好み……	397	……	310	……	432
此のあらまし……	177	此の比やうの事……	510	好める……	222
このいましめ……	249	此のさはりをやめ侍らむ		この雪いかゞ見る……	107
この歌に限りて……	50	……	126	この用意を……	462
この枝につけて……	190	此のさまざまの得たる所		此の世のごり……	148
近衛殿……	268	……	486	この世のほだし……	76
近衛關白殿にあり……	413	此の獅子のたちやう……	574	此の世も後の世も……	441
此のおきてはたゞ人間の望		この修中の有様にこそ見ゆ		このわたり……	243
を絶ちて……	532	なれば……	187	こはき物先づ減ぶ……	515
此の男……	238	此の宿清明なるゆゑに	592	こは希有の狼藉かな……	280
此の男をぞらうたくして		此の相圖……	491	木幡のほど……	237
……	476	此のしるしをしめすなりけ		茶盤のすみに石をたてては	
此の大臣……	508	り……	152	じく……	428
此のかぎりにはあらざるべ		この相をおほせ侍りき	384	こひしく思ひまゐらせ給ふ	
し……	426	この僧の顔に似てむ……	181	となり……	186

鯉のあつもの 308
鯉ばかりこそ 308
五百生が間 441
古幣をもちて規模とす 263
御坊 235, 238
故法皇 345
こまかなる物を見るに 164
護摩たく 409
小町がさかりなる事その後
の事にや 433
小松御門 446
こまやかに聞え給ふ 274
虚妄(コマウ) 328
巨益(コヤク)あるべしと
456
子ゆゑにこそ萬のあはれは
思ひ知らるれといひたり
し 377
粉雪といふ 455
五葉 192
こよなるなぐさむわざなれ
46
こよなるのどけしや 26
今宵ぞやすきはぬべかめ
る 273
御覽じかなしませ給ひてな
む 39
こりあつまりたる塚 508
是 113
これはいみじと思へばこそ
60
これをおそるべし 471
これを重くして 390
これをかさぬれば 288
これを語る時 414
これを必ずとせば 297
是をすてて 431
是をなやまして興ずること
328
これをねがふ 121
これを選びてやまざれば
288
これをふせぐ間 534
これを待つ間 214
これをも捨てずかれをもと
らむと思ふ心 469

これをもちて 317
これを求むる事やむ時なし
601
これをよそに聞くと思へる
はいとはかなし 360
是々にや 586
これ既にあやぶみのきざし
なり 385
これぞ求め得てきふらふ
525
是第一の用心なり 530
惟繼中納言 234
是顛倒の相よりおこりて若
千のわづらひあり 602
是徳をかくし愚をまもるに
はあらず 124
これなき時は 290
これに志きむ人 435
是に過ぎたり 400
これは 212
これはそゞろごとなればい
ふにも足らず 343
これは難なし 282
これは鶴なり 513
是は論じたまふ所にあらず
512
是實の大事なり 435
これまた禮にあらず 330
是みなとがあり 458
は無常の調子 541
是も仁和寺の法師 158
これやおぼえ給ふ 586
これよく知れるか愚なるか
287
これらになき人事にて 438
これらにも 242
これらの人はかたりも傳ふ
べからず 60
こるびおちぬやうに心得て
520
小わらはの肩をおさへて
440
權化の人 380
言語 288
權者 211

さ

財 371
さい王丸 300
さい王丸にまさりてえ知ら
じ 301
西域傳 452
さいをとれば攤うたむ事を
思ふ 403
西園寺 150, 541
西園寺内大臣 393
才覚をあらはさむと 305
西行 37
細工 316
齋宮 86
最勝講 81
最勝光院 578
最上のやうにてあるなり
260
西大寺 393
才能は煩惱の増長せるなり
122
最明寺入道 523
さうざうし 15
さうなく損捨てられがたし
508
左右の袖を人にもたせて
544
左右廣ければさはらず 517
才ありとてたのむべからず
516
ざえある人 168
才かしくよき人 325
才なくなりぬれば 9
才のほど既にあらはれたり
345
さかしくは聞えしかども
564
盃出したる 443
盃のそこをすつる事 405
盃もてる手にとりつき 439
さがなきわらはべども 575
肴こそなけれ 524
肴とりて口にさしあて 439

境に入りければ 466
境もへだたりぬれば 208
饑餓へおはしける 300
相模守時頼 459
さかゆく末を見むまでの命
をあらまし 27
さかりなる紅梅の枝 190
さかりなる人にならび 340
咲きあひて 368
さきをおはれけるを 490
さぎちやう 453
咲きぬべきほどの梢 347
前中書王 21
さきのつまりたるは 229
作文 11, 197
酒を好む人 307
酒をとりて人に飲ませたる
人 441
銚のしらべし 457
さこそことやうなりけめ
160
さこそ申さまほしかりつれ
ども 546
左近の櫻 367
佐々木隠岐入道 448
さよとさよりけるを 301
さ候へばこそ 240
さよやかなる童一人をぐし
て 137
さしあたりたる目の前の事
にのみまぎれて 466
さし出でたらむこそいと心
にくからめ 389
さしいらへ 221
さし入りたる月の色 34
さし入りて 134, 160
さしうけさしうけ 237
棧敷 354
棧敷かまふるなどいふべし
409
さしたる事なくて 425
さしてことなる事なき夜
480
さしひたして 354
さし寄せたる 277
さしよりて 575
さすがに 41, 75, 173

させることの上せなけれど
も 402
させる本説なし 184
作善 206
さそはれくる 139
誘ふ水あらばなどいふを
595
沙汰 448
さだかならず 433
さだかに知れる人もなし
93
さだかに見え侍りしかば
586
さだかにも辨へ知らず 422
沙汰なきことなり 246
定まれる事にあらず 184
定むべからず 380
定めあはれけり 282
定めあへる 168
定めてならひあることに侍
らむ 575
定め申しつ 344
五月あやめふく比 68
さて 72, 145, 154, 238, 378
384, 553
さて打ちおきたる 227
さては 377
さてはいみじくこそ 39
さてもその人の事のあさま
しき 569
さてもやはながらへ住むべ
き 35
さとくたくみなるは 482
里人おこりて出であへば
238
さながら心にあらず 215
さながら捨つべきなり 175
さながらその姿にて 309
早苗とる比 68
座につきて 202
さにはあらず 406
讃岐のすけが日記 455
さのみ 225
さのみ知りがほにやはいふ
221
さのみ信ぜざるべきにもあ
らず 212

さのみ目にて見るものかは
351
さはあれど 421
さはいへど 105, 173, 444
さばかり寒き夜もすがら
85
さばかりならば 172
さばかりの才にはあらぬに
やと聞え 422
さばかりの人 325
さばかりの人の 230
さはりなく所作なくて 600
さはる事ありてまからで
348
さびしげなる 98
さびしげなるに 134
さぶらひて 345
作法 500
さまあし 439
様悪しき事なり 309
さまあしく及びかゝらず
355
さまさまに推し心得たるよ
しして 485
さまさまにつくろひけれど
131
さまさまに行きかふ見るも
356
寒けく澄める二十日あまり
の空 72
さもあらずと思ひながら聞
き居たる 422
さもあらむかし 29
さもありぬべき事なり 377
397
さもあるべき事なり 116
さもおぼえぬべけれ 77
さもおぼえぬべし 20
さもなかりしものを 210
さやかなれどもくまなくは
あらぬが 277
さやうにしたるをば 510
さやうの折ふしを心得べき
なり 399
さやうの所にてこそ 54
さやうのものなくてありな
む 370

さらずともとおぼえしなり 564
 さらずともと見ゆれ 217
 さらなり 85
 更に 104, 127, 170
 更にあそびの興なかるべし 330
 更にあたるべからず 482
 更にこそ心えはべらね 591
 更に所見なし 452
 更にたよりなかりけり 509
 更にとほりうべうもあらず 151
 更に人にまじはる事なし 338
 更に身にしたがへるたくは へもなくて 59
 更に益なし 121
 さらぬ野山 359
 さらぬ萬の物 305
 さらば 148, 191
 さりがたき 175
 佐理行成のあひだ疑ありて 585
 さりとて 16
 さりながら 210
 さりぬべきものやあると 525
 さる方にあらまほし 19
 さるからさぞともうちかた ちはば 44
 さる心ざましたる人 116
 さることならば 498
 さることなれど 348
 さる事侍りき 304
 さること侍りけむ 96
 さる導師のほめやうやはあ るべき 321
 さるは 16, 106
 さる人 561
 さる人あるまじければ 44
 さる人こそよけれど 567
 さるべき所 402
 さるべきにやと 362
 さるべき日ばかり 105
 さるべき故ありとも 218
 さるものを我も知らず 181

去るものは日々にうとしど いへることなれば 104
 されば 95
 さわさわと 460
 三條右大臣 577
 三藏かな 230
 山澤にあそびて魚鳥を見れ ば心たのしほ 78
 三塔巡禮 584
 三百貫の物を 180
 三昧僧 337
 山門の事を疎にゆしく書 けり 553
 散亂の心ながらも 404
 山林に入りても 172

シ

寺院の號 305
 慈惠僧正 503
 死をおそれざるにはあらず 253
 死をかるくして 404
 しをに 369
 死をにくまば生を愛すべし 252
 死を安くして 224
 しかじかの事 104
 しかじかの事人の嘲やあら む 176
 しかじかの宮 138
 しかず 330
 しかなり 293
 しかも間をくばる事ひとし き故に 537
 しかるべからず 141
 四季物語 363
 しきみ 461
 しきみに眠あてぬれば 461
 色欲にはしかず 28
 軸につけ表紙につくる 255
 しげからぬよし 370
 茂りゆくほど 67
 何候し給ひし御寶司 580
 死期はついでをまたず 400
 自説とて七箇條書きとやめ

たる事あり 577
 侍従大納言公明卿 269
 仁壽殿の方によりて 496
 獅子のたてられやう 575
 四十以後の人 387
 四十九日の佛事 320
 四重五逆 294
 詩序 197
 四條黄門 535
 師匠死にざまに 179
 時正の役七日 410
 四條大納言隆親卿 456
 四條より上さまの人 151
 史書の文をひきたりし 564
 しやら藤の割らぬにて二所 つくべし 192
 しそくさして 525
 子孫おはせぬぞよく侍る 22
 子孫の多き 206
 次第を申し請けられければ 268
 時代やたがひ侍らむ 240
 従へ用ゐることなかれ 531
 したゝめ入れて 162
 滴ることすくなしといふと も 358
 自他につけて所願無量なり 530
 自他のために失多く得少し 414
 しだのなにがしとかや 573
 自他の要事 148
 下より消ゆる 416
 したりがほ 5
 したりがほに 422
 したり顔になれたる 85
 櫛(シヂ) 138
 七徳の舞 552
 寺中 182
 使應の評定おこなはれける ほどに 505
 仕丁やある 116
 慈鎮和尚 553
 静といひける 550
 閑ならでは道は行じ難し 171

しづかなるいとまなく 118
 しづかなる山の奥 360
 閑に過すを樂とす 318
 しづかにつゐるけることだ なく 149
 閑に道を修せむと思ふほど に 599
 しづくならでは 41
 失の本なり 464
 師とするより外の才覚候は じ 268
 品かたち 9
 品くだり 10
 品くだりみにくゝ年もたけ なむ男は 596
 死なざる日はあるべからず 358
 品の高さ 418
 信濃前司行長 552
 信濃入道 553
 しなのほどはかられぬべき 168
 指南とす 540
 死ににけり 132
 死ぬるなり 143
 師の云く 249
 忍びがたくば 313
 忍びたるけはひ 109
 忍びたれど 274
 忍びやかに 268
 忍びやかにいひたりし 450
 しのびやかに奉らせけり 266
 しのぶ 105
 しのぶの浦の聲のみるめも 所せく 593
 しばし此の事はてて 175
 しばしとやいふ 177
 しばしもとどこほらず 399
 しばし世をのどかには思 ひなむや 359
 芝の上にて 444
 柴の枝 192
 死は前よりしも来らず 400
 しばらく衣裳に薫物す 28
 暫く樂しぶともいひつづけ ら 216

しばらくも住すべからず 530
 しばらくも住せず 598
 権榮 351
 しひて不信といふべからず 405
 しひて智を求め賢をねがふ 121
 強ひのませたるを興とす 437
 四部の弟子はよな 280
 四方拜 73
 しほたれて 15
 しみじみと見ゆ 34
 しめやかに 109
 しめやかに物語して 43
 霜いたくきらめきて 277
 下人 138
 下さまの人 211, 440
 下さまより事おこりて 184
 下毛野武勝 190
 下毛野入道信順 384
 しもと 501
 下に利あらむこと疑あるべ ならず 378
 下部 237
 下法師 534
 赤舌日 246
 社参の次に 526
 しやせましせずやあらまし 260
 社頭 491
 謝靈運 289
 終焉 379
 十を捨てて十一につく事は かつし 468
 十月諸社の行幸其の例もお ぼし 499
 十月は小春の天氣 400
 住する隙なくして死期すで に近し 599
 集どもにあまた入りたる人 197
 柱のひとつ落ちたりしかば 564
 宗の法燈 182
 衆議判 51

宿河原 303
 宿執開発の人 381
 殊勝 333
 殊勝の事は御覽じとがめず や 575
 主上の御惱 500
 数珠おしすり 163
 出仕 254
 出仕して 182
 衆に交りたるも 392
 首切殿經 451
 舞を學ぶは舞の徒なり 233
 順徳院の禁中の事ども書か せ給へる 14
 筮 538
 淨衣 520
 莊園おほく寄せられ 91
 生を苦しめて目をよるこば しむる 313
 小をすて大につく 468
 生を隔てたるやうにして昨 日の事覺えず 438
 生を食り 213
 聖海上人 573
 傷害のおそれおはしますま じき御身にて 385
 定額 492
 正月に打ちたるぎちやう 453
 生活人事伎能 216
 上氣 387
 聖教の一句 404
 聖教のこまやかなることわ り 375
 上下 151
 上卿 84
 上古 263
 相國の望 229
 招魂の法 513
 常在光院 582
 陣子 225
 生死の到来 129
 請じ侍りしに 320
 承仕法師 412
 生住異滅 399
 常住ならむことを思ひて 214

常住平生の念に習ひて 599
繩床に坐せば 404
盛親僧都 179
小人に財あり 258
昇進もし給はざりけり 325
上手 389
上手といひし人 293
上手はいづれも吹きあはず 538
勝絶調をへだてたり 537
章段の缺けたる事のみぞ侍る 228
聖徳太子 23
浄土寺前關白殿 283
浄土宗にはちぢず 319
上人なほ床しがりて 575
證人にさへなされて 210
上人の感涙いたづらになりけり 575
浄然上人 393
生の中におぼくの事を成じて後 599
生佛 553
生佛東國のものにて 554
勝負のまけわざにとつげなどしたる 563
稱名を追福に修して 546
聲明にせり 556
城陸奥守泰盛 461
小要をもなすべからず 530
逍遙の友としき 314
情欲多し 431
上臈 260
生老病死 400
丈六の佛九體 92
正和の頃 92
諸縁 297
諸縁をやめよ 216
所課 344
所願あれどもかなへず 531
所願一事も成せず 599
所願を成ぜざれども 531
所願心にきざす事あらば 530
所願心に來らば 600
所願は止む時なく 530
所願を成ぜむがために財を

過ぎにし方の戀しさのみぞ 100
過ぎにしこと 148
過ぎぬるかたのあやまれること 148
直なもじ 185
すぐにはじけば 429
すぐれたる人とやはいふべき 120
すぐれて 119
雙六 292
雙六の石 359
資季大納言入道 342
資朝卿 394
すけるかたに心ひきて 432
敷行となほさるべし 583
少しかこつたも 44
少しきの利を受けず 232
少しくだけたるすがたにもや見ゆらむ 51
少し心あるきは 177
少し其の遣しらむ人は 169
少しにぶき刀をつかふといふ 558
すこしの事にも 156
少し飲みたるもいとよし 444
少しもあざむかず 486
少しもあやまる所あるべからず 485
少しもなづまざるかたの 304
すさまじ 367
すさまじきものにして見る人もなき月 72
數日にいとなみ出して 154
すまけたるあかり障子 459
硯も能ざまに置きたる 577
すまなる人 571
すまにひちちらす 422
すまに飲ませつれば 438
簾たふみ 356
簾張り出で 354
捨てがたく 87
捨てがたとて捨てざらむや 177
すでに朝夕にせまれり 148
すなはち 233
則ち 257
すなほ 232
すなほならずして拙きものは 285
すなほならねど 232
すなほにまことと思ひて 485
すなほにめづらしからぬ 397
簀子透垣のたよりをかしく 35
數百年を經たり 263
すべからず 530
すべき方のなければ 338
すべて思ひすがたきことおほし 64
すべて所願皆妄想なり 600
すべて人は無智無能なるべきものなり 564
すべて餘所の人のとりまかなひたらむ 596
すべて萬の花紅葉 368
すべりつゝ 481
住みなしたる所 34
住みはつる 25
すみはてぬ世に 27
速にすべき事 148
速にやむ 332
住吉 88
住む所にしもよらじ 170
修理して 460
すりのきたるに 590
するすみ 377
寸陰 287
せうとに 141
せうとの城介義景 459
世間の浮説 414
世俗の事にたづきはりて 392
世俗の虚言 212
世俗のもだしがたきに隨ひて 297
切に歎くこともある人 296
説經 465
説經師 466
刹那おぼえずといへども 288
説法いみじくして 320
是なる時はよろこび非なる時はうらみず 516
錢あれども用ゐざらむは 531
錢を財とすることは願をかふるが故なり 531
錢を奴の如くしてつかひ用ゐる物としらば 531
錢つもりて盡きざる時は 531
錢二百貫 179
せぬはよきなり 260
せばき時はひしげくたく 517
是非すべからず 483
是法法師 319
せむかたなき 100
ぜむにあひては 323
先賢 228
運幸 111
善業おのづから修せられ 404
前後違ければ塞がらず 517
前後も知らず 438
善根をやく事火の如くして 441
前裁 35, 206
淺才の人の必ずある事なりとぞ 306
先日来りて云く 536
先祖の誓 419
先達 156
先達後生をおそるといふ事 537

先途 214
 善にはちかづく事のみぞおほき 173
 善に伐らず 331
 善にほこらず物と争はざるを徳とす 418
 勝部に尋ねられ 191
 千本の釋迦念佛 557
 千本の寺 589
 宣命 266
 千里の外までながめたる 350
 禪林の十因に侍り 148

そ

草 582
 ぞう 22
 早歌 466
 増賀ひじり 7
 造作 165
 草子 260
 雑事の小節にさへられて 297
 相者 385
 僧正かへりて侍りしに 587
 さうぞく 479
 僧都見え 588
 相傳 240
 さうなき 308, 461
 さうなき庖丁者 561
 さうなき武者なり 373
 さうなきもの 310
 僧に法あり 258
 雜人 129
 さうぶ 364
 想夫戀 521
 相論の事ありけり 413
 息災なる人 438
 俗姓は三浦のなながしとかや 373
 そくひ 203
 そこそこに 151
 そこにこりたるをすつるにや候らむ 406
 そこはかとなく 2

若干 572
 そこばくのとがあり 419
 そこほどにてぞありけむ 204
 講る 232
 そしるともくるしまじ 297
 そまのかしいでにけり 163
 そまろごといはれしついでに 590
 そまろに神のごとくにいへども 208
 卒爾にして 404
 袖かきあはせて 245
 袖と袂と一首のうちにあしかりなむや 581
 外なるは下乗内なるは退凡 497
 卒都婆 105
 外より来る病はすくなし 328
 そのあしみなになりけり 180
 そのあまりの暇 318
 そのあまりの暇いくばくならぬうちに 288
 そのありさま参りて申せ 591
 その家にあらずば 224
 その家にかけれぬれば 501
 その馬を馳すべからず 462
 その愁忍びがたし 318
 その益もあるにこそ 375
 そのおもひ我が身にあたりて 313
 その題を知りなば 392
 その折のこま 101
 そのかただに 106
 そのかたとて 92
 その化遠く流れむこと 430
 そのかまへを待ちて 416
 その来ること 213
 そのきはばかりは覺えぬにや 105
 その興つきて 397
 その子うまごまでは 5
 その聲不快なり 537

その心しらぬこと 343
 その心づかひを修行すべし 530
 その心に隨ひてよく思はれむ事は 285
 其の心はやく足りぬべし 173
 其の事 168
 その事跡より顯はるゝを知らず 285
 その事を聞くに 414
 其の事をなさむと思へど 474
 その事かの事便宜にわするな 54
 そのこと定まれる事なし 215
 その事となきに人の来りて 426
 その事となく 262
 その事となくとり出でたる 563
 その事に候 291, 575
 其の事はてなばとくかへるべし 425
 其の事持たむ程あらじ 176
 その事やみにけり 263
 其の理は牛の主に限るべからず 252
 その比 218
 其の沙汰にも及ばぬことなり 566
 その座に侍りけるが 471
 その時節 288
 其の死に臨めること 360
 そのしるし 457
 その田を刈りてとれ 512
 其の智を知れりと思はむ 482
 その智を人にまさらむと思ふべし 331
 其の時 148, 177
 その時を知る 323
 其の所とても刈るべきことありなけれども 512
 その根のありければ 141
 その根ふかく源とほし 32

その後たふれふしたるまゝにて 92
 圓別當入道 561
 其の始を知らず 263
 その聖 451
 その人ぞ持ち給へる 449
 其の人にあひ奉りて 303
 其の人の心になりて思へば 378
 その人の虚言にはあらず 210
 その人の日來の本意にもあらずや 380
 其の日のけいめいして候ひけるが 459
 その外の鳥獸 313
 その外は心うき事なり 308
 その外はのがれぬと見れど 359
 そのほど 27, 354
 其の本説なし 498
 其の道をしれる者 154
 其の物につきて其の物を費しそこなふ物 258
 その益まさるべき事を思ひ得たらば 470
 その故は 247, 536
 其の世にはかくこそ侍りしか 525
 その世の歌には 50
 其の例もなし 499
 そのわたり 53
 そひむたらめ 476
 そむきてうしろざまに 574
 そむき走る事あり 516
 そむけるかひなし 172
 染紙 87
 染殿大臣 22
 そも 156
 抑々 531
 そもまた程なくうせて 105
 そらごと 151
 虚言を心得そふ 485
 虚言の本意 486
 虚言は不便なれど 325
 そらだきものにほひ 139
 そらに申しはべらば 345

空の名残 76
 それかかれかなど 356
 それにとりて 468
 それはさこそおぼすらめども 373
 それも 310
 それもさるものにて 62
 それもすたれたる所のなきは 421
 それもとめておはせよ 588
 それも物うとくすさまじかりなむ 285
 それより下つかた 5
 損ありといふべからず 252
 存知候はず 191
 尊者の前にては 564
 孫農 60
 損せざらむとて品なく見にくきさまにしなし 225
 存命のよろこび日々いたのしまざらむや 252

た

第一の事を案じ定めて 468
 第一の事なり 392
 第一の道 261
 大覺寺殿 269
 大極殿より鳥羽の作道まで聞えけるよし 333
 大事をいそぐべきなり 468
 大事をおもひたゝむ人 175
 大師勸請の起請 502
 太子の御時の圖 540
 太衝 413
 大將にもなさばや 325
 大食にて 181
 太神宮の遙拜は異に向はせ給ふ 335
 臺所 525
 大納言法印 244
 大につき小をすつることわり誠にしかなり 434
 内府 394
 大福長者 530
 退凡下乗の卒都婆 497

對面し奉らば 304
 大門金堂など近くまで有りしかど 92
 大欲は無欲に似たり 533
 大理 262
 内裏 393
 内裏造らるゝにも必ず造りはてぬ所を残す 228
 内裏にてありけるを 402
 大理の座 506
 絶えぬなからひともならめ 477
 鷹を持たれたりけるは思はずなれど 325
 たかきつかさ位をのぞむも 120
 高くやんごとなき人 306
 高倉院の法華堂 337
 鷹にかはむとて 325
 互にいはむほどの事をば 44
 互にいふ事もなく 104
 互にはかりて 483
 たがひの心に 414
 たがひのため益なし 426
 高遣戸 84
 財 118
 財をもて禮とし 332
 財は盡くる期あり 530
 薪にくだかれ 106
 たくみにしてほしきまゝなる 464
 たくむ 162
 たけき河のみなぎり流るゝが如し 399
 たけく勇める兵 307
 竹谷乗願房 545
 長(タケ)にくらべて切りて 193
 竹の圓生 4
 たしかに知らざればなり 340
 他日に景茂が申し侍りしは 538
 嗜みける程に 466
 たしなむ 390
 太政大臣にあがり給はむに 228

他所へ行幸ありけり	402	立ちむかひて	238	たふとかりけり	126
助けよやねこまた	243	龍秋	536	たふとかりけるいさかひな	
誰そ	303	達人	485	るべし	281
たそ	559	たづねきかまほし	135	たふとき聖	260
たといふ言葉	80	尋ね開きてむや	471	たふべくもあらぬわざにも	
たとい今	205	尋ねさせ給ひければ	546		32
唯今御所にて	580	尋ね申し侍りしかば	255	珠を走らしむるに似たり	
たとい今にもやあらむ	129	尋ね申すまでもなし	342		431
唯今一念空しく過ぐるこ		たづねまうで来りしが	548	玉垣しわたして	87
とを惜しむ	288	尋ねまからむ	471	たまたま	232
たとい今もや	144	たづのおほいどの	547	たまたま出仕の微牛をとら	
たといおそろしく鬼のかほに		たてあげ所せげなる遺戸		るべきやうなし	506
なりて	132		272	玉だれに後の奏はとまりけ	
たといくるくと巻きて	511	縦ざま横ざま	576	り	363
たといこゝもとを正しくすべ		立てたる石必ずあたる	429	玉造といふ文	433
し	429	立て並べたるほどは	359	玉の唇の當なきこゝちぞす	
たといし	121	たとひ望ありとも	173	べき	15
但しおぼくは不吉の例なり		たとへばさばかりにこそ	476	給はりて	459
	499	掌の上の物を見むが如し		たまたまつるわざ	75
たといしづかにして亂れずと		いはば	487	民を撫で農をすゝめば	378
いはば	379	七夕まつる	69	民の愁	13
たといちに行ひゆくものなり		他にまさる事あるは大きな		手向けられけり	197
	399	失なり	418	爲兼大納言入道	394
たといならぬに	87	多年の非	404	爲則	301
たといはれにはれみちて	159	多能は君子のはづる所	316	たやすからぬ道	311
たとい人	4	他の事聞入れず	296	たやすく改められがたきよ	
たとい人にはあらざりけると		他の事の破るゝをもいたむ		し	263
ぞ	460	べからず	471	たやすくうち出でむもいか	
たとい一人あるのみこそよけ		たのしび	118	がとためらひける	561
れ	215	たのしびかなしびゆきかひ		たゆみ給へる	274
たとい吹くばかりなり	538	て	90	たゆみなくつゝしみて	463
たとい迷の方に心もはやくう		他の財をむさぼるには	253	便あしくせばき所	103
つり	285	田の中の水におしひたして		たよりにふれば	172
たとい物をのみ見むとするな			488	便よき所	162
るべし	355	頼みたる方の事はたがひて		誰をか恥ぢ	121
太刀	99	たのみて	199	誰がしがむこになりぬとも	
館(タチ)	198	たのむにもあらずたのまず			476
たちあかししろくせよ	81	もあらで	485	誰か實有の相に著せざる	
立入れられるに	200	たのめぬ人	474		328
太刀うち佩きて	237	たのもしくおぼえて	237	誰かは思ひよらざらむなれ	
立ちかへり	323	たばさみて	248	ども	130
たちかへりとるべきにあら		旅だちたる	53	たれこめて春の行衛知らぬ	
ず	266	旅の假屋	200		347
立ちどまりたるに	578	旅のかりや	443	誰ともなく	168
立ちぬ	590	平宣時朝臣	523	誰にか知られむことを願は	
立ちへだてて	129			む	121
立ちまじりて	10			誰の人か足らずとせむ	318

誰もあるべき事なり	426	ば	575	つかのま	148
談義	586	千年を過すとも	26	つかはれて	118
談義の座	179	千とせを待たで	106	月あかき夜うちふけて	589
檀那すさまじく思ふべし		小さくて	114	月をめで	196
	466	智もなく徳もなく	123	月をもてあそぶに良夜とす	
丹波に出雲といふ處あり		蕭陣	268		592
	573	中陰のほど	103	つき鐘の銘	582
たんばのこゆき	255	誅をうくこと速なり	516	次ざまの人	167
短慮のいたり	536	中宮	308	つきすまじけれ	277
		忠孝のつとめも	316	つきせぬ言の葉にてもあら	
		中と六とのあはひに神仙訓		め	595
		あり	537	つきづきし	445
		中門	505	つきて	543
		中門よりふるまひて参る		次におろかなり	120, 121
			193	次に鳥鐘調をおきて	537
		鈍子にかはらけとりそへて		月の夜は聞のうちながらも	
			524		351
		調度の多き	206	月の夜雪の朝花のもとにて	
		廳のうちへ入りて	506	も	443
		廳務おこなはれける	262	月ばかりおもしろきものは	
		聽明し侍りしに	590	あらじ	78
		聽明の人ども	320	月花は更なり	78
		廳屋	263	月満ちては缺け物盛りにし	
		勤勤の所	500	ては衰ふ	229
		勤書	254	月みるけしきなり	110
		勤問	508	机の上に文をくりひろげて	
		散りしをれたる庭	347		135
		散りしをれたる花	134	筑紫	198
		ちりぢりに行きあがれぬ		つくづくと一年をくらすほ	
			104	どだにも	26
		力衰へて分を知らざれば病		つくらせられけり	154
		をうく	332	作り出されて	111
		力をもて禮とす	332	作りてつけよといふに	565
		力なき	201	作り磨かせ給ひて	91
		契	349	つくる枝踏ます枝あり	
		畜生殘害の類なり	325		192
		竹林院入道左大臣	228	つくり出づる	481
		兒どもも常のことなれど		告知らせたらむに	288
			581	つごもり	74
		兒にておはします	144	ついでをかしきやうにとり	
		智者	179, 371	なしたるも	562
		血たり	159	ついでなくてこれを奉らむ	
		父	603	といひたる	563
		父の相國	506	ついでに物習ひ侍らむ	345
		血つきて	239	追儼	73
		ちと承らばやといはれけれ		追儼の上卿	268
				通をうしなひけむ	29

つたへきかむ人 121
 傳へ聞きたらむは 438
 傳へ知りたり 471
 つたへて聞き學びてしる 422
 土おほね 198
 土おほねら 199
 土偏に候 345
 土御門相國 491
 つゞくこそおもしろけれ 73
 つゞしみて是を忘るべし 419
 つゞむに 16
 つとめにしけり 555
 つなぎくるしむるこそいたましけれど 313
 常にあるめづらしからぬ事のまゝに 210
 常にいとなませ給ひける間なり 447
 常にいふことに 409
 常にいふれど 389
 つねに聞きたきは 56
 常の事なり 510
 常の事なれど 418
 恒の産なき時は恒の心なし 378
 常に申しむつびけり 237
 常に見及び侍りしなども 544
 常に行通ひしに 244
 角あるものの角をかたぶけ 418
 翅をきり籠に入れられて 313
 兵(ツハモノ) 187
 兵盡き矢きはまりて 224
 兵の道をたて 222
 つひえもなくて物がらのよき 226
 終に上手の位に至り 390
 終に物にほこる事なし 419
 つぶつぶとなるを 200
 つぶやきける 268
 局の内より 586
 つばみたと攷りたるとに

つく 192
 つまづま合せて語る 210
 妻戸 109
 妻戸のよきほどにあきたる 134
 つまるやうにするを 159
 つみなはむ 378
 爪をおぼしたり 565
 つやつや知らぬ 485
 つやつや物もみえず 163
 つやゝかなる 136
 つゆおとなふものなし 41
 露こそあはれなれ 78
 露霜 115
 露たがはざらむと 44
 露忘るゝにはあらねど 104
 強き所弱き所を知るべし 462
 つらつらおもへば 121
 貫之 50
 鶴を飼ひ給ひけるゆゑに 547
 鶴岡 526
 鶴にて斬りこゝちみたりけるにや 322
 つれづれと籠りたる 271
 つれづれなぐさまめ 44
 つれづれならず 356
 つれづれなる目 443
 つれづれなるまゝに 1
 つれづれにて 426
 つれづれもなく 57
 つれづれわぶる人 215
 つれなくすぎて 390

と

とありかゝり 355
 といとおそろし 377
 といひて 246
 といふは 170
 といふおろかなり 246
 といへど 410
 といへば 540
 といへり 247
 洞院右大臣 267
 洞院左大臣殿 229
 堂上せられにけり 266
 當月 498
 道眼上人 451

て

手足はだへなどの 29
 亭主夫婦 527
 泥土のわづらひなかりけり 448
 手をすりて 238
 手をひき杖をつかせて 159
 手おほせ 238
 手かく事 315
 敵襲ひ來りて 198

東國にて 303
 東寺 396
 導師 320
 道志 544
 導師に請ぜられむ時 466
 東寺の若宮 490
 とろしみ 543
 道場をけがし侍るべし 304
 開諍を事とす 304
 開諍おこりて 152
 同宿して侍りける 235
 冬至より百五十日 410
 道心 170
 道心者 180
 堂僧 585
 凍餒 378
 當代 580
 東大寺の神輿 490
 藤大納言 559
 堂塔を 416
 唐土の西明寺 452
 唐土は呂の國なり 495
 東二條院 545
 道人 288
 桃李もの言はねば誰と共にか昔をかたらむ 90
 登蓮法師 471
 とが 419
 とかく 154
 とかくすれば 159
 とかくせしほどに 523
 とかくの事なく 486
 とかくの用意なく 399
 緋尾の上人 381
 料の者絶ゆべからず 378
 とがむ 272
 とがむべからず 509
 とかや 242
 とかや聞えける人 342
 土器 264
 時うつり事さり 90
 時をうつす 288,425
 時をもわかずめでたけれ 78
 時をもわかぬものなれば 480
 解きてなほさせけり 510

時々通ひすまむこそ 437
 敏きときは則ち功あり 472
 時にあたりて本歌を覺悟す 581
 時にあはずして 120
 時にあひ 5
 時にあへば 120
 時にとりて 130
 時の間に失ひやすし 516
 常磐井相國 254
 とき非時 182
 讀經うちして 234
 徳ありとて 516
 徳をつかむと 530
 得失やむ時なし 216
 とく損ずるがわびしき 227
 徳大寺有大臣殿 505
 徳大寺太政大臣 85
 徳大寺にも 39
 徳たけ 390
 徳たけたる有様 393
 徳にそむけり 330
 徳人 261
 徳の至れりけるにや 183
 得の本なり 464
 とこしなへに違順につかはる 601
 所えがほに入りすみ 571
 所えたるけしき 568
 所さだめずまどひありき 15
 ところせき様したる 13
 所せくわたしもてくる 311
 所々うちおぼめき 210
 所なくなみつる人 356
 所の者 114
 所より使廳へ 412
 年老い袈裟かけたる法師 440
 年をおくりて 544
 年五十になるまで上手にいたらざらむ 391
 年毎にたまはる足利の染物 527
 年比 156
 年頃もあればこそあれ 176
 年月 95

富めるのみを人とす 530
 ともあるごとには 437
 ともある時 117
 具氏宰相中將 342
 ともがらに争ふべからず 331
 ともしからず 179
 ともしくかなはぬ人のみあれば 374
 燈のもとに 46
 共にあたらず 483
 とよまれて 559
 とよみになりて 346
 とらずして 266
 捕へつゝ殺しける 412
 とられむこといづれの石とも知らねども 359
 とりあつめたる事は秋のみぞおぼかる 69
 とりあへずよき程にする 281
 鳥一雙 190
 鳥を愛せし 314
 とり行ひたる 443
 とり返さるゝ齢ならねば 467
 とりしたゝめ 100
 とりためけむ用意ありがたし 448
 とりつきながら 129
 とりどりに 396
 鳥部野 358
 鳥部山 25
 とりわきて 444
 頼阿 227
 食欲おほき 173
 食欲甚だしく 285

な

内記 266
 内外の文 228
 内侍所の御神樂 449
 内侍所の御鈴の音 85
 内證必ず熟す 404
 内辨 266

なえなる直垂 524
 名を聞くよりやがて 204
 なかうどいづかたも心にくきさまにいひなして 595
 中垣の穴 325
 ながき世がたりともなる 432
 ながき世に残さむ 119
 長き夜のすさび 100
 なかご 87
 半空にこそならめ 477
 九月九日菊にとりかへらる 364
 長月ばかりに 194
 なかなか 7
 なかなか御存知などもこそきふらはめ 196
 なかなかそのよしをいひてむ 426
 流を残して口のつきたる所をすゝぐ 406
 なき跡まであきまし 477
 なきに事かけぬやうをはからひて過ぐる 260
 なき人の 100
 なき人のくる夜とて 75
 なき人のわかれよりもまさりて 95
 なくてはあらぬわが 172
 なくなりぬる 106
 なげきもよろこびもありて 217
 なげし 277
 名残なくいかゞとり捨つべき 363
 情おくれ 374
 情なき御心にぞものし給ふらむ 377
 情なし 297
 情なしとらみ奉る人なむある 590
 情なう 104
 情にめで 432
 なじかはすてし 173
 なぞなぞ 269
 なつかしからず 370
 なつかしくし 325

夏の氣を催し 400
 夏のせみの春秋を知らぬもあるぞかし 26
 などいはむは 173
 などか 148
 などか頭ばかりの見えざりけむ 245
 などかなからむ 172, 232
 などかならはざりけむ 418
 などつゞけたり 514
 などはいふめる 348
 などばかりいひやりたれば 569
 何阿彌陀佛 242
 何をか樂とせむ 532
 なにがし男にはらせ候はむ 459
 なにがしとかやいひし世すて人 76
 なにがしの押領使などいふやうなるもの 198
 なにがしの大納言とかや 282
 なにがしの律師 337
 何かはあはれならざらむ 78
 何かは女の恥づかしからむ 285
 何かはせむ 27
 何事をかいとなまむ 435
 何事をか打出づる言の葉にせむ 595
 何事をかたのみ何事をかいとなまむ 288
 何事をか待つ 213
 何事かありけむ 156
 何事かきふらふべきと申されたる事も 581
 何事かしばらくも住する 247
 何事か勝利おほき 546
 何事なりとも答へ申さざらむや 342
 何事にかあらむ 277
 何事にもまことありて 567
 何事の式といふ事 423
 何事も 221
 何殿 83

名に二種あり 602
 何の興ありてか 170
 何ものの言出でて忌みはじめけるにか 246
 何も皆事のとゝのほりたるは 227
 何門 83
 繩をひかれたりし 38
 なべて 374, 377
 なべてこの事あり 466
 なほあはれに情ふかし 347
 なほあやまりもこそあれ 486
 なほいきまきて 280
 なほいひやまざりける 143
 猶もよりにおなじ様なれば 590
 なほうたておぼゆれ 104
 なほ梅のにほひにぞ 63
 なほおぼつかなし 433
 なほげにげにしくよき人かなとぞおぼゆる 117
 なほさだかにと思ひてや問ふらむ 569
 猶なまめかし 5
 なほよくひき見よ 580
 なほわづらはしく 485
 なほわづらはしくなりて 132
 なまじひに 389
 なまめかし 69
 なまめかしきに 355
 なまめかしきものなれや 87
 なまめかしく 56
 なまめきたる道世の僧 237
 なみみて 163
 涙ぐみて 575
 なみなみにはあらずと見ゆる男 277
 那蘭陀寺 586
 那蘭陀寺と號す 451
 那蘭陀寺は大門北むきなり 451
 ならひ 25, 95
 ならびなき名をうる 390

ならびの間 162
 ならぶ時 463
 奈良法師 237
 なりけむかし 144
 なりひさご 59
 業平實方なり 196
 馴れたるさまに上手めき 568
 馴れて見侍るに 373
 なれなれしからぬあたり 443
 なれにし 95
 南華の篇 46
 何條事かあらむ 457
 何條百日の鯉を切らむぞ 562
 何ぞ技を思ふこと技にあらざる 339
 何ぞしづかに身をやすくせざる 339
 何ぞたゞ今の一念において 250
 何ぞやがて退かざる 339
 何といふぞ 280
 何ともしも思はで心をつけぬ 485
 何となき具足 100
 何となきそゝるごと 342
 何となく 355
 何となく前後の文も見ゆ 404
 何とも候へ 321
 何の入道とかやいふ者 127
 南門 92

に

二月十五日 589
 二月涅槃會より聖靈會までの中間 540
 題にもつくるものなれば 308
 にぎはしきにつきて 595
 にぎはひゆたかなれば 374

にくませ給ひける君の御心 325
 似げなき老法師 594
 似げなく見苦しけれ 299
 逃げむとするをとらへてひきとめて 438
 にこそあなれ 382
 西山 470
 西山へ 470
 にたる 172
 入宋の沙門 451
 にともなひて 587
 になといふはあやまりなり 407
 二の舞の面 131
 俄にしもあらぬにほひ 273
 俄の大事をいとなみ 296
 庭に散りしをれたる花 134
 庭の儀を奉行する人 448
 二疋をつく 534
 にほひなどはかりの物なるに 28
 にほひなどもうつるばかりなれば 590
 にほひめでたき 368
 にほひものの音も 480
 女院 402
 女房 139, 146
 女房どもに小袖に調せせて 528
 女孃 492
 女性なれども聖人の心にかよへり 460
 によびふし 438
 によび伏したる 239
 如輪上人 557
 にるべからず 173
 にれ打噴みて 506
 人我の相ふかく 285
 人間常住のおもひに住して 530
 人間のいとなみあへるわざ 416
 人間の儀式 296
 人間の大事此の三にすぎず 318

人間の種ならぬぞやんごとなき 4
人事多かる中に 434
人数だて 80
任大臣の節會 265
仁和寺 155, 534

ぬ

鶴鳥も喚子鳥のことさまにかよひて聞ゆ 514
ぬしある家 571
主にかへして 507
ぬしのがなり 457
主は存せり 252
盗人をいましめ 378
布のもかう 99
ぬれたるやうなる葉 351

ね

ねがはしかるべき事 4
ねがはしくして 432
猫のへあがりて 242
ねこまた 242
ねたく口をしと思はざらむや 438
ねたさに 512
ねちゆがみうちかへりて 396
ねばりたるものにこそ 308
睡り居たるこそをかしけれ 85
ねぶりていとも見ず 355
睡にかされ 125
ねぶらむよといふに 129
ねんごろにあらひけり 488
念比にいとなみいでて 162
念比に信じたるも 212
念々の間にとまらず 213
念々のほしきまゝに來りうかぶ 571
念佛 125, 546

の

能あるあそび法師どもなど 162
能ある人 261
能ある人かたちよき人も 55
能をつかむとする人 389
腕をはむ 388
能をもつき 466
能書 181
のがれがたきものを 177
軒長ばかりになりて 291
のけあへぬ時は 537
残さまほしきを 121
残しおかじと思ふ反古など 100
のこりなくうち入れむ 323
のこる松さへ嶺にきびしき 51
荷前の使たつ 73
望は絶えず 247
のたまはせたるもうれし 444
のたまひたりしをかしくおぼえし 562
後に 254
後につかはされけり 528
後にも殊更に感じ仰せ下されける 51
後の葵不用なりとて 361
後の世の事心にわすれず 18
後の世は 441
後のわざどもいとなみあへる 103
のちは 132
後は誰にとこゝろさすものあらば 371
のどかに物語してかへりぬる 426
のどやかなるさま 135
のどやかなる日影に 62
のどやかに 34
のどやかに艶なる空に 133
のゝしりあへり 151
のゝしりければ 238
のゝしりたるにつけて 7
野宮 86

のぼせて 291
のみぞ 91
野山などにて 444
のら 140
のりあひいさかひて 440
乗る人 579
乗るべき馬 462
乗るものなり 188
野分のあした 69

は

はいがいの馬 384
配所の月罪なくて見むこと 20
はかせ 540
はかなかるべけれ 93
はかなき 91
はかなみ 170
はかばかしき 342
はかばかしき人 310
はかばかしき人のさぶらはぬ故にこそ 309
はからざるに 251
はからざるに病をうけて 148
はかり 98
謀をもとむ 430
はかり給ひける 591
脛たかくかゝげて 439
萩の下葉色づくほど 69
白氏文集 46
ばくち 322
勵み習ふべき行末もなし 392
妖物ありけり 559
箱のくりかた 255
箱ふぜいの物 162
始ある事も終なし 247
はじめて名をあらはすべき道なり 224
初の矢に等閑の心あり 249
はじめより心得て 486
はじめよりいなといひて止みぬ 374
橋本やなほ水の近ければと

覺え侍る 196
走らかしたれば 239
走り出でて行きつゝ 471
走り入りたり 239
走りていそがはしく 216
走りて坂をくだる輪の如く 467
走る歌 313
はたをつぎて 189
はたし侍りぬ 156
はたとつまりて 343
八月十五日九月十三日 591
恥ぢがましく心憂き事のみありて 440
八災といふ事を忘れて 586
恥に臨むといふとも 531
はづかしからぬかは 167
はづかしかりき 448
はづかしく 283
初雪の朝 193
はては 106, 152, 354, 440
鼻をおしひらめて 159
花園左大臣 22
花橋は名にこそおへれ 63
はなちて 203
花に鳥つくるすべ 191
花のさかり 410
花のちり月のかたぶくを慕ふならひ 348
鼻の中ふたがりて 131
花の外に夕をおくれれば弊百里に聞ゆ 583
鼻のほどをごめて 210
花のもとにはねちより立ちより 353
花はさかりに 347
花はひとへなるよし 366
はなひたる時 143
花見にまかれりけるに 347
花もけしきだつほどこそあれ 63
花も見なれぬ 370
花やかなりしあたり 90
はなやかなる聲にうちしきれば 274
はなれて 506
はなからず文かきちらす

115
はゝかる事 271
はふはふ 243
はぶれにたれど 5
侍るとかや 333
はまゆか 506
はやく跡なき事にあらざめり 151
林にたのしぶを見て 314
はらあしき人 141
はらはぬ庭に花ぞちりしく 97
はらはらと 200
遙かなる苔の細道をふみわけて 40
遙かなる田の中のほそみち 137
遙かなるほどなり 237
遙かにたやすく候べし 460
遙かにへだたる所のありぬべきぞ 45
春のいそぎにとりかさねて 73
春のくれつかた 133
春のけしきにこそあめれ 62
春の日に 416
春の物なりとばかりいひて 513
春は家を立去らでも 351
春はやがて 400
はれまどひて 131
萬金を得て一錢を失はむ人 252
萬事を放下して 600
萬事にかへずしては 471
萬事にわたるべし 249
萬事の用をかなふべからず 530
萬事は皆非なり 124
番にめされ 552

ひ

火打羽 193
比叡山 144
比叡山に 502

火をおく 520
日をさゝぬ事なれば 470
日を消し月をわたりて 288
火かゝげよ 80
僻事 318, 378, 547
僻事をのみ罪せむ 378
僻事せむとてまかるものなれば 512
東を枕として 334
東三條殿 402
東にむきて 134
東山 151
日かずのはやく過ぐるほど 103
ぞものにも似ぬ 103
ひかせて 394
ひがひがしからむ人 107
ひきかへ 76
ひきしろひてにぐる 445
ひきつくるはまほしき 480
ひきつくるふ 284
ひきつくるへるさま 117
比丘 280
比丘尼 280
日ぐらし硯にむかひて 1
日暮れてゆするし 480
日暮れ途遠し 297
日來かひつけて 412
日比こゝにもし給ふ 198
日ごろの人とも覺えず 439
日來の御氣色もたがひ 325
ひさくの柄はひもの木とかやいひて 566
ひざさち、ことつち、はうはら、おとうじ 301
久しく居たるいとむつかし 425
久しくおとづれぬ比 115
久しくなりて 101
久しくへだたりてあひたる人 167
軾(ヒザツキ) 268
膝にあかゝれば 590
膝もとに置きつゝ 179
ひしと 148
ひしひしと馴れぬる 444
非修非學の男 280
聖 279

聖の教	315	人を見るに	177	人に知られじ	389	
聖法師	217	人をやぶらせぬは	457	人にたはぶれ物にあらそひ	215	
秘蔵の事	463	人をやりて見するに	151	人には木のはしのやうに思	はるゝよ	6
秘蔵の事なり	540	人思へり	384	人にはたのまるゝぞかし	374	
ひそかに是を存ず	536	人をわかず	567	人にひとしく定めて食はず	182	
火たきて候ひけるが	268	人感じあへりけり	448	人に本意なく思はせて	330	
ひた斬りに斬りおとしつ	238	ひときは	34	人に勝らむ事を思はば	330	
ひたすらたはれたる方には	あらで	人きはまりてぬすみず	378	人にまされりと思へる	419	
ひたすら世をむさぼる	27	一きはめでたき	480	人に交れる見ぐるし	415	
直垂などのさふらはぬにや	524	人くふ犬	457	人に見ゆ	127	
直垂のなくて	523	人くふ馬	457	人にもいひけたれ	419	
額髪はれらかにかきやり	439	人げにせかれねば	571	人にも語り聞かせ	219	
額のほど鼻になり	132	一事すぐれたる才能ありて	420	人に物をとらせたるも	563	
ひたぶるに徳をつくべきな	り	人ごとくに急ぎあへる	72	人に許され	390	
ひたぶるにむかへすゑたら	む	一事も見もらさじとまばり	て	人の	180	
ひたぶるの世捨人	7	ひとしからぬなり	464	人の興ふる取にあらず	340	
棺をひさぐもの作りてうち	おくほどなし	ひとしがるべし	246	人のあやまりなり	332	
筆者の許へいひやりたるに	583	人しづまりて後	100	人の命ありと見るほども	416	
悪田院	373	人すまぬ野ら	90	人の命は雨のはれ間をも待	つものかは	471
人あまた	127	一度はうらみ一度はよるこ	ぶ	人のいひける	242	
人あまたあれど	168	一つ落ちにけり	202	人のいひしまゝに	210	
人あまたさそひて	573	一つをつけてまるらせけり	191	人のいふ事なればさもあら	むとて	485
人あまたつれて	578	一つなりともまさらむかた	へこそつくべきを	人のいふほどの事	374	
人あまたともなひて	584	一手もいたづらにせず	468	人の後にさぶらふは	355	
人いたくあぢがはず	210	人と生れたらむしるしには	174	人の上をのみはかりて	338	
人出で入らず	501	人としては	418	人の上にて見たるだに心う	し	438
人いひかけてむや	296	一年の相	187	人の愁喜	296	
人いよいよあざける	253	人とほく水草きよき所	78	人の得させければ	60	
人をおきたれば	354	人とむかひたれば	425	人の仰せられけるとかや	283	
人をおきて	291	人とする事はあなる物を	242	人のおほせられし	67	
人をしてかゝるめを見する	こと	人に愛樂せられずして	339	人の鏡	11	
人をないがしろにするにあ	り	人に争ふ	418	人のかたりしこそ	39	
人をばえきらぬなり	322	人にいでまじらはむことを	思ひ	人のかたり給ひけるいとを	かし	562
人をはかり欺きて	330	人にうとくてありなむ	218	人の門たゝき	74	
人をはかりて	482	人におくれ	320	人のがり	107	
人をはかる事あらむに	485	人におそれ人に願ふる	340	人のがり行く	425	
人を見る眼	485	人に思ひあなどられぬべし	223	人の口にある歌	197	

ひとの國にかゝるならひあ	なりと	438	ひとりあるこゝちやせむ	44		
人の國にて見え給ひけれ	230	一筆のたまはせぬほどの	107	ひとり顔ふかくかくして	589	
人のけしき	479	ひとへなるがとく咲きたる	も	ひとりずみ	475	
人の賢を見て	232	ひとへなるが先づ咲きて散	りたるは	ひとりたうべむがさうざう	しければ	524
人の心	232	ひとへに	120	ひとりにむきて	168	
人の心おとれりとは思ひ侍	らず	373	ひとへに逃見るをばいふ物	かは	349	
人の心をまどはし	31	人の志	516	偏に愚癡なる故に	326	
人の心の花	94	人の心の花	94	ひとへに苦樂のためなり	601	
人の心もあらはれぬべき	98	人の御覽じ知りて	591	ひとへに自由なる	464	
人の御覽じ知りて	591	人の才能	315	偏に信ぜず	212	
人の定めあひ侍りし	165	人の性何ぞことならむ	517	偏にすくよかなるものなれ	ば	374
人の是非	414	人の田を論ずるもの	511	ひとへにすけるさまにも見	えず	353
人のためにぞわづらはるべ	き	118	人のためにぞわづらはるべ	き	118	
人の智恵を失ひ	441	人の力争ふべからず	462	ひとへにのくとばかりも定	むべからず	538
人のなきあとばかり	103	人のほど心ばへなどは	31	ひとへにむさぼる事をつと	めて	174
人の申し侍りし	116	人のまうでぬ日	481	人木石にあらねば	130	
人の見聞くにはよるべから	ず	380	人の見聞くにはよるべから	ず	380	
人の耳にも達ひ	399	人の見るべきにもあらず	71	人みな感ず	579	
人の目だつべかめれ	31	人の物を問ひたるに	569	人皆興に入る	586	
人の世にある	530	人の世に	530	人みな生をたのしまざるは	死をおそれざるなり	253
人のわづらひなからむこと	を思ふ	432	人目なきに	271	人目をはかりて捨てむとし	437
人はいまだ聞及ばぬことを	569	人ばかり	26	人めなき山里ともいはず	139	
人ばかり	26	人はしづまりぬらむ	525	人も心おとりせられ	596	
人ばかり	26	一鉢のまうけ	173	人もなかりける隙をはかり	て	198
人は天地の靈なり	517	人はなれなる	277	人も皆	238	
人はよもめさじ	322	ひとり	116	一夜の夢	27	
一人ありかむ身は	242	ひとりあるこゝちやせむ	44	人よりもまさりて甚だし	326	

ふ	二つは逃げぬ	534
風運のおもひを觀ぜしかば	ふたつもじ	185
風月の才に富める	二つ忘れたりければ	553
夫婦をとまなひ	二棟の御所	193
深き道は知り侍らず	二人河原へ出であひて	304
ふかき水は涼しげなし	扶持し給ひけり	553
ふかき山の杉の梢に見えた	藤のおぼつかなききましたる	64
る木のまのかげ	藤のさき	193
ふかき故あらむ	藤袴	369
舞樂	佛事の妨に侍るべし	304
ふかく案じ	佛事の後酒などすむる事あらむに	466
ふかく信をいたしぬれば	佛神の本縁をうたふ	550
深くたばかりかざれる事は	ふつゝかに思ひとりたるにはあらで	19
不堪	佛道をねがふ	261
不堪の閉えもあり	佛法までをなすらへいふべきにはあらず	487
不堪の藝	筆をとれば物かゝれ	403
吹きうる人かたし	筆にまかせつゝ	71
吹きすさびたる	筆にも書きとゞめぬれば	208
吹きやみて	ふと思ひしまゝに	129
奉行の入道	舟岡	358
不具なるこそよけれ	不便にせさせ給ひければ	553
文車	不便のわざ	378
不幸に	文	207
臥したりけり	文あきらかにして	315
ふしはかせを定めて	文をひろげて	46
不定	文をも讀みけり	179
不定とおもへば不定なり	文をやるとて	107
不定と心得ぬるのみ	書ども	311
府生殿	文にも侍るとか	312
ふす猪の床といへばやさしくなりぬ	文にも見えず傳へたる歌もなし	160
ふすぶる	文のこたば	80
食なくて藁一束ありける	文の箱はおほく右につく	256
二方に刃つきたるものなれば	文も久しく聞えさせねばなどばかりいひおこせたる	426
ふたぎ	冬枯	72
二すぢの中より	冬せばき所にて	443
二つづつ	冬の月	60
二つのわざ	冬はいかなる所にも住まる	466
不用なり	164	
風流の	354	
ふるき歌ども	162	
ふるき歌の詞書	49	
古き御帳の内に	362	
ふるき墳おほくは是少年の人	364	
ふるき墳は	147	
ふるき典侍なりけるとかや	106	
古きひさくの柄ありや	450	
ふるき人	565	
古き寶藏の繪	81, 511	
ふるまひて興あるよりも	184	
ふるめかしきやうにて	562	
古き世のみぞしたはしき	225	
故郷の人	79	
ふるゝ所の益	373	
ふれふれこゆき	404	
文永	455	
文保に三井寺焼かれしとき	557	
分別みだりに起りて	235	
へだてなきどち	216	
へだてなくねぬる人	443	
別殿の行幸	167	
へなたりと申し侍る	450	
變化の理を知らざればなり	409	
遍照寺	542	
辨説	390	
邊土	479	
辨の乳母	29	
便利	252	
ほい	539	
本意を違げずして	365	
175	288	

本意なきわざなれ	10
ほいなし	169
坊	179
放逸無慚	304
寶篋印陀羅尼と申されたりける	546
放下	297
寶篋	449
法顯三藏	230
法顯傳	452
法金剛院	541
法事禮も同じく善觀房はじめるなり	556
法師ども	162
法師どもを返して	588
法師共まゐりたり	139
法師にならむとする名殘	158
法師のみにあらず	223
法師のやうにもあらず	230
法師まじりて	412
法成寺	91
法成就の池にこそとはやすは	454
坊主	235
庖丁を見ばや	561
坊におはしましし比	580
法然上人	125, 555
坊のうちの人も見えず	132
坊の傍に	141
法の字をすみていふわろし	409
放免のつけ物	542
放埒せざれば	390
ほかげ	479
外の色ならねば	29
外の樂	252
外より入来るぼろぼろの	303
外よりもすぐれたり故は	540
北山抄	491
北首に御座なりけり	335
牧馬を彈じたまひける	202
北面	254, 384
北面をはなたれにけり	255
細き孔をあけたらむに	358
ほそきもとゞりさし出し	445
菩提におもむかざらむは	174
ほだし多かる人の	377
法華堂	93
法華讀誦	200
法華の筆受	289
佛につかうまつる	57
佛の多き	206
佛の御歌にたがふらむ	7
佛の道うとからぬ	18
佛はいかなるものにか候らむ	603
ほどこそあらめ	105
時鳥や聞き給へる	282
程なく待ちつけぬべし	358
程なければほのぎこゆ	274
ほどにつけつゝ	5
程につけて	188
ほどへて見るは	167
ほゝゝみてゐたれど	485
ほまれを愛するは人の閉きを喜ぶなり	121
譽はまた毀のもとなり	121
譽むとも聞入れじ	297
ほら貝	114
ほらぬ所もなく山をあきれども	163
堀	141
堀川大納言殿	580
堀川殿	534
堀川院の百首の歌	95
堀河相國	262
堀河内大臣	282
堀池の僧正	141
堀りすてたりければその跡	141
ほりすてられ	397
堀へおとしてけり	279
堀へ蹴入れさする	280
ほれたる顔ながら	445
ほれて忘れたること	216
ぼろぼろ	303
本經のたしかなるにつきて	546
本草に御覽じあはせられ侍れかし	345
本寺	534
本寺本山	415
犯人	501
本文も見えず	498
ま	
毎度たゞ得失なく	249
まゐらすべきよし	190
まゐらせたりける	154
まゐらせよ	264
まゐらせられたりける	394
まゐらぬかは	457
まゐらぬ事にてあらむにこそあれ	457
まゐられるに	490
まゐりたりし	151
参りたりしに	196
参りたる人ごとに	156
参りて	163
参るほどに	203
まゐるやうあらじ	456
まうけて	180
申させ給ひける御歌	185
申されき	525
申されけるによりて	402
申しあはれければ	146
申しうけて	402
申して止めぬ	591
亡者の追善	546
安心迷亂すと知りて	600
申せば	144
まうでけり	156
まうでつゝ見れば	105
摩訶止觀にも侍れ	216
まかせられむとて	153
まかり	151
まがり	264
まかり出でにけり	346
罷り出でにけり	146
まがりしてぞめしける	265
まかりたりしに	524
退出にけり	270
まぎるゝ方なく	215

まぎれくらし	474	又しかなり	474	また時の間の煙ともなりなむ	35	又武勝に	191	また使來りて	523	またなくあはれなり	351	またなくあはれなる	72	また法令には	503	又々數ふれば	359	又々すみやかに去るべし	121	又よしと思ひつきぬべし	117	またらに候も見苦しくや	460	又わたらむまで	355	又我も	209	待ちとるついで甚だはやし	400	先づ機嫌を知るべし	399	待つことしかも急ならざる	401	待つこともなく	19	貧しくて分を知らざればぬすみ	332	まづさし入りて	548	松下禪尼	459	先づ柱をさぐられたりければ	202	全く貧者と同じ	532	松たてわたして	76	先づ使を遣はして	526	松どもともして	74, 243	松尾	88	松は五葉もよし	366	先づ賦を召さるべくや候らむ	268	待つ人はさはり有りて	474	先づ道すがらの田をきへ刈りもてゆく	512	祭	354	祭過ぎぬれば	361	祭の比	67	祭の日	542	まづ我が頸を斬るゆゑに	322	萬里小路殿御所なりしに	514		
またしかり	580	またひす	28	またひて	445	惑ひ逃げにけり	559	またひの上に酔へり	216	またひ易く	215	またへるものはこれを恐れず	214	惑へるわれらを見むこと	487	またろむ	16	學び聞く	392	まぬき行くほどに	360	まはり	160	まばゆからず顔をうちさゝげて	439	舞出でたるに	159	舞の手	549	前板	301	前なるをば人におほはれぬ	428	前なる人ども	129	前にて	527	前の河原へまゐりあはむ	304	前へ出づること待ちざりき	310	まぼりて	428	まゝ子立	359	間々に	537	豆の殻	200	まめやかならざらむ	148	まめやかなる御物がたりに	274	まめやか心の友には	45	まもり給ひけるほどに	397	まもり防ぐつとめ	313	迷をあるじとしてかれにし	286	まよひの心	124	客人に饗應せむと	299	鞠	292	まれ人の變態	562	まろくふちもなくてぞありし	112	満座	159	萬葉集の長歌に	514

み

御有様はさらなり	4	みえけるが	132	みえざりしかば	129	見えむこそ	9	身をあやぶめて碎けやすき事	431	身をあやまつ	432	身を修め國を保たむ道	293	身ををしと思ひたらず	32	見おくりつゝ行けば	137	身をたすけて愁なく	432	身をたすけむとすれば	177	身をたて大きなる道をも成じ	466	身を守るにまどし	118	身をも人も頼まざれば	516	身を養ひて	213	身を養ひ人をたすけ	316	身をやぶるよりも心をいたましむるは	328	御垣が原の露分け出でむる	597	明の空	597	みがきたて	35	御門の御うしろみ	91	御溝(ミカハ)にちかきは	496	御薪にすゝけたれば	447	汀	72	御國ゆづりの節會	97	見ぐるし	263	御車に頭をうちあてられにけり	301	御車のしりに候ひけるが	301	御車は門の下に	273	御氣色あしくなりて	301	見ごと	354	御着何などいひて	444	見さま	168	見さまなどあしからぬ	564	見しま	354	御隨身	384	御隨身近友	577	御簾をかゝげて	559	見過しがたきを	134	御簾の中	145	御簾の中より	443	御簾のやぶれ	134	未曾有の悪行なり	280	味噌の少しつきたるを	525	見奉るも	283	御手洗に影のうつりける所と侍れば	196	みだりにせず	390	道を學する人	249	道を行ぜむと待つことなかれ	147	道を知らざらむ人	461	道を知るものは植うることをつとむ	548	道を知れる教	293	道を正しくせば	430	道をたのしむ	435	道を學ぶとならば	331	道知れる人は更に信も起きず	208	道すがら	160	道に入りて	173	道に心得たるよしにやと	566	道に長じぬる一言	384	道にとりてはやんどなきもの	536	道になづまず	390	道に向ふ時	600	道のあるじ	422	道のおきてたゞしく	390	道の冥加	581	通憲入道	549	道々の物の上手	208	道行き人みだりに立入り	571	御帳	363	三足なる角の上に	159	水をくみ入るゝ事	154	水をめしけるに	264	みづからあきらかにその非を知る	419	みづからいやしき位にをり	120	みづから知らずといへども	349	みづからはいみじと思ふらめど	5	みづからはほこをだに持たず	544	自らもいみじと思へるけしき	221	水車	154	光親卿	145	水に洗ひて樂とせむよりは	532	三つの石をすてて十の石につく	468	水のけしき	78	水の流れたる所にて	300	御局	591	御堂殿	91	御堂のかたに	138	御堂のつとめばかりにあひて	338	御堂の廊	277	御堂の廊にかよふ	139	見どころおほけれ	347	皆おなじくわらひのゝしる	168	皆をはりかへ候はむは	460	皆追返してけり	198	みな源氏物語枕草紙などにことふりにたれど	70	六月祝	68	蟻といふ貝	407	皆馬驚させる事なき事どもなり	578	皆人嘲りて	252	皆人の興ずる虚言	210	皆人のさうぞく	99	皆人の前すゑわたす	182	皆ひとへにてこそあれ	367	南面のかうし皆おろして	134	南にはあらず	335	みなむすび	407	源光行	550	身に灸をくはへて三里を焼	
----------	---	-------	-----	---------	-----	-------	---	---------------	-----	--------	-----	------------	-----	------------	----	-----------	-----	-----------	-----	------------	-----	---------------	-----	----------	-----	------------	-----	-------	-----	-----------	-----	-------------------	-----	--------------	-----	-----	-----	-------	----	----------	----	--------------	-----	-----------	-----	---	----	----------	----	------	-----	----------------	-----	-------------	-----	---------	-----	-----------	-----	-----	-----	----------	-----	-----	-----	------------	-----	-----	-----	-----	-----	-------	-----	---------	-----	---------	-----	------	-----	--------	-----	--------	-----	----------	-----	------------	-----	------	-----	------------------	-----	--------	-----	--------	-----	---------------	-----	----------	-----	------------------	-----	--------	-----	---------	-----	--------	-----	----------	-----	---------------	-----	------	-----	-------	-----	-------------	-----	----------	-----	---------------	-----	--------	-----	-------	-----	-------	-----	-----------	-----	------	-----	------	-----	---------	-----	-------------	-----	----	-----	----------	-----	----------	-----	---------	-----	-----------------	-----	--------------	-----	--------------	-----	----------------	---	---------------	-----	---------------	-----	----	-----	-----	-----	--------------	-----	----------------	-----	-------	----	-----------	-----	----	-----	-----	----	--------	-----	---------------	-----	------	-----	----------	-----	----------	-----	--------------	-----	------------	-----	---------	-----	----------------------	----	-----	----	-------	-----	----------------	-----	-------	-----	----------	-----	---------	----	-----------	-----	------------	-----	-------------	-----	--------	-----	-------	-----	-----	-----	--------------	--

かざれば 387
 みにくきすがたを待ちえて 27
 みにくいぶせく 397
 見にくし 227
 身にしまて 351
 身にせまりぬる事 148
 見ぬいにしへの 91
 見ぬ世の人 46
 身の上の非 338
 義笠やある 471
 身の数ならぬをも知らず 338
 身の後 118
 身の後の名 121
 身のまたく久しからむことば思はず 432
 御墓 23
 見侍りに 129
 耳おどろく事のみあり 211
 耳にとままりて 294
 みめよく 181
 身もくるしく 297
 都こひしうおぼゆれ 351
 都に恥ぢず 540
 都のそらよりは 140
 都のつとにかたらむ 575
 都へたよりもとめて文やる 53
 都よりは目とまる心ちして 138
 官司 196
 宮仕にたちぬ 355
 見やれば 151
 御湯殿の上 308
 見ゆれ 217
 妙観 558
 名聞ぐるしく 7
 名利 118
 名利におぼれて 214
 名利の要をもとむるにかくのごとし 124
 見ることのやうにかたりなせば 168
 見る目もくるしく 35
 見るもおもしろく 165
 見るものかは 347

見れば 134
 未練の狐 559
 三輪 88
 む
 むかし 563
 むかし有りけるひじりは 148
 むかしおぼえて 35
 昔たゞ人におはしましし時 446
 昔の人これを忌まず 246
 むかしの人に及ばず 172
 昔の人はいさゝかの事をも 581
 むかしの人のよめるは更に おなじものにあらざ 52
 昔の反古 80
 むかし見し妹が垣根は 95
 昔物語を聞きても 204
 昔よりいひける事にや 455
 昔よりの名なり 333
 むかしよりはるかに高く 189
 むかひ居たらむは 44
 むかひむたりけむ 160
 むかひなる 129
 迎ふる氣下にまうけたる故に 400
 向きて 440
 無下なり 575
 無下に 378
 無下に色なき人におはしけり 590
 無下に心うかるべきことなり 518
 無下に心おとりせらるゝわ ぎなり 476
 無下にこそ 230
 無下に能なきは 466
 無下の環理 390
 無下の事をも仰せらるゝ物 かな 471
 無下の事なり 173
 武蔵の國金澤 114

食る心にひかれて 340
 食ることのやまざるは 340
 蟲の巢にて 585
 蟲のつきたるもむつかし 367
 武者を集むること 187
 無常 177
 無常のかたき 360
 無常變易のさかひ 247
 むつまじき中にたはぶるゝも 330
 空しくなし給ひつること 238
 むねとあらまほしからむ事 468
 むねとする事はなくとも 315
 胸にあたりけるにや 130
 むまのきつ 343
 無益の事を思惟し 288
 無益のわざをなさず 432
 無用のものどものみとり積みて 311
 紫の朱うばふを悪むといふ文 580
 無量壽院 92
 め
 明雲座主 385
 命ぜられて云く 536
 目をよるこばしめつるは 397
 めぐむ 400
 目くるめき技あやふきほどは 291
 めぎむるこゝち 53
 目ざめぬれば 182
 召し具して 237
 めしける程に 179
 めしとられて 395
 めづら 354
 めづらしかりぬべし 477
 めづらしき事をもとめ異説をこのむは 306
 めづらしき禽あやしき歌 314

めづらしく 274
 めづらしげなし 229
 めでたかりけり 154
 めでたき 382
 めでたきものなり 368
 めでたくこそ聞ゆれ 84
 めでたく作り改めらるべきよし 263
 めでたく優なる 85
 めでたしと見る人の 9
 めなもみ 256
 目なれぬ事のみぞ多かる 53
 目なれぬ文字をつかむとする 305
 目のさめたらむほど 126
 目の前なる人の愁をやめ 430
 目の前にさびしげになりゆくこそ 356
 目の前に大事の病者となり 438
 目はいたゞきのかたにつき 132
 目もあてられずすぢりたるを 439
 めやすかるべけれ 27
 めやすくあらまほしけれ 392
 面目あるやうにいれぬる虚言は 210
 も
 もえ出づ 62
 若しあらましかば 181
 若し數歩の心かおぼつかなし 583
 もし又生死の相にあづからずといはば 253
 文字も功能も 345
 もたぐる時 322
 點止する事なし 414
 持たでぞあらまほしき 371
 もたらぬ 76

持ち給ひたるにて 203
 望月のくまなき 350
 望月のまどかなる事 598
 尤も愛するに足れり 397
 持つべしとにもあらず 225
 もてあげよかきあげよ 80
 もてあつかひぐさに 218
 もて興ずる 370
 もてしづめたるけはひ 272
 もて參らせ給ひき 581
 もてる調度 54
 もてる調度にて 225
 基俊卿 262
 基俊大納言別當の時になむ侍りける 412
 もとのすみか 104
 もとのやうに 203
 本は相府運 521
 もとむる所はやすく 173
 求め出でて 239
 もとめいとむ 318
 もとめ得ざる 318
 もとめさするに 588
 求めざらむにはしかじ 602
 求めず 305
 求めたまへとありしかば 525
 元良親王 333
 もとより望む事なくしてやまむは 392
 物洗ふ女のはぎ 29
 物いひたる聲も暗くて聞き 479
 物うちいひたる聞きにくからず 8
 ものうちいひたるけはひにこそ 31
 物をいひなすに 208
 物をしへたぐること 327
 物語すとて 373
 物がたりする 168
 ものごしにも知らるれ 31
 物ごとにあはれなれ 62
 物さわがしからぬやうに 176
 ものとはなしにとぞかける 50

ものなれぬ人の有る事なり 570
 物にあはず 537
 物にあらず 330
 物にさかひあらそひてやぶる 517
 物にも乗らぬきは 440
 物によるべきにや 577
 物のあはれは秋こそまされ 62
 ものあはれは知りたまはじ 377
 ものかくれより 109
 物のきらなど見えて 273
 物の理を知らず 285
 物の上手 466
 物の名 220
 もの音には笛筆簾 56
 もの音のめでたくとゝのほり侍ること 540
 ものはえなし 479
 ものふりたる 87
 物見けるきぬかづき 203
 物みな幻化なり 247
 物みる 129
 物も蕭あへず 445
 紅葉ちらしかけなど 162
 紅葉のちりとどまりて 72
 桃尻 384
 もゝじり 466
 百たび戦ひて百たび勝つとも 223
 母屋の御簾に 362
 もりちか入道 413
 森のけしき 87
 もろこしに 59
 もろこし船 311
 もろ矢 248
 文字のかよへるなり 521
 文字の法師 483
 文選のあはれなる巻々 46
 門に雨宿り 396
 門の下 440
 や

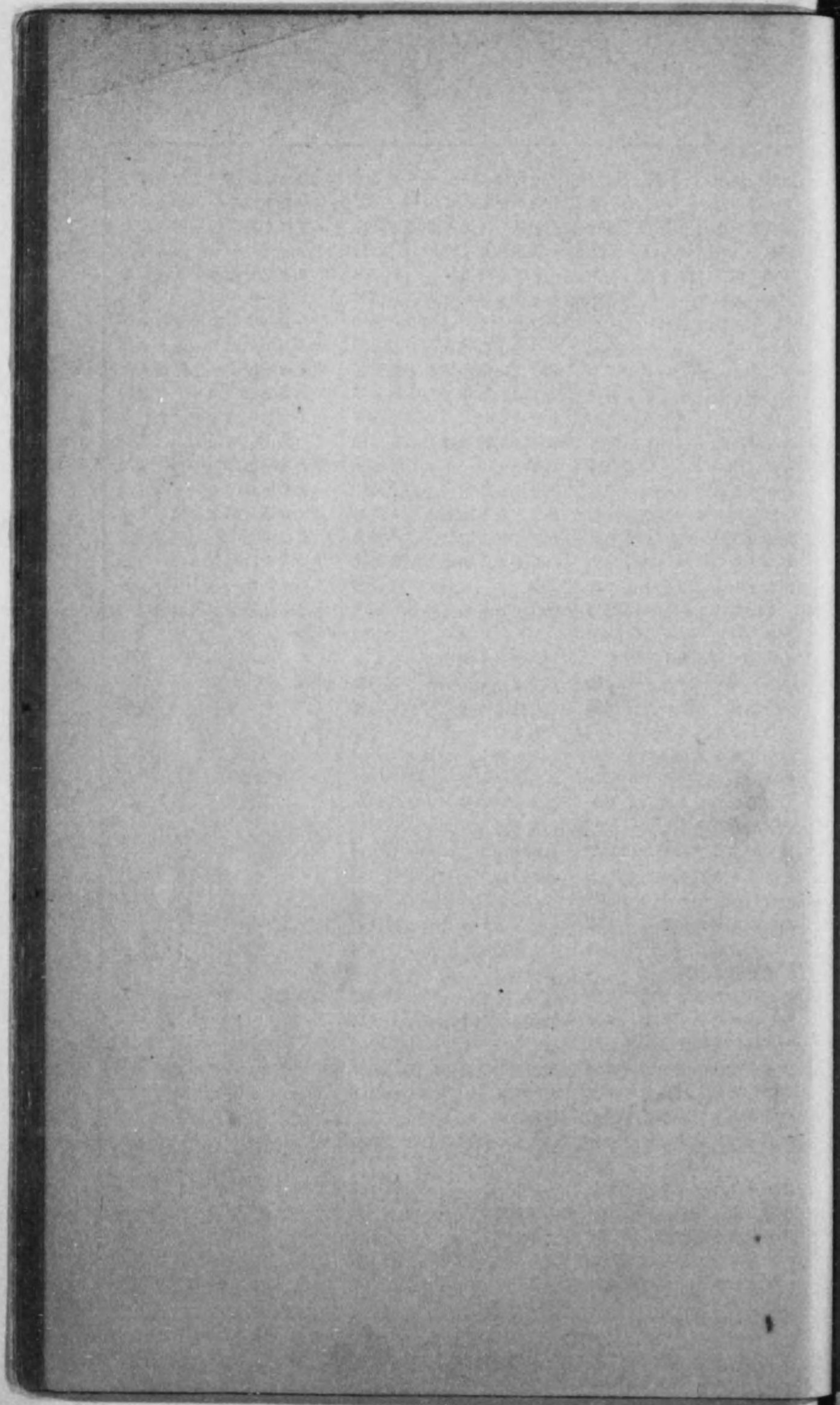
やうやう夜寒になるほど	破れに近き道なり	229	有職のふるまひ	146
漸くおろかなるに似たり	八重櫻はことやうのもの	369	優なる女	590
やがて	八重櫻は奈良の都にのみ	367	優に情ありける	230
やがて案内せさせて	山里などにうつろひて	103	ゆゑづきたるさま	136
やがておもひぬれば	山階左大臣	283	ゆかし	278
やがて御文にて	山だちあり	238	ゆかしかりしかど	156
やがてかきつくまゝに	山寺	57	ゆかしきを	356
やがてかけこもらましかば	山ならねども	242	床しきところなし	345
やがてかけぬ	山のきはに惣門のあるうち	137	ゆかしくおぼえむ事は學び	392
やがて具して出でぬ	病をうけて死門にのぞむ時	599	聞くとも	392
やがて盡きぬべし	病を神靈にうたふ	430	ゆがみもじ	185
やがてと申しながら	病をまうく	441	ゆかむかたしらまほしくて	137
やがてひとり打食ひて	病なく身つよき人	307	親かけられたりける神なり	500
やがて又定まりぬ	病にもまつはれ	296	行きとぶらふ中に	217
焼きて食ひける	山吹のきよげに	64	雪の頭を戴きて	340
約	山へのぼりし	156	雪の事何ともいはずし返	107
益あるべきわざ	山までは見ず	156	雪の降るに	453
約をかたくすべし	止まむ人は止み修せむ人は	290	行房朝臣	582
益なき事なり	修せよ	290	雪佛	416
やけ野	止みぬ	527	ゆくす五難なくしたゝめま	176
やさしく面白きことのかぎ	やみぬる	120	うけて	176
り	止みぬる	485	行末久しくあらます事ども	466
やしなひ飼ふものには馬牛	やゝ	143	行く末までとおぼしおきし	91
やしなひ君	やゝ春深く	62	時	91
社の御前の水	やりすつる	100	行く處あり歸る家あり	213
やすかるべき事	遣戸は葎の間よりもあかし	164	ゆくほどに	237
安く	遣水の音のどやか	140	ゆふ	87
やすくおもへば	やり水より煙のたつ	72	夕月夜	272
やすくすなほにして	やんごとなからむにも	21	夕には朝あらむことをおも	249
やすらかなるこそ	やんごとなかりけむ跡	91	ひ	249
やすらかにゆひて	やんごとなき魚なり	308	夕の月のみぞ	105
やすらかに世を過すありさ	やんごとなき事	146	夕の陽に子孫を愛し	27
ま	やんごとなき事	146	弓射馬に乗ること	316
やすら殿	やんごとなきほまれ	197	弓ひくすべ知らず	223
やすら殿のがりまかりて候	やんごとなきものなり	154	ゆゑし	99
奴したがへりとして			ゆゑしくありがたうおぼゆ	472
八つになりし年			れ	472
宿のあるじ			ゆゑしく信おこしたり	574
柳宮			ゆゑしくも尋ねおはしたり	303
柳原				303
八幡の御幸			ゆゑしげなるは	355
やはらぎたる所			ゆゑしと見ゆ	5
			ゆらりと越ゆる	461

ゆ

ゆるくしてやはらかなる時	よきばくち	323	よきはよく	54
は一毛も損せず	よき人	34, 168, 211, 221, 353, 362, 444	よき程にて	109
許さざらむは	よき一言はいふものなり	377	よきものを持つよしなき事	260
許さぬものどもおしとりて	よきやうなるけはひして	443	なり	260
ゆるし給はらむ	よく味を調へ知れる人	316	よく安置してむや	416
	よく案内知りて	219	欲を成して樂とせむよりは	532
	よく知らざりけるにや	554	よく知らぬよしして	210
	よくせざらむ程は	389	よくぞ見せ奉りける	583
	よくはきのごひて	585	欲に従ひて志を遂げむと思	530
	よくひて	203	はば	530
	よくわきまへたる道	221	よくはきのごひて	585
	よくわらふにぞ	168	よくひて	203
	横ざまにひき出す事は	510	よくわきまへたる道	221
	夜寒の風	139	よくわらふにぞ	168
	吉田	88	横ざまにひき出す事は	510
	吉田と申す馬乗	462	夜寒の風	139
	吉田中納言	448	吉田	88
	よしと思ひ定めてこそ	476	吉田と申す馬乗	462
	よしなしごと	1, 105	吉田中納言	448
	吉野の花	367	よしと思ひ定めてこそ	476
	吉水和尚	196	よしなしごと	1, 105
	吉平	413	吉野の花	367
	よすが	172	吉水和尚	196
	よする作法	502	吉平	413
	よせてゆひつくるなり	502	よすが	172
	よそを見わたして	428	よする作法	502
	よそながら	477	よせてゆひつくるなり	502
	よそながら見る事なし	354	よそを見わたして	428
	よそにして	97	よそながら	477
	よそほひ	412	よそながら見る事なし	354
	よそまでわりなく取るとは	428	よそにして	97
	見えず	428	よそほひ	412
	よき細工	558	よそまでわりなく取るとは	428
			見えず	428
			世づかずめでたきものなれ	489

世の常なり	232	萬の興をそふるわざなり	443	律の禁なり	458
世の博士にて	390	萬の事さはりて	425	律の音なし	495
世のはかなき事	44	萬の事はたのむべからず	515	李部王の記	333
世の人の上	219	よろづの事は月見るにこそ	78	龍花院と書ける古き額あり	585
世の人もさのみはおほからぬにこそ	358	慰むものなれ	78	隆辨僧正	527
夜の間に牛死ぬ	251	萬の事外にむきて求むべからず	429	諒闇	98
世はさだめなきこそいみじけれ	26	萬の事もはじめをはりこそ	349	凌雲の額を書きて白頭の人となりしためし	328
夜半すぎるまで	74	をかしけれ	349	良覺僧正と聞えしは	141
よばるゝことありしに	523	萬のしわざは止めて暇あるこそ	392	料簡のいたり	537
夜ぶかき鳥	274	萬の畜類	174	療治とて籠り居て	179
夜深く急ぐべき所のきまにもあらねば	274	よろづのとがあらじと思はば	567	梁塵秘抄	52
夜ふくるほどに	480	萬のねがひ此の三つにはしかず	602	兩説なれば	256
喚子鳥	513	萬の道に	220	料の御牛飼ぞかし	301
よませ給ひけるとかや	97	萬の道のたくみ	483	呂律の物にかなはざるは人のとがなり	538
よも	459	萬の道の人	463	りんだう	369
よもあらじなどいふも	212	萬の病	179		
よやよや	243	よろづの用にも立ちてよし	165		
よゝと飲みぬ	237	よろづ許されけり	183		
よりて	203	よろぼひ行きて	440		
夜のほかげぞよきはよく	479	弱腰をとる	194		
夜の設せよ	84	世わたるたづきともせよ	465		
夜のみこそめでたけれ	479	夜のおと	334		
よろしきよし沙汰ありて	51	夜御殿のをば	84		
よろづ	13, 100, 154				
萬をさしおきて	530				
よろづ自由にして	182				
よろづたがふべからず	210				
よろづに	377				
萬にいみじき薬とて	198				
萬にいみじくとも	15				
よろづに心づかひせらるれ	54				
よろづにたい心をもみぞなやます	63				
萬にへつらひ望深き	378				
よろづに見ざらむ世までを	93				
萬の遊にも	330				
萬の戒を破りて	441				
萬の要おほし	316				
萬の神達太神宮へ集り給ふ	498				

六塵の樂欲	32	六波羅	395	我が世の外になりゆく	95	笑ひあはれければ	270
六波羅のあたり	451	露臺	83	和漢朗詠集	240	破子やうのもの	162
論語の四五六の巻をくりひろげ給ひて	580			わきざしたち	304	わりなく通はむ心の色こそ	594
				わきまへ知れる人	502	わりなく見むとする人もなし	355
				わけ入りて	590	我を知らずして外を知る	338
				わけ入りぬべき	129	我をほろぼすべき悪念きたれりと	530
				分けこし端山のなども相語らむこそ	595	我かしこげにものひきしたため	104
				わけゆくほど	137	我こそ得め	371
				和國は單律の國	495	我に心おき	117
				和琴	56	我にもあらずとり亂してはてぬ	599
				わき田かりほす	69	我はさやは思ふ	44
				わざとならぬ庭の草	34	われもかう	369
				わざとならぬ匂	109	わるき住居	164
				忘れがたき事などいひて	274		
				忘れがたき事も多からめ	594		
				忘れがたく思ひつかるゝ物なり	567		
				忘れ給はで	446		
				忘れぬものから	95		
				わたし奉らるゝほど	97		
				わたのべの聖	471		
				わたのべの聖のがり	471		
				わたりさふらふ	354		
				わたりし事	544		
				わたり過ぎぬれば	355		
				わづかに二つの矢	249		
				わづらはしかりつる事はことなくて	474		
				わづらはしく好みなせるをいふなり	225		
				わづらはしくなりて	131		
				わづらひ	118		
				わづらひとなる	438		
				わづらふ	152		
				わなの頭	510		
				わぬしの間はれむほどのこと	342		
				わびし	35, 168		
				わびしきや	45		
				藁のしべ	160		
				藁	158		
				藁名	547		



612

昭和九年六月十二日印刷
昭和九年六月十七日發行

佐野徒然草新講

發行所

東京市神田區駿河臺
三丁目九番地

藤井書店

電話神田四四六八番
振替東京七八三一三番

著作
所有

著作 佐野保太郎

發行 藤井寬

東京市神田區駿河臺三丁目九番地

印刷 出版印刷株式會社本所分工場

東京市本所區飯橋一丁目二十七番地

印刷 岡功

東京市本所區飯橋一丁目二十七番地

定價四圓

佐野保太郎著

徒然草講義

上下兩卷
定價各四圓五十錢
送料三十三錢

二松學舎専門學校教授橋純一氏曰く、佐野保太郎氏の近業徒然草講義が出た。蓋し百を以て數へられる徒然草註釋書の中、空前の大著といふべきである。本書の特色は、語句の釋義に於て、徹底的精確を期した註者の態度に在る。總じて言語及び事實の兩方面に互つて出来るだけの考證をした上で、其意義の正しい理解に達しようといふのが著者の終始渝らぬ態度である。その努力の結果は徒爾でなく、従來行はれてゐた解義上の誤を正し、又は看過されてゐた難義を發見指摘した箇所も可なりに多い。

佐野保太郎 藤井 寛共著

註解 萬葉集

讀者の聲

○假名交り書き下しの参考書としては白眉のもの、各方面に親切だ。殊に脚註がいゝ。(靜岡縣、藤原 清氏)
○註解萬葉集は、大へんよい本です。いろ／＼萬葉集の本は多いが、手頃にまとめられて居ること、まことに嬉しい本です。今までに買った本がいらなくなつてしまつたやうなものです。
(名古屋市、戸田一郎氏)
○廉價、しかも整つた印刷、内容、かういふ書がもつと世の中にあつたらとさへ感じます。(群馬縣、小高高一氏)

914.45

SA66

2

14

精神科學叢書

(1)	文學博士 福島政雄著	教育書としてのソクラテス	四六〇頁	洋裝	各	定價	壹圓	拾五錢
(2)	文學博士 清原貞雄著	思想的先覺としての山鹿素行	四六〇頁	洋裝	各	定價	壹圓	拾五錢
(3)	文學士 岩井龍海著	教育的社會學	四六〇頁	洋裝	各	定價	壹圓	拾五錢
(4)	佐藤熊治郎著	味ひ方と考へ方の教育	四六〇頁	洋裝	各	定價	壹圓	拾五錢
(5)	文學士 辻幸三郎著	各國教育學の現狀	四六〇頁	洋裝	各	定價	壹圓	拾五錢
(6)	文學士 日下恒著	國民生活の根本原理	四六〇頁	洋裝	各	定價	壹圓	拾五錢
(7)	文學博士 西晋一郎著	國民道徳講話	四六〇頁	洋裝	各	定價	壹圓	拾五錢
(8)	文學士 河瀬憲次著	形而上的なるものと認識	四六〇頁	洋裝	各	定價	壹圓	拾五錢
(9)	文學博士 福島政雄著	プラトンの教育思想	四六〇頁	洋裝	各	定價	壹圓	拾五錢
(10)	文學博士 久保良英著	環境の心理	四六〇頁	洋裝	各	定價	壹圓	拾五錢

以下續々刊行

終